科学と非科学の歯車

グリーンフレア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がついたら神様転生していた青年。

ふと自分の体を見ると見慣れた手足は無く、全くの別モノになっていた。

第二の人生を歩むことになる体、それは…

無人二足歩行兵器ＩＲＶＩＮＧ（アーヴィング）

通称”月光”もしくは”ヤモリ”と呼ばれる

「歩兵（メタル）と兵器（ルギア）をつなぐ歯車」であった。

月光を色々と活躍させたくて気付いたらネギま!にぶっ込んでました。

様々な設定を組み込むつもりですが、何とかストーリー等が破綻しないよう努力する所存です。

かなり不定期の更新となるでしょうが、完結を目指していこうと思っております。

文才も残念な事になっているので、そういったことでもアドバイスを頂ければ幸いです。

どうぞ宜しくお願いします。

タイトルを変更しました。

旧題「無人兵器になってしまった」

目次

ACT.1 これは憑依と呼べるのか ―― 1
ACT.2 遠すぎた街 ―― 13
ACT.3 バーチャスコンタクト ―― 23
ACT.4 いずれのルートも麻帆良へ続く ―― 34
ACT.5 やっぱり憑依だった ―― 42
ACT.6 あの橋の向こうへ ―― 54
ACT.7 科学ときどき魔法のち… ―― 62
ACT.8 エネミー ―― 69
ACT.9 登場！トリプル・・・？ ―― 76
ACT.10 学園祭に向けて ―― 90
ACT.11 取り扱い注意な箱 ―― 98
ACT.12 メッセージ ―― 105
ACT.13 作戦名は大切なので ―― 116
ACT.14 クラフティング？ ―― 124
ACT.15 それぞれの得物 ―― 131
ACT.16 地下水路の会合 ―― 139
ACT.17 程々のご都合主義 ―― 149
ACT.18 やはり魔法球は便利 ―― 157
ACT.19 痴女科学者と計画の行方 ―― 165
ACT.20 Gears ―― 174
ACT.21 嵐の中で・・・ ―― 185

ＡＣＴ．１　これは憑依と呼べるのか

とある山中の森。日は高く背の高い木々から木漏れ日が差している。

そんな森の一角、何もなかった場所に何処からとも無く光の粒子が集まり、一つの形を創りあげると光は消えていき無機質な物体となった。

それと同時にその無機質な物体に魂が宿り活動を始める。

（・・・うん？何処だココは？ディスプレイは何処に行った・・・？うーーーん？ついさっきまで自分の部屋でＰＣゲームをやっていたはずだけど、あれ何だか曖昧すぎて夢だったような気もしてきた。それなのに確信できるのは「死んで神様とやらと話をして転生をした」とかいうぶっ飛んだ事。なにこれ？）

彼は突然の事態に困惑しつつ記憶を頼りに何があったのか探ろうとするも、次々と疑問が湧いてきた。

（ん？でもどうして死んだんだ？全然思い出せないし、このもやもやした感じは何だ？

まぁ神様転生ってことならテンプレにあるように特典とかつけたりして、何でも出来るんだろうから記憶の改竄とかしたのか？でも、自分の名前が思い出せないってどうなのよ？）

『あれこれ考えても仕方ないかな』

思考をリセットするために声にだしてみたところ、すぐに新たな疑問が生まれる。

普段のしゃべる感覚とは全く違う声の響き方、明らかに高い位置にある目線、手足を動かす動作に妙な違和感を覚えるなど、疑問は挙げれば切りが無かった。

彼は今までの感覚のように自分の両手を見ようとするが、そこには自由自在に動く1本の黒いワイヤーと更にその先端から伸びる3本の細いアーム。

足を動かしつつソレを見てみると、見慣れた足などではない黒色の強いグレーに若干の艶と不気味さのある有蹄類と鳥類の脚を合わせたようなモノがあった。

（あ、これは・・・。）

何となく弄られていないと分かる自身の記憶に、この脚とピッタリ当てはまる存在がいた。

日本のみならず世界的にも人気を得ているゲーム「メタルギアソリッド」シリーズの一作、メタルギアソリッド4に初登場した無人二足歩行兵器”ＩＲＶＩＮＧ（月光）”である。

『何これ・・・。』

「・・ええやん!!ＩＲＶＩＮＧに転生とか素晴らしいやん！何がどうしてこうなったか分からんが、転生前の自分ようやった！　色々気になる事がたくさんあるけどまずは状況確認せんとな！あぁでも人工筋肉がピョンピョンするんじゃ～！」

傍から見ればＩＲＶＩＮＧがまるで小躍りしているかのようにウロウロする不気味な状態になり、独り言としてつぶやいていたはずの声もいつの間にか歓声となって漏れていた。

――数分後――

『よし落ち着いた。どの世界の何処に転生させられたのか分からない以上まずは情報収集するとして、取り敢えずは自機の状態から確認するとしますか。』

しゃがんで状況を把握することにした彼は、まずは今の体であるＩＲＶＩＮＧについてを知ることにした。
動作は人間の時のように体を動かすとそれに対応した部分が意図に応じた動きをするようになっていて、こういったハード面の動かし方は直ぐに慣れる。
ソフト面では目的の機能を意識しそれが実装されていると作動するような仕組みで物によってはＦＰＳやＴＰＳゲームでよくあるようなインターフェイスが視界内に出現しそれぞれの働きを確認する。
視野についてはＩＲＶＩＮＧの上半身に当たる部位の上面にある、半球型の周囲を見渡せる１基の多機能カメラがメインカメラになっている。その死角を機体各所にあるカメラがカバーして視差を完璧なまでに補正されていることで違和感なく周囲を見ることができていた。
体を動かさず３６０度ぐるっと見回すことが出来てその不思議な感覚に味わっていると、右側のハードポイントに据え付けられていたある物に興味を惹かれる。
そこにはブローニングＭ２とスモークディスチャージャーが遠隔操作銃座（Remote Weapon System）としてマウントされており、新しい玩具で遊ぶように操作しようといろいろ試した末にセーフティーのＯｎ―Ｏｆｆや自由に照準を合わせたりできるになった。

（試し撃ちしたいけど無闇に撃つのは危険すぎる『あ・・・ぉ、』なぁ。
確かブローニングの標準的な装弾数は１１０発程度『あのぉ、』だったはず、無駄弾は避けないとだし、この視点からアセンを見る限りだとＭ２と連装対戦車ミサイルの『あのっ！』
「んぉぁっ!?!!」
『ふぇぅあ!?』

機体の状態を把握するのに集中し聞こえていなかったせいもあり彼は耳元付近でいきなり声を掛けられたことに驚きその反動で彼も

思わず大声が出たことに加え、自機も大きく揺れ声を掛けてきた相手もかなり驚いてしまっているようだった。

「どどど、どちら様ですか!?そもそも何処から・・・?」

酷く動揺しながらも周囲を赤外線カメラや心音センサーで策敵しても声を掛けてきた人物は探知できず、もちろん死角となる後方下も確認したが誰も見つけられなかった。

『えっと、私は外じゃなくて貴方の側、この機体の内にいるので・・・』
『内?内って言うのは・・・つまりこのＩＲＶＩＮＧのシステム内ってこと?』
『うん、本来なら私はこの機体のメインＡＩ、今は貴方のサポートＡＩとして補佐するよう命令を受けてる。』

へぇ、と興味深そうに相槌を打ちながらこのサポートＡＩから他にも、

・このアーヴィングはＭＧＳ４に登場した型ではなく同作品の後年を題材にしたメタルギアライジングに登場する改修型を、神様が更に手を加えた”ＩＲＶＩＮＧ　Ｍｋ２　ｍｏｄ．ＧＯＤ”という機体であること。

・アーヴィングは大きく分けて、
1．主要装甲と機銃、小型カーゴスペース、一部のセンサーを搭載するヘッドユニット。
2．武装を積むためのハードポイントからメインカメラを初めとする大半の電子機器パック、各ユニットを繋ぐジョイント部、股間部のサブカメラまでを含めるボディユニット。
3．マニピュレーター＆ワイヤーアームを収容した股関節部と修復用ナノペースト／培養液を生体部に巡らす循環器や排熱機を収めた生体維持パックと、この兵器最大の特徴、燃料電池一体型人工筋肉

があるレッグユニット。
これら3ユニットで構成されていること。

・今現在の装備は
1．ヘッドユニット
M２４０　ＩＲＶＩＮＧ搭載用改修型（装弾数５５０発）
カーゴスペース　フラッグレネード４個
　　フラッシュバン　２個
2．ボディユニット
右ハードポイント　ブローニングM２重機関銃（装弾数１７０発）
　　スモークディスチャージャー４基　×　２（装填数８発）
左ハードポイント　ＢＧＭ―７１Ｉ　　ＴＯＷ３　ＩＲ　×　２
3．レッグユニット
股間部　ワイヤー型マニピュレーター＆ワイヤーアーム
以上。

・自分が意図した動作が人間の体の時のように少ない違和感で出来ているのはＡＩのサポートによるものであること。

・神様特典という事で半永久的に活動が可能なように、各種循環液や循環器にオリジナルとは違う細工がされた物を使用している。

・現在機体／装備の状態は非常に良好であること。
といった自機のステータスを確認したところで、このＡＩ子の声としゃべり方に思い当たるキャラクターがいた。自分の推測が当たってるか確認しようとしたところで、視界の端にメールのアイコンがポップアップされている事に気がつく。

送り主は小さく吹き出し状のスペースに「ｆｒｏｍ：君を転生させた神様」と書いてあり、何か有益な情報が書いてあるだろうと思いそ

のメールを開いてみることにした。

件名：神様から転生者君へ！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【本文】
転生後だから初めましてになるかな
このメールを読んでるということは状況の整理が大体済んだといったところだろう
色々聞きたいこともあると思う
でもボクから言えることは数少ない
その世界について言えることは、君が元いた世界が根本にあるのだけど、ちょっとばかし不安定であまりこちらからは介入が難しい世界ということとぐらいかな
さて、他に伝えれる事があるとするなら君をサポートしてくれる子たち、サポーターの存在だ
その子だけじゃなく、他にも色々な子たちを送り込んでいるからぜひ合流してもしいのだけど、あまり介入できないせいで詳しい位置はボクにも分からない
人格は君の記憶を元にしているけどどの子にどの人格が宿るかは分からない
もう目の前の子とはそれなりに会話もして誰を元にしたか察しが付いているだろう
加えて君の今の体やサポーターを整備したりする設備や装備も何処かにあるから回収し使って欲しい
最後に記憶について
転生させるときの規約としてボクと話してる時と生前の一部の記憶を消させてもらったんだけど、その時に手違いで君の名前を完全に

消去してしまったんだ
ホントにゴメンよ！
お詫びと言っては何だけど君のいる近場に1人サポートの子を送り込んでおいたよ
他の地域の子も一緒で詳しい位置はわからないのだけどね・・・
とにかく第二の人生、思う存分楽しんでくれたまえ！

神様より

『と、まぁ神様からはこんな感じでメールが来たけど君・・・　あー・・・確かアイラちゃんでいいんだっけ？』
しっかりと覚えている記憶からあるアニメに登場していたアンドロイドの名前を引っ張り出し尋ねてみた所、『ん・・・』と小さな声で肯定する。
『アイラ・・・だけでいい。私は貴方の下位個体だから。
それに・・・その・・・なんだか恥ずかしい、ので・・・』
『お、おう・・・』
（くそぅ・・・！くそぅ・・・！Ｓｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙとか冗談キッツイすよ！もう人間と変わりない反応見せてくれるじゃないですか！どうにか表情を見れるように出来ないものか・・・。）
『ところで、さっきなにか言いかけてたけど何？』
『え、あぁ　軽く周辺を色んなセンサーで探査してみたけれどやっぱ

り経験が足りないせいか、うまいこと操作できてないようで。
　そこで自分よりアーヴィングの事をわかってるアイラに周辺の地形や生物の判別と、神様の言っていた近辺に送り込まれたというサポーターを見つけたいと思ってね』
『そう・・・ん、分かった。任せて。』

　そう言うと彼女は先の会話の中で半自動的に与えられた権限の下、多数のシステムやプログラムを操作し、視野の邪魔にならない程度の場所に多種多様なＵＩが忙しなく動いていた。
（さっきの返事若干声を弾ませたように聞こえたのは気のせいじゃないはず。やはりどうにかしてアイラの表情を見れるようにしないと・・・。方法としてはテレビ番組であるようなワイプを視界の隅に表示するとかかなぁ。）
　次々と変わっていくレーダーやらセンサーの表示を、そんなことを考えながら眺めていると不意に一部の画面の更新が止まった。
　何かあったのかと思い訪ねようとするが先にアイラの方から質問が飛んできた。

『・・・１つ聞きいてもいい？』
『うん？何事？』
『貴方の名前・・・まだ、聞いてない。』
『あーそう言えば転生前の名前消去されちゃってたんだっけ。まぁ無人機の名称が日本人名で、っていうのは違和感すごいからこの際丁度いいのかもしれないけど。』
（せっかく親が付けてくれた名前、どこかモジッてそれをコードネームか何かにできたらよかったけれども、記憶がない以上はどうしようもないかな。）
『決まったら教えて』そう言うとアイラは周囲の監視を再開し、再び視界上の各表示が更新され始めた。

（名前、コードネームかぁ。今後この世界で活動するとなるとしっかりとした名前にしたいものだけど・・・）
（候補としてはこの無人兵器に関わる名称だと
”アーヴィング”、”月光”、”ヤモリ”、”メタルギア”、”アームズテック”、”デスペラード”
この辺りが挙がるけど”デスペラード”は「無法者・ならず者」というのような意味で印象悪いしアームズテックはなんか微妙。
ん？たしかＭＧＳ４でスネークたちが乗ってた輸送機の名前の意味が確か「放浪者」で”ノーマッド”て言ったかな。
よし、なんか語呂が悪い”アームズテック”と”デスペラード”は取り消して”ノーマッド”を候補に加えようそうしよう。
あとはそうだなぁ・・・・・・・）

幾つか候補が挙がっては消えを繰り返すこと十数分。

（最終的に”月光”、”ヤモリ”の２つに絞れたけどこれ、ヤモリ・ゲッコウでなんとなく名前っぽい。
でもそれだとコードネームらしくないからやっぱりどちらか１つかな。
・・・・・・・・よし、”月光”！”月光”で行こう。）
特に理由らしい理由はなかった。
強いて挙げるなら、元々”月光”の名称の由来は旧日本海軍が運用した夜間戦闘機から来ており、連合軍によって付けられたコードネームは”ＩＲＶＩＮＧ（アーヴィング）”ということ。
そしてＩＲＶＩＮＧは製品名としてこの無人兵器に付けられており、”ヤモリ”だと何だか響きが悪く、コードネームにするなら”月光”の方が良いというぐらいか。

『アイラ、自分のコードネーム決めて、”月光”にしたのだけどどうだろう？』
『このＩＲＶＩＮＧの通称そのまま。』

『いやまぁ、そうなんだよね・・・。なんかこういい具合の名前が思いつかなくてね。それで周辺の探査はどんな具合だった？』
『うん、半径１．５ｋｍ内に人間や危険生物の反応はなかったので。それと、この森の植生と生物や現在観測できる天体を見たところ日本国の関東地方で間違いなみたい。』
『ふむ・・・。それで自分達のサポーターっていうのはあった？』
『西南西、方位２５６。方向２．４ｋｍほどの地点に無人兵器特有の信号を探知できた。』

ＩＲＶＩＮＧは人工筋肉で構成された脚のお陰で、非常に高い機動性を得ており今いる森程度なら比較的速く移動が可能で、この程度の距離であればものの数分で到着できるが、彼”月光”はアイラが索敵と同時観測してくれた現在の日時を見て迷っていた。

『今は４月の上旬で１４時を過ぎてもうしばらくすると暗くなるだろうから、明るいうちに高台に登ってこの森の向こう側とサポーターがいる方角の確認。それから夜のうちにサポーターと接触。こんな感じの予定でどう？』
『夜間でもナイトビジョンで視界の確保は出来るけど、月光の判断に任せる。』
『できれば肉眼？裸眼？まぁとにかく直に風景を確認しておきたくてね。』
『人間的な感覚ですか？自我を持ってからこの身体だから、私にはあまりわからないので。』
『そっかぁ・・・。』

アイラが制御する広範囲センサーによってトレースされた地形の中で最も標高の高い地点に向け移動を開始した。
ＩＲＶＩＮＧは通常姿勢で３ｍを超えるが周囲の木々の枝葉もその高さで茂っているため、しゃがみ姿勢で移動することにした。立って歩くのに比べると遅いが木の枝の下を歩くことで、進むルートと周

囲の安全を確かめながら慎重に進むほうが重要と月光は考えていた。

しばらくすると澄んだ小川の流れる渓流に出て、見上げると大きく空が開けており夕日に染められた雲が浮かんでいた。目的地の滝があり、下流方向はずっとなだらかな山な斜面を森の間と縫っていき遠くに見える湖に向かっていているようだった。

（あの湖の側に何か・・・。）

月光はどうしてもその”何か”が気になったが、木々が邪魔で今いる川辺からでは見えない。

すぐ側の滝の上に大跳躍で登り、更に開けたその視界からメイン・サブカメラ両方を利用し最大望遠倍率で”何か”ハッキリと捉えることが出来る。

それは周囲にヨーロッパのような赤い屋根を持つ街並みを抱えた巨大な1本の樹だった。

巨木はその近くにある幾つかの建物よりも圧倒的に大きいのが遠く離れたこの位置からでも見て取れた。

その手前、湖の湖畔に近い位置に小さい島があり、その上にもこれまたヨーロッパ風の施設が建ち並び高い時計塔も見えた。

月光が目にした巨木と湖に浮かぶ島は、ここがどの世界なのかを判断するには十分過ぎる材料に充分だった。

『あぁ・・・この世界かぁ・・・。漫画で見た通りだけど、あの巨木は世界樹で手前のは図書館島かな。ネギま!の世界・・・ねぇ。死ぬことはない・・・はず・・・?』

『余程無茶なことをしない限り大丈夫なのでは?』

『そうだといいんだけどねぇ・・・。大抵転生者介入補正かなんかで変な事が起きそうなものだけど・・・』

ボーっと麻帆良学園都市を眺めていると、遂には日が完全に沈み建物や街灯にちらほら点き始めた。

『さて、ココが何処なのかもハッキリした事だし、最寄りのサポーターと合流しにいきましょうかね。　アイラ、ナビゲーションお願いできる？』

『分かった。ナビゲーションラインとウェイポイントを視覚化して、月光の視界に表示する。』

既に日が暮れ、辺りは薄暗くなりナイトビジョンを起動させる。
ナイトビジョン特有の緑色の視界は生前ゲームでも見慣れたもので、そこへアイラが次のウェイポイントまでの道筋を示すラインが合わせて表示された。

『ナビゲーションシステムの視覚化完了。ルートは逐次センサートレースで地形を読み取りながら更新するので。』

『アイラの方で自動操縦とかしてくれたり出来ないかな・・・？色んなインターフェイスとかシステムとか弄ってみたいし。』

『・・・エラー。よく聞き取れませんでした。ＩＲＶＩＮＧは月光の体ですので』

『まぁまぁ、そう言わず『エラー。よく聞き取れませんでした』
自分を助けるｔ『エラー。』ぬぅ・・・。』

（都合のいいエラーとはよく言ったものだ。）

『じゃあ別件なんだけど・・・・

ちょっと怒り気味だったためこれ以上この件を続けないことにした月光は、どうしても欲しいワイプ画面についてアイラに相談と協力をお願いするのだった。

ＡＣＴ．２　遠すぎた街

日が落ち薄雲が少し掛けた月を覆う空の下、人口の明かりもない山林野中は月明かりが弱いこともあり非常に暗い。
そんな中、奇妙な足音と僅かな振動を響かせながら歩く物体があった。
神様転生で体が無人二足歩行兵器ＩＲＶＩＮＧとなった、コードネーム：月光である。
そんな彼は暗い獣道の中でもとても上機嫌だった。

『♪～♪～～～』
『私の顔が見えるというのは、そんなに嬉しいことなの？』

グラミー賞をゲーム音楽として初めて受賞し”廃人達の聖歌”の異名を持つオープニングソングを口ずさむ月光に尋ねているのは、元々このＩＲＶＩＮＧの制御ＡＩで今は彼のサポーターとして機体の補助に当たっているアイラだ。
月光の生前の記憶の中にあるアニメキャラから再現され、神様によってＡＩに宿された人格である。
そんな彼女の少しだけ不思議そうな表情が、視界の隅にあるワイプ画面から見れるようになっていた。
渓流から最寄りのサポーターに向け移動し始めて数分後、アニメで観たようなアイラの反応を脳内補完ではなくしっかりとこの目で見たいと思いからアイラの顔をワイプで表示できないか相談し実現したシステムだった。参考にしたのはあるＲＰＧゲームでの小イベントで使われることの多く、寸劇という意味を持つ”スキット”と言うシステムである。
ちなみに、この画面の主導権は基本的にアイラにあり機嫌が悪い時など回線を遮断し、ＣＡＬＬが掛かってきても拒否出来るようになってたりする。

『そりゃもう！』

この喜びを抑えきれずしゃがみながらの移動でも若干速度が上がり、目的地までの到着時刻と残り距離の計算が徐々に更新され始めていた彼は即答した。

『アニメであのとてつもなく可愛らしいポンコツぶりや本当は感情豊かなところが、自分にとって都合良くなりがちな脳内補完ではなくこうやってアイラ自身が表す表情として見れるというのはとっても嬉しい！』

熱弁の後、アイラの方を見てみると恥ずかしさのあまり真っ赤になった顔ではなく”ＮＯＴ　ＣＯＮＮＥＣＴ”の文字。

（あれー・・・？これは、なに？機嫌悪くなってしまった？あまりにも恥ずかしるぎて？どうしよう・・・。）

どうしたものかと月光は悩んでいたが、突然回線が復帰し若干顔が赤らみ眉と口が力んでなにか堪えるような表情のアイラが映し出された。

『えーとアイラ、その、なんかごめｎ『エラー。よく聞き取れませんでした。』さっきのって『エラー。よく聞き取れませんでした。』あー・・・』

（これはさっきの件については触れるなと言う事なのか？）

『えと、最寄りのサポーターまでは後どのくらいなのかな・・・？』

『・・・後２５７ｍ、このまま真っ直ぐ進んだ所。』

ルートも距離も到達予想時間も月光の視野上のラインやチェックポイントに表示されているがアイラは淡々と質問に答えた。

『じゃあ少し急ごうかな、そのサポーターというのも少し気になるし

ね。』

アイラとのちょっとばかし微妙な雰囲気に居ても立っても居られなくなったため、通常の立ち姿勢の駆け足で移動し今の状況を誤魔化すことにした。

幸いにも渓流付近よりも木は背の高い針葉樹がこの一体に群生しており、月光が立って移動するのに問題はなかった。

『ここが目的地か。』

２５０ｍほどの距離は月光にとってはすぐで、目の前にはガイドラインの終点が点いた小さい山小屋があった。

小屋は月光の立ち姿勢と同じぐらいの高さで大体３ｍほど。センサー等で人気がないことを確認し板戸をマニピュレータで開け、しゃがんだ体勢からサブカメラで屋内の様子を窺うと、１畳半ほどの土間と塵やら埃やらカビで傷んだ６畳ほどの畳の空間になっており、その畳の間にはどう見ても戸口からは入らない新品で場違いな金属製コンテナが置いてあった。

『これどうやって回収すればいいんだ？』

『小屋を壊したほうがいいと思う。かなりの期間使用された形跡がないので。』

『壊っ!?　うーん、そうだなぁ。　見た感じあのコンテナは手前側にある端末を操作してどっかが開く方式なんだろうけど、どのみち壊さないといけないかなぁ。』

アイラの提案通り山小屋を足蹴りで破壊してコンテナを取り出すことにし、小屋から少しだけ距離を取った。

まずは右脚の回し蹴りで屋根を蹴飛ばしたがその勢いで壁も一緒に倒れ、元々基礎が貧弱だったのか腐っていたのか残りの壁も相次い

で倒れる。
　それにより、周りにはコンテナを開放するのに邪魔になりそうな物はなくなった。
『なかなかの威力だねぇ。あまり力を入れたつもりはなかったけどここまでとは。』
『軍用トラックぐらいは簡単に蹴り飛せるのでこれくらいは余裕なので。』
『魔法使える敵とかに物理攻撃はどれくらい有効なのやら。　まぁ早速コンテナの開けてみますか。』

　ちょっと傷んでいた山小屋を蹴ったとはいえ、これほどの破壊力を持つなら対人戦はもう少し弱めにした方が良いかもしれないなどと、今後あるであろう戦闘について想定しつつマニピュレーターをコンテナの端末に近づける。
　黒一色で何も書かれておらず、全辺が少し出っ張っているほぼ正方形のコンテナに唯一ある端末には、０～９までの数字とＢａｃｋＳｐａｃｅ、Ｅｎｔｅｒの１２キーからなるテンキーとその上に入力された数字が表示されるであろう小さな液晶画面が付いていた。
『メタルギアＭｋⅡみたいに、どっかに接続すればいいのかな？』

　アイラにどうすればいいか尋ねると、予測があってたらしく頷いて答えてくれた。
『先端の３本のアームでどんなジャックでも自在にアクセスできる。その後の電子的な部分は私が対応するので。』

　アドバイス通りにマニピュレーターのアームを本来何に使う物だったかわからない端末右側面のジャックに差し込むと、視界の端で”Ｎｏｗ　Ａｃｃｅｓｓｉｎｇ”の文字とゲージが表示されるがす

ぐに”Ｓｙｓｔｅｍ　Ｒｕｎｎｉｎｇ．．．．”という表示に切り替わり、これもすぐ消えると”Ｃｏｎｔａｉｎｅｒ　Ｏｐｅｎ”という表示に変わる。
　それと同時に小さなモーター音がし始め、コンテナ上面が後方へスライドしながら後面へと位置を変えていく。
　するとコンテナの中から、何かが起動したような電子音が聞こえ次に先とは違うモーター音とスズメバチのような羽音聞こえてきた。
　月光が小型ＵＡＶの類かと予測を立ててると、

「ども、恐縮です、青葉ですぅ！一言お願いします！」

　現れたサポーターは生前にプレイしていたブラウザゲームに登場するキャラを宿す機体だった。
　そのサポーターが宿る無人機は某戦場ＦＰＳではＭＡＶという名前で実装された小型無人偵察機で、一時期到底現実的ではない運用ができ当時ウサフラ（ショットガンＵＳＡＳ―１２にＦｒａｇ弾を装填させた物の蔑称）と並んで忌み嫌われた装備である。
　正式にはＲＱ―１６　Ｔ（タランチュラ）―ホークという名称のそれは青葉と名乗りしゃがんでる月光の前で滞空していた。

「重巡洋艦の擬人化を擬機械化とかこれもうわかんねぇな？」
「その語録使いやすいからといってあんまり使い過ぎない方がいいと思いますよ？　あ、共同戦術ネットワークへのアクセス認証ください！」
「アッハイ．．．」

　少しだけしょげた月光は視界に表示された青葉からの認証要請に対して許可を出す。
　アイラが機体説明を月光にした際簡単に説明したが、共同戦術ネットワークは神様が今回月光たち無人機のために構築された情報共有システムで、これに登録されてない機とは外部音声で会話することに

なる。また、見聞きした各種情報も半自動でこのネットワークにアップロードされる。
　システム自体は月光に搭載されこの地球上にある各種ネットワークを密かに利用することで、大抵の場所でも会話や情報のやりとりを可能としていた。

「登録完了。青葉の共同戦術ネットワークへのアクセスを許可しましたので。」
『どもですー！　ほうほう、魔法先生ネギま！の世界ですか。』
『一通り現状を確認したら今送ったアプリ（スキットシステム）をインストールしてしておいて。自分は青葉の機体スペックみるから。』
『キャー！私の体重とかスリーサイズとか見られちゃいますー！』
『いやいや、見られるも何もＭＡＶのスペックを見るだけだから…。』

　からかわれつつも青葉の機体の情報をネットワークを経由して閲覧すると、早速気になる部分を見つけた。

『青葉？この機体名”ＲＱ―１６　Ｔ―ＨＡＷＫ　ｍｏｄ．ＧＯＤ”の”Ｍｏｄ．ＧＯＤ”っていうのはどういう事？』
『それはですね、私をこのＴ―ホークに宿すためにコンピュータの大幅な増強と、ガソリンエンジンだったのを電気モーターへ改造したのと、月光さんに搭載されている物と同じマニピュレーターと大容量バッテリーの搭載といった改修を神様がしたのでこういうバージョン名になったみたいですよ？』
『”ｍｏｄ．ＧＯＤ”なら月光の機体名にもついてる。私の説明聞いてた？』
『そうだっけ…？ま、まぁ何にせよ至れり尽くせり感謝だね。』

　とは言え、それ以外に大した改造はされていないらしく生前に見たウル覚えのＴ―ホークのスペックと差はないようだった。某ゲームでのＭＡＶは敵の電子装備品や地雷などを破壊できる装備があった

が、実際のＴ―ホークにはそんな装備はなくここにある物にも装備されていなかった。

『では、私はいつでも万全の体制で出撃できるよう充電させてもらいますね！』

そう言うと、青葉は月光のボディユニットに乗りその上面にあるプラグにマニピュレーターを差し込む。

そんな所にプラグ付いてたのか、などと思いつつコンテナにまだ何かはいっていないか見てみるとフラッシュグレネードが２つ程入っているだけだった。それをカーゴスペースに入れると、２人とこれからの行動について相談してみることにした。

『私は今すぐ麻帆良学園に侵入するほうがいいと思います！けれど麻帆良湖の手前岸は市街地ですし、そこをバレないようにするには結構迂回しなきゃいけ無さそうです。』

『それだと今晩中の侵入は無理。全力駆動による負担は生体部品はともかく、その生体部品の性能をカバーしている生体部品維持パックに大きな負担となってしまうと思うので。』

『半永久的とは言えまだ活動拠点を持ってない今、補填がきかない機械部品の無闇な消耗はまずいかぁ。』

『それと今日のこれ以上の活動は月光の精神的に負担が掛かる。』

『自分に負担？うーん、そんなに負担になってる気はしないんだけどなぁ』

『実は既に精神的に自身の状態について知覚している部分と知覚できていない部分とで強力なギャップが発生している。そこを私がメンタル面の補助としてそのギャップを強制的に遮断してるので。ちなみにこれは私にもそれなりの負担がかかってる。』

『つまりまだ自分は月光になりきれていないってことで起きてる不具合とかが、アイラを含めてソフト面に色んな負担を掛かっているって事？』

大雑把にまとめたが大体あってたらしくアイラが頷く。加えて時間としては朝まで人間で言う睡眠を取ることになるとの事だった。さっきの話をメモを取りながら聞いていた青葉は何か最後に殴り書きで書き込んだ後、顔を上げ一つの案を出してきた。

『今夜と明日の日中に街の近郊まで移動し明日の夜に麻帆良学園に侵入、というのを考えてましたが月光さんとアイラさんは動けないというのであれば青葉から一つ提案があります！私が先行して侵入ルートを偵察しておくというのはどうでしょう？』

『大容量バッテリー積んでるとはいえ連続稼働は２４時間分が限度みたいだけど、色々活動することを考えると２４時間分の容量で偵察できる？』

『そこは心配ご無用！共同戦術ネットワークとの接続を一時的にですが切断すれば３倍の７２時間分の活動時間を得られるのです！』

『ネットワークを切断するとなると、その後の合流は周波数を合わせて交信する必要があるね。』

『周波数なら元から設定されているみたいですよ？』

青葉から送られてきた無線周波数は”１４７．７１”で自動的に登録され、いつでも交信できる状態になった。

ちなみにアイラが調べてくれたが月光／アイラの周波数は”１４９．２７”で設定されていた。

『それじゃあ青葉、くれぐれも怪我の無いように。あ、あと一般人やら魔法関係者やらに見つからないよう気をつけてね。』

『はい！青葉出撃、あ、いえ偵察してきまーす！』

そう言い残すと青葉のＴ―ホークの姿はナイトビジョンの視界範囲から出て行きすぐに暗闇に紛れた。

『さて、自分は早速寝させてもらおうかな。何かあったらすぐに起こして。』
『分かった。おやすみ。』

先のコンテナに背に待機モードとなる体勢になり短いやり取りの後、月光の意識は途絶え機械の体になって初めての眠りに就いた。
月光が休眠モードに入ったことでＩＲＶＩＮＧの制御はアイラが受け持ちカメラとセンサーで周囲を見張る。
時刻は午後１０時３９分、気温１２．９℃、湿度５５％、風速４～５ｍ／ｓ、２００ｍほどの範囲内でフクロウが鳴いており、センサーには小型の野生動物の反応もある。
気が付くと視界はいつしかナイトビジョンモードから通常モードに切り替わって頭上に向いており、薄雲の間から覗く星々を見ていた。

（人間の体になるとこの景色も雰囲気も変わって感じられる？）

月光の補助をしてきたことで直に感じ取ってきたヒトの感性に興味が湧いてきたアイラ。
視界を再び周囲の森に移し警戒を続けるも、思考の片隅では先の疑問がずっと残り続けていた。

同時刻、月光らが夕方に麻帆良学園を発見することが出来た渓流に、森の中からドラム缶やらテントなどのアウトドア用品を抱えた一つの人影が現れた。渓流に行き当たるまでしきりに足元を注意していたが、目的の場所近くに出たことに気付くと視線をその川の上流に向ける。上流には目的地である３段の滝の側にある大きな一枚岩。その大岩の上にとても大荷物を抱えているとは思えない身のこなし

で登りそこに荷物を置くと、手慣れた手つきでテントを組み立てる。
一通り荷解きが出来たらしく、その人影は先の立ち止まった場所にから川辺の砂利と森の地面に残る足跡を、行ったり来たりしながらまじまじと観察していた。

「ふむ、ヒトでありながらヒトならざる者がまだこの近くにいるようでござるな。」

誰に言うでもなく呟いた言葉は、この場に来た月光がその後青葉と合流するべく向かった方向へ消えていった。
しばらくその方角を見ていたが、踵を返すとテントのある岩場まで常人とはかけ離れた動きであっという間に移動し、既に用意していた焚き木に火打石で火をつけると炎の明かりが辺りを照らす。

「少しばかり調べてみる必要があるでござるか。」

そう言うと忍装束を身に纏った少女というには些か背が高い彼女は、いつの間にか捕まえていた川魚を簡単に捌き塩を振り焚き火で焼き始めていた。

ＡＣＴ．３　バーチャスコンタクト

――４月１２日　午前７時――

既にこの時期となると太陽はそれなりの高さまで登り、山の稜線から完全に顔を出した太陽によって森全体が照らされている。

月光が寝ている間アイラが寝ずの番で監視を続けたが問題は何も起きなかった。

強いて挙げるとするなら現在、Ｍ２の銃身上に雀が４羽止まり鳴き声を上げたり毛繕いをしているのでアイラは無闇に動けないといったぐらいだった。

『月光、起きて。予定の７時になったので。』

月光に対しスキットのコールを掛けること６コール目、ようやく反応がありスキットシステムへの接続も確認しＩＲＶＩＮＧの制御系等の権限をいつも通りの体制するために月光へ渡す。

権限が移ったその際機体が少し揺れ雀達は飛び去ってしまったが、月光はそれに気付かず自機の状態をチェックに集中していた。

『寝てみた感じあんまり人間の時と差はないんだね。精神的な部分への負担だとかギャップとかはどうなってる？』

『正常の範囲内。システムとの適応化はほとんど終わってる。』

『よし、それじゃあ青葉と１０時の定時交信するために昨夕の滝の所まで戻ろうか。』

『ウェイポイントの再設定、通常歩行での到着予定時刻は１時間３０分後。十分間に合う。』

昨晩まで山小屋だった場所で背伸びをする。

背後には青葉が入っていたコンテナがあるが青葉は既に侵入ルートの下見のために出発し、補給物資として入っていたフラッシュバンも回収され既に空の状態となっていた。

人工筋肉も人間の筋肉同様、長時間活動していないと若干の収縮が発生し、月光は無人機としてのプログラムと人間の本能によって伸びを行い人工筋肉が小刻みに震える。

『あっ・・・。』

不意にアイラの声がしたかと思うと前世の感覚で言う尿意近いものに襲われ、レッグユニット具体的には股関節部より何かが排泄された。

慌てて脚元を確認するとそこには少量であるが、緑色の液体が撒き散らされていた。

この緑色の液体は”コンクエスト・マーカー”と呼ばれる物で、本来なら派遣された担当戦闘地域に存在する敵勢力を排除した際に排出されるものだった。

先の声の事もありアイラを見てみると耳まで赤くし俯いていた。

『もしかして誤作動?』

『・・・ん。』

とても恥ずかしそうに小さな頷きと蚊の鳴くような声で肯定し、耐えられなかったのかスキットの回線を遮断した。

状況的にも掛ける言葉が思いつかず、何となくこの複雑な雰囲気を紛らわすため片脚を使い、コンクエスト・マーカーを地面を掘り返して土と混ぜ、山小屋の残骸の中で比較的大きな物をその上に被せた。

『ま、まぁ目的地に移動しようか。周辺の警戒一応お願いね。』

『・・・分かった。』

音声のみで返答し普段以上に各種レーダーやセンサーの更新速度が早まっておりアイラの動揺具合が見て取れ、月光は取り敢えずはしばらくそっとしておくことにし目的地に向かって歩き始めた。

月光の姿が木々などで見えなくなった頃、山小屋だった物から少し離れた茂みが不自然に揺れた。

「やれやれ、あのような者がいるとなると拙者ものんびり修行とは行かぬでござるな。」

ニンニン、とあからさまに忍者というような言動で茂みから現れたのは、週末などの休日にはこの一帯で野宿しつつ修行をしているという麻帆良中等部3年A組出席番号２０番の長瀬楓である。

昨晩月光の存在に感づき深夜からこんな所に小屋などあったか疑問に感じつつ観察を続けていた彼女は、丁度7時になり牛のような鳴き声をすると立ち上がってそれと同時に出た緑の排泄物を隠蔽したところを見ると、奴はあまり存在を知られたくないのではと考えていた。

楓がキャンプ地にしている滝の方角へ歩き出したので、先に戻りテントなどを撤去しようと考えたが、目的地が断定できてからでも遅くはないと判断して先に、壊された山小屋を調査することにした。

遠目からは金属製と思っていたコンテナのような物ははっきりと木目のある木箱だった事を不思議に思いつつ、次に奴が隠蔽した緑の排泄物がある地面を瓦礫を除けて見てみるとそこは他の地面とは違い苔むしていた。

「はて、こんな短時間でこの手の苔が・・・。む?」

気が付くと山小屋の残骸が先程よりも朽ちているように感じられた。

狸や狐につままれるとはこういったことでござるかな、と思いながらココを調べるよりも奴を追いかけた方がいいと考え、楓も山小屋を離れるのだった。

楓の姿も見えなくなると小屋の残骸はそのほとんどを苔や雑草に覆われ朽ち果てていた。

『・・・あのっ、月光。ちょっといい？』
『ん？どうした？』

山小屋から歩くこと３０分ほど、アイラがようやく声を掛けてきた。その声はいつも通りのもので取り敢えずは立ち直っている事が分かり月光も一安心していた。

『１０時の方角距離３８７ｍ、昨夕いた滝の上流に当たるところだけど断崖になってる。現在の目的地より周りも開け、青葉との通信距離は少し離れるけれど感度はいいと思うので。』
『うーん、そうだねぇ。約束の時間まで大分あるけど、まぁでもそこのんびりするのも悪くないかな。』
『じゃあ、目的地をその崖に変更するので。』

しばらく歩くと目的の崖に辿り着きアイラの言う通り、青葉が向かった麻帆良学園やその周辺市街地が当初向かっていた滝より通信状況の良さそうな場所となっていた。
崖は例えるならメタルギアシリーズに置いて最高傑作と名高いＭＧＳ３、その一番最初のステージとしてネイキッド・スネークが降り立った断崖が近いと言える。

『うわぁ、こりゃすごい崖だねぇ・・・。ＩＲＶＩＮＧってゲームの描写からすると十数ｍそこらの高低差は大丈夫そうだけどこの崖はどうなんだろう・・・。』
『この高さなら問題ない。状況にもよるけど約５０ｍ落下してもうまく着地すれば、人工筋肉に少しダメージが入るだけですぐ治るので。・・・試す？』

『いやいやいやいや、いきなりこんな高さから飛び降りるとかさすがに不安でいっぱいから！』

崖の際まで寄り崖下を覗く月光とアイラは、ある重要なことを忘れていた。

ＩＲＶＩＮＧの重量である。７００ｋｇを超える重量で、その体を３０センチほどの靴と同じ面積、両足合わせて６ヶ所で支えている。

踵に当たる部分には重量分散の目的を含めた大型ワイヤーカッターがあるが、コレを使用せず重量が集中した状態で崖際に立つとどうなるか。

しかし彼らが気付く前に結果が出てしまった。

僅かに足踏みした影響からか、崖の端から月光が立っている辺りの狭い範囲の地面が、小さな音を出して一段他より陥没した。

「「あ。」」

二人同じタイミング同じトーンで同じ言葉が漏れた次の瞬間、足場が崩れ去りそのまま空中にわずかながら浮かんでいたことを感じてしまった。

「おぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

「ーーーーッ！ーーーーッ!!」

不気味な浮遊感と落下感に襲われ、それぞれに声を上げ（アイラは言葉にならない声だったが）崖下へ落下してしまうも地面に到達するまで、大小様々な枝が折れ体勢が崩れるも何とか取り敢えずは着地に成功した。

脚部の人工筋肉に鈍い痛みが走り、月光の視界の隅でステータスパネルが今までは少し透過し目立ちにくくなってたがハッキリと表示され、脚部に損傷が発生していることを示すダメージアイコンが赤く

点滅し月光へ機体の状態を知らせていた。
『イテテテ・・・。アイラぁ大丈夫かぁ？』
『うぅ・・・ お尻をうった様な感じだけど大丈夫、平気、なので。』

月光の補助をしていることで彼の人間の感覚に感化されていたアイラだったが、表現が人間的であることに２人共全く気が付いていていなかった。
月光がふとさっきまで点滅していたダメージアイコンを見ると、それは点灯に切り替わり”１８．８”と小数点以下まで表示された数字が減っていっていた。

『うん？ダメージアイコンに重ねて表示されているこのカウントダウンは？ ＷＯＴのダメージパネルＭＯＤにあるような修理完了までの時間っぽいけれど。』
『あながち間違いじゃない。そもそも月光の視界のインターフェースの一部はＷｏ○の記憶を元に構成されてるので。』
『あぁ、道理でねぇ。この世界と前世の世界とでリリースされてるゲームとかに違いがあるか気になってきたし、早く麻帆良学園に行って情報収集したいところだね。』
『青葉との交信予定時間までまだ時間あるけど、どうやって上に戻る？』
『そうだねぇ。確かこういった崖でも脚を突き刺して登れるのだっけ？せっかくだからそれで登ってみようか。』
『分かった。深く差し込めれば崖の岩質的には問題ないはず。』

人工筋肉の修復が完了し、早速登るべく崖に近づき機体の重量を支えきれる程の深さまで右脚の先端を突き刺し、踵のカッターもＩＲＶＩＮＧの姿勢維持の補助のため崖に刺し込まれる。次に左脚がその広い可動範囲を生かして右脚よりも高い位置に突き刺さる。そして次は右脚が、という具合に動作を繰り返し崖を登り始めたが、腕は無

く人間の脚ではありえない動きなので月光は戸惑いながらもアイラの補助を受けつつ順調に進んでいた。

この時崖上には尾行中に月光達が落ちていった事態に驚き崖際に駆け寄り注意深く下をを見ている楓がいたが、岸壁に脚を突き刺した際の音と崖と面している木の葉が大きく揺れた事で、崖を登ってくると悟り姿を隠した。

『ふう、中々面白い経験だったよ。でもまぁ不意に落ちるのだけは2度と味わいたくないね。』

『同感。すごく怖かった。』

『しかしよくよく考えると、この体であんな足場の不安定な所に行ったら危ないよね。』

待機姿勢で足を折り畳んだ月光が自嘲気味の苦笑いで言うと、ちょっと負い目を感じてるアイラがぐうの音も出ないような顔をしているのに気が付き、大慌てでフォローに入った。

『あぁ！でも！気が付かなかったのは自分も同じだし、あの高さで不意に落下しても無事で済むというのを実感できたし、ロッククライミングもなかなか楽しかったから全然気にすることはないよ！』

そう、と一言言うと安心した表情になり月光も一安心することができ、予定の時間まで30分程ある事からのんびり待つことにした。

先の一連のやりとりからアイラからは特に話すこともなくまたこういう状況でも話題がなくても平気と言う事、月光は月光でアイラが物理的にではないが側に居るというシチュエーションをスキットがあることで改めて実感しており彼も話題がなくとものんびり出来る性格だった事、そういう事から会話がなくお互いメイン・サブカメラを無意識に使い分けながら空や周りの景色を見ていた。

ボーっとしている2人の所へ無線のコールが鳴り響く。時間は午前10時を数秒過ぎた頃、周波数は”147．71”タブには”アオバ”と表示され青葉からの定時通信で間違いなかった。
唐突だったがココで一つ遊び心を加えようと思いつきコールに出た。

≪ども！こちら青葉です！月光さん、感度は如何でしょうか？≫
≪・・・愛国者は？≫
≪・・・？　愛国者？≫
≪愛国者は？≫
≪愛国者は、んー・・・・・・あっ！≫

初めは何の事かと訳が分からなかった青葉だが少しの間思考を巡らせるとすぐに答えに辿り着き、そしてその合言葉を自信を持って答えた。

≪ら・り・る・れ・ろ、ですね！≫
≪正解！あぁ、感度は良好だよ。≫
≪びっくりしちゃいましたよー、いきなり「愛国者は？」なんて聞くんですから。どっかの組織に通じちゃったのかと思いました！≫
≪いやなに、ちょっとした遊び心のつもりでね。それで市街地から学園に侵入できそうなルートの目星はついた？≫
≪それがですね、3日後の4月15日に麻帆良学園を含めるこの市街地全域が発電所や送電設備の大規模なメンテナンスのため20～24時まで停電になるようなのです！そこで警備システムがダウンしている間に有効そうな侵入ルートと、その時以外の侵入ルートの候補をそれぞれ幾つか見つけてますよ！≫
≪停電？・・・うーん何だったかな、ネギが関わる出来事があったようななかったような。≫

≪お二人がこちらに到着するまで私はどうしてましょうか？まだ私は活動時間に余裕ありますけど。≫
≪ルートの決定自体はそっちに合流後、詳しいデータをもらってから決めるとするかな。　それからしばらくその街に留まることになるだろうから自分達が身を隠せそうな場所を見つけてもらえる？≫
≪隠れ家探しですね！了解、青葉にお任せください！≫
≪街に近づいたらまた連絡するから。よろしく頼むね。≫

青葉との通信を終え、アイラに麻帆良が停電するのはネギまのストーリーでどのあたりの話なのか聞いてみたが流石に知らなかった。思い出せそうで思い出せないモヤモヤとした感覚が付き纏い現在の時系列を推測していたが、アイラの声と今まで感じたことの無い何かに強く注意を惹かれる感覚がしたため思考を切り替えることにした。

『方位１１０。対地高度約３００ｍ、直線距離約２４００ｍ、時速５４ｋｍ前後でこの場所近辺に向かい現在も降下中の物体がある。』
『今さっき頭を糸で引かれたような妙な感覚があったけど、もしかしてレーダーの反応を直感的に感じ取ったってことかな。』
『多分そう。２分３０秒ほどでこの付近に到達する。どうするので？』
『何が接近してるかはわからないけど、とにかく隠れようか。後は念の為に武器のセーフティ解除しておこうかな。』

森の中に入り木陰から接近中の物体を確認すると、それは見覚えのある”人物”だった。
その人物というのは少々歪な形をした大きな杖に跨る赤毛の少年、この転生後の世界である漫画”魔法先生ネギま!”で主人公として数々の出来事に関わっていく最重要人物、ネギ・スプリングフィールド本人だった。
若干俯きその表情ははっきりと見えないが、なんとなくだが落ち込んでいる雰囲気がした。

『おお?、こんな所にネギ君が来るとは。しかしこの状況はストーリーのどっかで見た覚えがあるなぁ、どの時期だっけ・・・。』

こちらに向かってきている人物が危険な存在でないと分かり、不測の事態に備え解除していた武装のセーフティを再度掛け直す。そうしているうちに高度はみるみる下がってきて、先程まで月光が居た位置に着地するのかと思ったが降下率が全く安定しておらず、目測で今いる森の木々の高さで水平飛行に入り、このままだといずれ木に接触するのは間違いなかった。

一方のネギは未だに俯いたままで今の飛行状態に気がついていないように見え、月光は一瞬警告を発しようかと考えたが、ここでようやくネギまの時系列を思い出した。

『あ、思い出した。今の時系列は初めてのエヴァンジェリン戦前じゃないか。』

そのきっかけはこの後のネギの身に起こることを予想した時に、鮮明に漫画のワンシーンと重なりその後の展開も思い出すと、先程青葉との通信であった”麻帆良学園の停電”のキーワードと繋がり今の状況を把握できたのだった。

『今は丁度、ネギ君が寮を飛び出してきた段階でこの後、長瀬に拾われるんだっけか。』

『じゃあ私達は手出ししない?』

『まぁまだ自分達の活動の方向性がはっきりしてない内は、下手に干渉しないほうがいいんじゃないかな。　少しこの後の展開をこの目で見たら青葉との再合流を目指そう。』

『わかった。　あ、ネギ落ちた。』

「わーーーーん!?」

月光たちが居る地点からは木々で隠れ見えない所で木にぶつかり、少し情けない悲鳴を上げたネギはどこかの川に落ちたようだった。
それと同時に今いる場所とは崖際の開けた場所を挟んだ反対側の茂みから一つの人影が飛び出した。

『うおっ、そんなところから!?』

この後の展開を思い出せば誰かは簡単に予想がついたが、それ以上に自分達の側に居たことに驚いていた。いつからそこに居たかは分からないがもしかするとずっと尾行されていたのではと考えたが、何のためだったのかまでは予想もつかなかった。

『うーん、たしか長瀬は学園の魔法先生らとは繋がってはなかったはずだしなぁ。』
『単に好奇心という可能性は?』
『その好奇心が、今後の自分たちの活動の障害にならなければいいんだけどねぇ。』

この世界での目的も決まっておらず、さほど自分たちの姿を見られていたことに対し心配してないが、取り敢えず今はこのネギま世界でのストーリーを生で見に行くことにし、楓を追う形でネギが墜落した方向へ歩き出した。

ＡＣＴ．４　いずれのルートも麻帆良へ続く

転生初日の夕方月光とアイラが滝は今、子供先生ことネギ・スプリングフィールドとその生徒の長瀬楓がキャンプ地にしており月光はそこから大体１００ｍほどの距離からメインカメラと指向性集音機能で２人の会話の様子と見ていた。

自分達の存在を悟られないよう距離を取り木々の合間からの見物だったが、当然というべきか楓にはバレているらしく時折目が合う時があった。ネギはと言うと月光の存在にも楓が彼らの様子を窺っている事にも気づかずにいた。

『やっぱり尾行されていた手前、今も警戒されてるねぇ。』

『今朝からの各種データを照らし合わせてみても尾行されている形跡もない。特に心音センサーに対しての人間の反応が一切記録されていないのは信じられない。心音センサーも他のセンサーも全てＭＧＳ世界における最高水準のものなので。』

『本物の忍、リアルニンジャは伊達じゃない、という訳か。　お、イワナ捕り始めた。』

クナイを用意した楓は幾つかを使い一投一投的確に投げ、次々と昼食に食べるイワナを捕らえていった。

ネギも真似て投げてみるも全く飛ばずただ石を投げているかのようだった。　楓がお手本として見せたイワナの捕り方は、常人ではとても真似できない動きでクナイを３連投するというものだったが、到底ネギには出来るはずもなく「ジャパニーズニンジャだ！」と目を輝かせていた。

数匹魚を捕まえていたがそれだけでは物足りないのか、他の食材を集めるべくネギと楓は月光のいる場所とは真逆の森の中へ入っていった。

姿が見えなくなる直前、少し振り返ってきた楓と目があったがその意図は何だったのか、判りかねていた。

『何と言いたかったのかは判らないけど、自分達は予定通り青葉との再合流を目指して麻帆良学園に向かうとしましょうか。』
『今から出発しても通常姿勢で歩くなら十分夕方には着くと思うので。』

月光とアイラもまた、元来た道を引き返し麻帆良学園近郊まで続く森の中を通常の立ち姿勢で歩き始めた。
日はまだまだ高く昨夕確認した市街地との距離を考えると、人間の移動速度だと夜になりそうなぐらいだったがＩＲＶＩＮＧの機動性ならアイラの言うように、十分夕方頃に市街地に着きそうだった。

――１２日　夕方――

道中月光はアイラからの提案で、機体を操るのに違和感があるかどうかの確認を兼ねた脚や関節の負荷テストとして、ダッシュやジャンプなどを行いつつの移動だったが何事も無く予定通りの夕方に市街地郊外に到着した。　それと同時に受信した青葉の無人機反応は数々の建物や電波などで少し弱く感じられた。
恐らく街の上空にいるであろう青葉と交信するため頭上が開けた場所に出ると、先に彼女の方からコールが掛かってきた。

≪どもー青葉でｓ、じゃなかった。んんっ！・・・・愛国者は？≫
『ふむ・・・。アイラ、自分の通信の声にそこそこ強いノイズを掛ける事って出来る？』
『出来る。次の通話からもうノイズは掛かってるので。　・・・何するの？』
『よし、ありがとう。いやいや、普通に返答するのもつまらないから、ちょっとイタズラをね・・・。』

『・・・。』
≪もしもし？　月光さーん、愛国者は？≫
≪電波状況が悪い・・・況が悪・・・い！も・・・度・・・返せ！オー・・・アー！≫
≪あれぇ？ここから月光さん達が見える直線距離なのに。もしもし？月光さん、聞こえますか？≫
≪ノイズが酷くて全く聞き取れない！・・・酷く・・・・聞・・・ない！もっと近づいてください！・・・えく・・・！≫
≪近づけばいいんですか？ちょっと待っててください！高度を落としてそちらに向かいます！≫

先ほどの青葉の反応はこちらに向かい移動してくるにつれハッキリとした反応となり、やがて薄暗くなった空にＭＡＶのシルエットも見えてきた。月光の少し前方、高度３０ｍのところまで降下してくるも月光はノイズが酷いフリをする。
≪こちらから青葉の姿を目視した・・・から青葉・・・うがたを目・・・た！電波状況きょ・・・が悪・・・い・・・でもう少し近づいて・・・え欲しい！≫
≪この至近距離でもノイズが入るとなると、月光さんの通信機器に異常でもあるんじゃないですか？≫

流石に疑問を持ったが中々切羽詰まった声に何かしらあるのだろうと考え、取り敢えずは更に接近し直線距離で１０ｍ弱まで近づいた。　もう外部音声で会話したほうが早いのじゃないかと思う距離まで来た時、月光の回線がアイラの名前でコールが掛かってきた。
『よしよし、そのまま・・・そのままぁ・・・。』
『・・・。』
≪青葉、気をつけて。月光が何かしようとしてるみたいなので。≫
≪ちょっと・・・イラ!?　せっかくワイ・・・アームを忍ばせて・・・えいたのに・・・。≫

≪エラー。バラすな、という指示は受けてないませんので。　ノイズ解除完了。　あと、青葉に共同戦術ネットワークへの再接続許可を出しておいたので。≫

月光の動揺を無視して青葉への許可を手早く済ませると、仏頂面で目線を逸らし後は我関せずというような態度を取った。

そこへスキットへの再接続を済ませた青葉がアイコンタクトとジェスチャーで、月光の企みを教えてくれた事とアイラの手際の良さに謝意を示す。

打って変わって悪い笑顔ともいうべき表情をし、月光に対して何を企んでいたか聞き出そうとし始めた。

『おぉっと、月光さーん？何しようとしていたか青葉気になっちゃいますー。』

『いやね？ちょーっと合言葉の返答にワイヤーアーム（ワイヤー型マニピュレーター）でこう、ぐいっと引き寄せてから「これが合言葉の答えだ」っとでも言おうと思ってね・・・？』

青葉が滞空している地面までヘッドユニットから這わせていたワイヤーアームを手元まで回収すると、グッと何かを引き寄せるような動きでワイヤーアームを動かして２人にこれからやろうとしてたことを説明した。

青葉はそれを見て呆れながら月光のボディユニットに着陸し、消費した電力を補うため月光の上面プラグへとマニピュレーターを接続する。

『私は２４時間以上に渡る偵察任務で結構疲れてたんですよ？　早く充電したくて堪らなかったのですから。』

『だったらわざわざ言い直さずとも、普通にコールを掛ければよかったじゃないか？』

『たしかにそうでしたけども、私だって言いたかったんですよ！「愛

国者は？」って。』
『それほど意地になって言う台詞か。それに他にも合言葉なんｔ『ところで、青葉と合流したけど今からどうするの？』』

これ以上続けても不毛な話になりそうだったのでアイラがこれからのことについて尋ねた。
アイラの一言で落ち着き冷静になってみるとあまり格好の付かない会話だったためバツの悪い二人。月光は青葉に対し情報を早く送るよう急かし、青葉は言われずともというムスッとした顔で集めたデータを月光に接続しているマニピュレーターを通して転送し始めた。
送られてきたデータには隠れ家候補に関する物と通常時・停電時の潜入ルートの候補が記された物があり、そのうち隠れ家候補をこれから見て廻ることとした。　候補は４ヶ所あったが１ヶ所が市街地内で残り３ヶ所がそれぞれ郊外などバラけた地点に存在しており、夜のうちには全て巡れそうだったこともあり早速最寄りの隠れ家候補に向け月光らは移動していった。

――４月１２日　深夜――

日付が変わる時間になった頃、全ての候補を巡って見て月光らは郊外にある長年使われた形跡のない、地元消防団が使ってたと思われる車庫と談話室を備えた建物を仮拠点とした。　その建物の中で最も広い車庫に月光は座り込み待機モードへ入り、不要な機能はシャットダウンし人工筋肉から生み出される電力を青葉のＭＡＶへの充電と電子機器へ充てていた。
待機モードでもシステムは通常通り稼働し現在は３人ともスキッ

ドシステム上で話し合いの場を設け、月光が青葉の情報を元に侵入経路のまとめをしていた。

『麻帆良学園に忍び込むルートの候補は遠回りして人気の薄い所から侵入する迂回ルート、湖岸を夜間のうちに密かに駆け抜ける湖岸ルート、その派生で湖に浸かりながら進む湖中ルート、貨物列車の荷物に紛れ込んで学園内で降りる列車ルート、そして麻帆良大橋を突っ切る橋ルートと湖岸の車道を堂々と進む車道ルート。　いずれも学園側の警備体制が不明で、自力で移動し侵入するというもの。　人間の体なら簡単に忍び込めるんだけどねぇ・・・。』

『迂回・湖岸・湖中ルートは地形や距離に難有りで機体に多少の負荷がかかる。列車ルートは紛れ込むのが困難である思う。橋と車道ルートは無いです。発見される可能性が極めて高く論外なので。』

『この中で比較的良さそうなルートは湖岸か湖中ルートでしょうか？月光さんはある程度の防水加工がされてるみたいなので水に濡れても大丈夫とは思いますが私は状況に応じて飛ぶか月光さんの上で待機のままか、ですね！』

『訂正になるけどこのＩＲＶＩＮＧは完全防水仕様でもあるから、機体全体を水に浸けても深度１０ｍ以下なら３０分程度の活動が出来る。』

『私としては湖岸ルートがありがたいですね。湖中ルートだと私飛んでいなきゃダメそうですし、深度によっては私のマニピュレーターが水上まで届かなかったり、何らかの理由で着水してしまうかもしれないのですから。』

『なるほど・・・。でしたら……』

　青葉とアイラが湖岸と湖中どちらで行くかで話を進めていたが、一方の月光はルート考察で参考に見ていた写真の中に何枚かの麻帆良大橋の写真がありそれを見ていた。　話に加わらない月光が気になった2人はオープン回線で自由に相手側を見ることが出来るので彼が何の画像を見ているのか覗いてみる。

『それって学園パンフレットや麻帆良市観光ガイドとかに載っている麻帆良大橋の写真ですね・・・。何か気になることでも？』
『ん？いやね・・・この橋、路面裏側は鉄骨で組まれてるみたいで特にこの鉄骨付近とかの鮮明な写真が欲しいのだけど無いかな？』
『すみません、今ある麻帆良大橋の写真はそれで全部なので細部の奴はありませんね。』
『あ、そっかぁ・・・。』

そう言うと月光は再び幾つかの写真で、最も橋桁の裏側で鉄骨が写っている写真を見ていた。　とは言えその写真も若干逆光気味で決して鮮明とは言えないが、それでも鉄骨がどういう風に組まれているのかは分からなくもないといった物だった。

『月光、どうかしたの？』
『うーん、ちょっと分かりづらいんだけどここ。　他よりも大きめっぽい鉄骨が橋桁に沿って伸びてて、その上がそこそこ空間が空いてるように見えるんだよね。　それでここを通って行けないかなって思ったんだけどどう？』
『分かりづらい・・・。もうちょっと他の写真がないと判断できない。』
『それならばこの青葉にお任せ！　今からでも暗視装置つけて偵察してきます！』
『あぁ、大丈夫大丈夫。取り敢えず今日のところはもう休憩するとしよう。　連続稼働って機械とはいえ負担になるだろうから。　特に青葉は今日まであっちこっちで情報収集してくれたから少し心配なんだよね。』
『青葉の事を気遣ってくださってくれるんですか？　ありがとうございます！　ではお言葉に甘えて私は早速休眠に入らせていただきますね！』
『はいはい、おやすみ。　明日は麻帆良大橋と今考えてる中で次点の湖岸・湖中ルートを偵察してもらうから、しっかりと休んでね。』

『了解でーす！それではおやすみなさい！』

スキットから切断し共有戦術ネットワークの青葉のステータスが”休眠中”に切り替わり急に辺りが静かになった。　アイラと比べ活発的な青葉の声はハキハキとしているが、とは言っても月光とアイラからすると青葉が加わると賑やかになるという印象で煩わしいとは一切思っていた。

しかしスキットから切断した途端、それまでしゃべっていた青葉の賑やかな雰囲気がなくなり少し寂しさを感じながらも、明日の偵察と明後日の麻帆良学園への侵入計画草案をほどほどに練った後、アイラが自ら周辺警戒を努めると申し出て月光は休眠モードへ移行した。

昨晩と同じようにアイラは様々な思いを巡らしていくうちに世は更けていった。

ＡＣＴ．５　やっぱり憑依だった

――４月１３日　午前８時――

この日は昨日に月光が崖から落ちたり、その後に長距離移動などしたためレッグユニットの生体脚に疲労やダメージがいくらか蓄積され放置する訳にもいかないため１日待機することになった。

昨晩に月光とアイラが麻帆良学園侵入計画を練っている最中に、足りなかったり追加で欲しい情報が出てきたため、青葉はこれについて情報を入手してくるために、老朽化からか建付が悪くなり車庫のシャッター以外で唯一開く磨りガラス窓をＭＡＶのワイヤーアームで開けると市街地へと向かっていった。

一方、月光はＩＲＶＩＮＧに搭載されている様々な機能を知るためシステムを触っていった所、鈍い頭痛が感じられ何事かと考えていると、丁度その時機体の状態をチェックしていたアイラが何かに気づき少し急ぎの雰囲気で声を掛けてきた。

『月光？今体の調子が悪くならなかった？』

『え？あぁうん、まぁ軽い頭痛がしたんだけど何かあった？』

『私の方で月光に対する異常負荷が検知されたので。　まだ細かい所でＩＲＶＩＮＧの制御と月光の精神がリンクされてないところがあって、複数のシステムの実行でそれの処理が追いついていない。』

『てっきりもう同化できてると思っていたけど、そうじゃなかったんだね。』

『一昨日の夜に適応化作業を進めたけど、まだまだ十分にできていなかった。・・・ごめん。』

『気にすること無いよ。　一応直せるんだよね？』

『うん。　でも今からするには月光には長時間の休眠モードに移行してもらって、私は最適化作業に専念して周囲の警戒が出来ないから・・・。』

『でしたら私が今からでも戻りましょうか？』

『そうだねぇ、警戒は青葉に戻ってもらえれるなら問題無いとして、時

間は明日の侵入作戦に間に合うのであれば多少掛かっても大丈夫かな。』
『分かった。所要時間は大体２４時間だから今から適応化作業の準備を始めるので。』
『よろしくね。青葉は悪いのだけど今から戻ってきてもらってアイラの代わりに周囲の警戒を頼むよ。』
『了解です！』
『もう準備出来たので休眠モードに移行してもらえる？』

既に準備ができていたらしく、青葉の到着と彼女の警備の準備を待って休眠モードにいこうした。
それから時間が経過していったが特に何も起きず、アイラは適応化作業しながらでも会話などは問題なく出来るため、青葉ともう一度侵入計画を練り直したりと各々に過ごしていた。

――麻帆良学園侵入計画実行前日　４月１４日　午前１０時――

『しかしこんな能力があったなんてなぁ・・・。』
『重大な局面になる前に知ることが出来て良かったですね！　これも青葉のお陰ですね！』
『いやまぁ、そうかも知れないけれど。』

現在、月光の微かにフワフワと揺れる視界には彼の転生後の体であるはずのＩＲＶＩＮＧの姿が捉えられていた。
そして月光がそのＩＲＶＩＮＧを見ている今の体は青葉が補佐役となっているＲＱ―１６”Ｔ―ＨＡＷＫ”。彼がＭＡＶと呼ぶ小型ＵＡＶにＩＲＶＩＮＧから精神体を移していた。

この状況に至った経緯は月光が長時間休眠モードから復帰し、青葉が共同戦術ネットワークより詳しく練った計画を転送して、月光が休眠モードだったため確認の取れなかった事項を尋ねていた時だった。
初めは今日と明日の具体的なタイムスケジュールの確認だったが、全侵入ルート候補の下見について青葉が『月光さんは直接見に行かないのですか？』という問いがきっかけである。

『行きたいのは山々だけど、日中に人目の多い市街地をこの体で動き回るのは流石に無謀だから、青葉の中継を見ながら指示を出すよ。』
『あれ？スワップで偵察しないのですか？』
『うん？スワップで偵察？どういう事？』
『・・・もしかしてアイラさん、ホットスワップについて説明されてないのですか？』
『・・・・・・・・・・・あっ。』
『ホットスワップ？　言葉としては聞いた覚えがあるけど、そんな機能が自分達にあるの？』
『ごめん・・・。言い忘れてた・・・。』
『ま、まぁアイラについては別の話として・・・。　重要そうな感じがするけど、それってどんな代物？』
『月光さんの記憶を元に再現された能力なんですけど、ＢＦ２ＭＣ（バトルフィールド２　モダンコンバット）を覚えてますか？　簡単に言ってしまえばあのシステムまんまです！』
『あぁ、あったねそんなシステム。　あの頃はシングルとチャレンジはやり込んで、まだまだ純粋にゲームを楽しんでいたなぁ。』
『月光さんの昔話はひとまずスルーするとして。　オリジナルのシステムとの違いは、今のようにマニピュレーターで有線接続している状態でなければ使用できない事ですね！』
『そして、マニピュレーターを通して無人機から無人機へ自分の精神を転送する事ができ、今度はその無人機を自分の体として使えると。』
『話が早くて助かります！　あ、ちなみに”ｍｏｄ．ＧＯＤ”仕様か

それに準ずる高い処理能力を持つ無人機で無くてはスワップ出来ないので注意です！　ちなみに”ｍｏｄ．ＧＯＤ”仕様機同士だとお互いのサポーターの認証が必要ですが、もう私とアイラさんとで認証を済ませているので今からでもスワップ出来ますよ！』
『モノは試しか・・・。じゃあ早速ホットスワップ機能、使用してみるかな。』

閑話休題

スワップ時に視界が白くなりその後回復した視界に表示されるインターフェースはＩＲＶＩＮＧへの憑依時と殆ど変わりなく、目に見えて分かるモノとしてはスキットの青葉とアイラの表示位置が入れ替わっているぐらいだった。
ただ、機体の性能上どうしても劣る部分があるようで、よくよく見るとセンサー類の項目数が少なかったりそれらの更新速度も少し遅かったり、カメラの倍率もＩＲＶＩＮＧの物より低かったりと、いくつかの点で性能差がみられた。

『ところでこの機能はアイラと青葉も使えるのか？』
『それは無理。この機能、と言うより能力は月光のみのモノなので。』
『差し詰め転生特典、といったところでしょうか？　実際に使ってみて分かったのですがこのホットスワップ、受け取り側にそれなりの負荷の掛かるモノの様でこのＭＡＶから再びホットスワップを使うには６時間後でないとダメみたいです。』
『便利な能力ではあるけど使い所を誤らないようにしないとね。　さて、早速だけど麻帆良大橋を偵察しに行こうかと思うけどアイラはこの車庫で待機。今回は共同戦術ネットワークをお互いに接続したままだけど、取り敢えず行ってきます。』
『うん、いってらっしゃい。』

当初立てていた行動予定より若干遅れてしまっているが、月光は大して気にしておらずのんびりとした様子で飛び立っていった。

市街地上空約１００ｍ、飛行に支障がない弱い風が吹いているがそんな事も一切気にしておらず、月光は前世では絶対味わう事のなかったであろう”自由自在に空を飛ぶ”というものをＭＡＶという無人機の体であるが存分に楽しんでした。

『いや～、こんな風に飛べる日が来るなんて。今こうして問題なく飛べていられるのは青葉が補助をしてくれているお陰だよ。』
『恐縮です！　でもいきなりの飛行でもここまで安定させてるなんてすごいです！　私も案外補助する負担が小さくて助かります！』
『私が今日に至るまで無人機への適応の手助けをしていたので！』

少しドヤ顔気味でアイラは自身の功績も示して、月光がそれに感謝を伝えると満足気になり、麻帆良大橋の概要について青葉が持ち帰ったパンフレットや秘匿回線で接続しているインターネットから情報を総合し月光らに報告する。

月光と青葉は今いる低層ビルと極小数の中層ビルの市街地と、対岸の巨大な世界樹と図書館島や南欧風の街並みを抱える麻帆良学園を繋ぐ麻帆良大橋に徐々に近づきながらその説明を聞いていた。

『正式名称”麻帆良湖連絡橋”は麻帆良大橋と一般には呼ばれアメリカ・ニューヨーク市のイースト川に架かるブルックリン橋の建築に携わった技師らが参加して１９１３年に開通。全長約１１３０ｍ、主塔は４塔、平均水位上から主塔最上部までの高さ約５２ｍ、一般道路片側２車線で両車線の間は歩道になっていて自転車は手押し。でも通勤通学時は結構なスピードで自転車・キックボード・スケートボーダー・ローラースケーター・セグウェイなどが走り抜けるとの事。帰宅ラッシュは１９時から２０時で２０時半を回ると極端に車両の交

通量が減り薄気味悪く様々な怪談話があったりなかったり。　戦後の高度経済成長時代まで日本最大の吊り橋だったが、現在では日本最古の吊り橋の肩書を持ってる。』
『真夜中なら橋上を通れなくもなさそうだけれど、ココを侵入ルートにするならやっぱ停電時かなぁ。』
『取り敢えずは橋の裏側を映像と写真を撮って後程の判断の参考にしましょう。』

日中である以上人と車両の往来は多いが、幸い偵察箇所が橋桁の裏側で歩行者の多い歩道は車道に挟まれ橋の真ん中にあるため、余程上昇しなければ目撃される危険性はかなり下げられる状況だった。
橋桁の裏は月光が推察していた通り橋の向きに添い、大体両車線のセンターラインの真下ぐらいの位置に一際太い鉄骨がある。
そこは手すりがあり床面は滑り止め加工がされた点検用通路と思われる場所がとなっていた。
また、その通路から天井にあたる橋桁裏までの高さと通路の幅はＩＲＶＩＮＧが通るに問題ない十分なスペースがあると確認できた。
人目に付かぬよう橋の袂から結界が展開されていると思われる橋の中央部、その手前の麻帆良市街地から見て第２主塔までの偵察を行いこのルートについて３人がそれぞれ考察していた。

『停電時に麻帆良学園の結界を絡繰さんがダウンさせて、エヴァンジェリンさんはネギ君を襲撃するんですよね？』
『確かね。ただ具体的に何時頃からおっ始めて、橋の上での最終決戦がいつになるのかは分からない。』
『もし、橋ルートを選択するとなると停電直前には橋の袂近くに潜伏しておいたほうがいいと思う。』
『それで決戦に巻き込まれる前に渡りきってしまおうということですね？』
『そうなると思うけど下手すると発見されるリスクがあるわけだから、あまり良いルートという訳でも無いかなぁやっぱり。』

麻帆良大橋を使う侵入ルートの参考にする写真を数十枚程撮り終え、候補地の中で現在最寄りである列車ルートの基点なる小規模な貨物駅がある麻帆良市駅へと向かった。

それなりの物流拠点なのか着発線荷役方式と呼ばれる荷役作業を採用する発着場側には多数のコンテナが積まれており、こちらも小規模なトラックターミナルも併設されていた。一方麻帆良市駅は街の規模に見合った物で利用客も多く賑わいを見せていた。

アイラがインターネット上から入手した路線図や電車の運行表等を読み取ったところ、この列車ルートは麻帆良学園への侵入方法として利用できないことが判明した。

その理由は貨物列車は麻帆良学園内の麻帆良学園中央駅に一切入らない事だった。

まずこの周辺の鉄道事情だが大きな駅である麻帆良市駅と麻帆良学園中央駅の二駅と、麻帆良市街～学園間は鉄道部が運営する私鉄が麻帆良湖をぐるりと囲む形で敷設され湖の南北に無人駅が一駅ずつの計四駅、そして東京方面の上り側に大宮駅がありそこから川越線が一旦二手に別れ麻帆良市駅と麻帆良学園中央駅と路線が伸び川越市で再び合流する。

東京から伸びる貨物路線は麻帆良市駅側を通り北陸地方へと続くため、貨物列車のコンテナを利用して学園内へ密かに侵入するという計画は元より破綻していたのだった。トラックを利用する代案も考えられたがリスクが大きいのでボツとなった。

『もしここで無計画に適当なコンテナにでも忍び込んでたら東京か北陸の何処かに出荷されるところだったね。』

『このルートなら中々スリルある潜入方法になりそうだったんですが・・・。』

『今スリルは要らないかなぁ・・・？　多分この先もっとスリルのある出来事があると思うし。』

続いてやってきたのは麻帆良湖南側で湖岸・湖中ルートとなる地形は砂浜や岩場だったり、小さな崖になっているような場所もあるなど様々であるがＩＲＶＩＮＧの機動性なら大きな障害とはならなさそうだった。

迂回ルートも湖南側を見て回りその後に湖の北側も下見したが地形などにあまり差は無かったが、市街地が広がっているためこちら側での迂回ルートは難しいと考えられた。

ちなみに車道ルートは満場一致で下見する必要がないという事になり、その分の時間を湖岸ルートなどの下見に充てた。

これら全ての侵入ルートを見て廻り隠れ家に戻る頃には日は傾き、時計は午後５時を指していた。

『写真も映像もたくさん撮れましたね！　後はもう作戦会議でしょうか？』

『そうだね。アイラ、今からそちらの方に帰還するよ。』

『分かった。　あ、ちょっと待って。　今外の方に人の反応が・・・大丈夫。　この建物に来なさそうなので。』

『む～・・・。あ、見えました見えました。　犬の散歩をしている人が２人いますね。　ジョギングしながら林道に沿って行っているのようですので、もう廃屋に向かっても大丈夫そうです！』

その二人が十分離れた頃を見計らい消防団の廃墟へと降下し、午前に出ていった窓ガラスを開け帰還した。

アイラが権限を持つＩＲＶＩＮＧは今朝と体勢を変えておらず、ＭＡＶの充電のためボディユニットに着陸した。

『よし、着陸完了。　ただいま、と言うのはＩＲＶＩＮＧへスワップし終わってからかな。』

『マニピュレーターの接続を確認。ホットスワップの認証は済ませてますので。』

『また機会があれば青葉のＭＡＶをよろしくです！』

ホットスワップ能力のリキャストタイムは過ぎており、再びマニピュレーターを通し最初のホットスワップ時と同じ感覚の後ＭＡＶからＩＲＶＩＮＧへと精神体を転送し月光は帰還を果たした。

文字通りの意味の”実家のような安心感”をなんとなくではあるが感じ取っていた。

『改めて、ただいま。』

『おかえりなさい。　ＩＲＶＩＮＧやこの周辺に特に問題はなかった。』

『ん、了解。　留守番ご苦労様でした。』

『このくらい余裕なので。』

――午後６時――

月光がＩＲＶＩＮＧへホットスワップをした際、ＩＲＶＩＮＧのリキャストタイムは２時間半とＭＡＶと大きな差があったがＭＡＶ側にリキャストタイムは発生せず、何より今日はもうＭＡＶへ移り活動する予定はなかったため問題はなかった。

お互いの機体の状態をチェックしたり、撮影した写真を全て共同戦術ネットワークへアップロードしたり等を済ませると、そこそこの時間が経過しており明日の潜入作戦決行に向け会議を始める事とした。

『まず潜入ルートの確定。麻帆良湖の南北湖岸・湖中・迂回ルート計６案、麻帆良大橋を使う橋ルート、貨物列車を使う列車ルート、周辺地域の道路を使う車道ルートの計９案。』

『この内、湖北側は麻帆良市街地が広がっているため迂回ルートは難しいです。それと、湖岸・湖中ルート共に人気の少ないという点で見ると北側はあまりオススメできそうにありませんが、停電という状況を考えるとどうでしょうね。　列車ルートと車道ルートは日中の偵

察で侵入経路としては不適切であることが分かったので無し、といったところです！』
『そうなると南側の３ルートと橋ルートの計４案が比較的潜入に向いていて、北側の湖岸・湖中ルートは少し怪しいといったところかな。』
『でも、具体的な決闘の時間が分からないので橋ルートは不安要素が残ってしまいますね。』
『停電が実施される時間は２０時から２４時の間。　南側の湖畔は遊歩道とか無いので人気はほとんどはないはず。でも距離が湖北側と比べて遠いので少し時間が気になる。』
『できればネギ君とエヴァのバトルを見てみたいんだよね。　だからあまり移動に時間かけたくないなぁ。』
『・・・じゃあ橋ルートがその条件にを満たせそうだからそこに決定する？』
『異論がないならそれでお願いしたいかな。』
『科学的ではない魔法バトル！青葉も何だか気になってきちゃいました！　是非とも写真とかデータで記録を録りたいですね！私も橋ルートで賛成です！』

砲弾やらミサイルやらが飛び交う様な近代戦とは違う魔法を使っての戦闘に急に興味が湧いてきた青葉の同意と、元々どのルートでもよかったアイラが異論を述べることもなく侵入経路は麻帆良大橋の橋桁の裏側にあった通路を伝って麻帆良学園に潜入する事に決まった。

続いて橋を渡り潜入した後、学園内での活動拠点をどうするのかという話になったが、結局現地で探してみないことには決められないということになった。

『まぁ、向こう岸の橋の袂には結構な数の倉庫群になってて、空き倉庫の１つや２つぐらいあるだろうからどうにかなるんじゃないかな。』
『結構色々と考えてきた割には、そこは楽観的なんですね・・・。』
『あると思えばある、ってね。』

最後に作戦のあらすじだが、２０時に電力供給が絶たれ停電になった後、市街地南側の公園を駆け抜け湖岸に到着したら北上し麻帆良大橋の下へ移動。そこから橋桁裏の通路に通じてる中型リフトをＩＲＶＩＮＧの電力で動かして上り可能な限り早く対岸へと渡り切る。
障害となりそうなのは橋桁と次の橋桁へと続く主塔を通り抜ける穴だったがどうにか通れるということだった。
取り敢えずのところは作戦の概要がまとまると、これ以上話し合うようなこともないため月光は翌日の朝まで休眠モードに入ることにした。
今回も警戒担当にはアイラが自ら申し出たが、そこへ青葉が声を上げた。

『いつもアイラさんに警戒を任せっきりにするのは、私が心苦しいので今夜はこの青葉にお任せください！』
『いえ、そんな。私は大丈夫なので。』
『まぁまぁ、私をこの心苦しさを助けると思って！ね？』
『・・・分かった。警戒のマニュアルは『共同戦術ネットワークあるので大丈夫ですよ！』それじゃあよろしく・・・お願いします。』
『・・・うーん、また今度自分が休眠時に警戒しようか？』
『『月光（さん）は私達の上位に当たる特別な存在なので（ですから！）』』
『なんだかこの特別扱いはあまりいい気がしないんだけどなぁ・・・。』
『無人機への適応化がなされているとはいえ、月光さんは元人間ですからどうしても負担が掛かる所があるので休息、特に睡眠に当たる休眠モードは出来る限り取ったほうがいいんですよ。』
『そういう事であればお言葉に甘えておこうかな。でも、たまには自分にも数時間だけでもいいから警戒を担当させてもらっても大丈夫かな？』
『でしたらローテーションを組み、今度月光にも機会が来るようにするので。』

『どんなローテーション組みます？私は……』

アイラと青葉が警戒体制の組み合わせをあーだこーだと、主に青葉が提案していく形で話が進む中、アイラから『もう先に寝てても大丈夫　ローテーションは明日伝える』とチャットが表示され同様の目配せをさせたので、月光は『ありがとう』と返信を送ると休眠モードへと移った。

二人は結局日付が変わるまで打ち合わせを続けて警戒体制を決めて、この日は青葉が担当し夜が明けていった。

ＡＣＴ．６　あの橋の向こうへ

――麻帆良学園侵入計画実行日　４月１５日　午前８時――

前夜から周囲の警戒を担っていた青葉によって目を覚ました月光は、同時に目覚めたアイラから昨晩組まれたシフト表とマニュアルが送られきてそれに目を通す。

シフト表は週に１度の間隔で、月光本人が数時間の夜間警戒に組み込まれたものだった。

マニュアルと言うのはアイラが作成し青葉にも送られた物と同じで、よく注意しておく計器や項目を可愛らしい矢印やイラストで強調してあった。

それらに癒やされながらマニュアルを読み終わる頃を見計らい、青葉が今日の予定について尋ねてきた。

『ところで今晩の予定はみっちり立ててはいますけど、日中はどうするんですか？』

『そうだねぇ・・・。特にこれといってやることも無いけど、どうしよっか？』

『質問を質問で返さないでくださいよ。偵察する場所も気になる場所も昨日一昨日で全て巡って、システム面のアップデートも済ましたし、今すぐにやることはないのじゃないでしょうか。』

『半日どうやって時間潰そうかな。』

『ネットが今一番この状況で長時間を過ごすには適してると思うけれど、どう？』

『うーん。２００３年ってニ〇〇コ動画はおろかＹ〇ｕＴｕｂｅですら影も形もない時代で、精々前世の世界との違いを調べて回るぐらいかな。　それでも十分時間を潰せそうだけどね。』

『ゲームとかはどうなんですか？』

『ネトゲとかやりたいのは山々なんだけどね。　ゲームも自分が知ってる限りのタイトルはあんまり検索に引っかからないし、何よりもうこの時期のゲームのグラフィックじゃもう我慢出来ない体になって

しまっているからやる気が起きないんだよ。』

今は人間の体じゃなかったりしますけどね、などと青葉にツッコまれたが、今はインターネットでの情報収集に集中することにした。

この時代、インターネットの普及が進んではいるものの接続方法は有線によるものが主流で、特に日本国内は公衆無線ＬＡＮ等といったものの整備は遅れていたため無線によるネット接続が難しかったが、それを踏まえた改修がされたＩＲＶＩＮＧには現在搭載されている機器を応用してインターネットへの接続を可能としていた。　幸いこの周辺は無線ＬＡＮ等が整備されておりスムーズに調べ事ができた。

ウィンドウの縁が半透明化されてないブラウザを懐かしく感じつつ巨大オンライン百科事典から昨今の出来事で前世との違いを探り、アイラの方で記憶している膨大なデータと照らし合わせたところそこまで大きな違いがないことがわかった。

特に先月から勃発した２００１年のアメリカ同時多発テロに端を発するイラク戦争において、先日イラク首都バグダッドが有志連合軍により陥落したが連日この戦争について報道がされているらしく、ネットニュースの１面も某巨大掲示板もイラク情勢についての話題が非常に多く、添付されている画像や動画は前世でも見た覚えがある物がいくつかあった。

『そういえばこの時期だったね。アメリカ軍とかがイラクを制圧したのは。まぁその後の事は大体知ってるし今は関係無いからスルーかな。』

『イラク戦争はこれからが本当の地獄ですね。　あ、麻帆良学園に関するスレが幾つかありますが・・・、どこもかしこも過疎ってますね。』

原作漫画には描写が非常に少ない外から見た麻帆良学園などの情報を集めようと思ったが、公式ホームページを初めとするサイトから仕入れる事ができた役に立ちそうな情報は学園内の地図程度だった。

もう一つの情報収集手段として某巨大掲示板を使って調べたが青葉の言うように大した情報量ではなかった。

『うーん、思ったほどの収穫はなかったかぁ。』
『大人しく残り１０時間ぐらい待機してますか？』
『私は不備が無いよう青葉の機体を含めてしっかりとメンテナンスをするので。』
『何か手伝える事があるなら手伝おうか？』
『大丈夫。　月光と青葉は休んでて。』
『じゃあ私はまたまたお言葉に甘えて休まさせていただきますね！』

そう言うと青葉はさっさと休眠モードへと移行した。
一方月光はまだ休むには勿体無い気がして休眠モードへの移行を悩んでいた。

『月光は休まないの？』
『なんだか今夜の作戦に向けて何かしておきたい気分なんだよね。そこでこのＩＲＶＩＮＧへの理解を深める為にも、迷惑じゃなきゃメンテナンスに付き会おうと思ってるんだけどいいかな？』
『…ん、分かった。』

ＩＲＶＩＮＧとＭＡＶのシステムメンテナスを見つつ、気になった機能等をアイラに尋ねて解説してもらうこの時間は２人にはとても有意義に感じられ、そうしているうちにあっという間に時間は経過していった。

――午後７時――

日は既に地平線に沈み街灯や建物の窓にも明かりが灯り、学園を含む麻帆良市街地域の停電まで1時間というアナウンスが流れる。街道を行き交う人々の多くは帰宅者のようで、そのアナウンスに慌てる様子もなく麻帆良駅とバス・タクシー乗り場へと足を運んでいた。
駅舎内と乗り場には今回の定期メンテナンスによる停電を告知するチラシが、目立つよう何枚も貼り付けられており市民に対し周知徹底がなされている様子がここでも見受けられた。
その街の上空に設定された偵察ポイントより青葉のＭＡＶが滞空し、人の流れを確認していた。数分ほどその場にとどまっていたが、次のポイントである市街地南側の湖畔公園の上空へと移ると廃墟で待機している月光らに報告をし始めた。

『見ての通り、もう公園には人気が無くなってますね。　公園までのルートもクリア、問題ありません！』
『ふむ…。　よし、予定より早いけど行くとしようか！　オペレーション〝クロスオーバー・ザ・ブリッジ〟、スタート！』
『了解です！では私は少しだけ先行しますね！』

この廃屋に来てから大体3日程、その間は待機モードだったため生体脚は緊張しており、ワイヤーアームでシャッターを開けたもののしゃがみ歩行で屋外に出るのに少々手間取る。
這い出ると言った方が適切な動きで車庫から出てくると人工筋肉をほぐすため背伸びし始める。ここで以前にも同じシチュエーションがあったことを思い出すが、既に手遅れで足元にはコンクエストマーカーがばら撒かれていた。
少なめであったがやはりアイラは前回同様スキットから音声・映像共に切断するも、今回は青葉がいたのがアイラにとって運の尽きだった。
青葉はこの現場を見ていないため彼女からすれば、いきなり顔を赤くしたアイラがスキットから映像を切断するという行動に興味を持たざるを得なかった。

『あれ？アイラさん、急にどうしたんですか？　あ、もしかして月光さんにセクハラ的なことでもされたんですか!?』
『どうしてそうなるんですかねぇ…。　まぁ、大した事？じゃないから自分の進路の警戒よろしく頼むよ。』
（アイラはさすがにまだ復活してないか。でも早い内に戻ってきてもらわないと。）
『え～すごく気になりますね～。　あ、なにやら公園の茂みの中に人間の反応が２つありますね。　移動経路から離れた所ですけど注意してください！』
『了解。　あー、ところでアイラ。この作戦名についてどう思う？』
『……作戦の内容そのままだと思う。』
『まぁ、そうなんだけどね。　しかし、この作戦名はダブルミーニングになっていて”橋を渡る”という事ともう一つ、ネット小説的等からすると”ここから本格的に本筋に自分達が関与してく”という意味合いを表しているんだよね。　どう？なかなか良いと思わない？」
『何だか安直でしょうか？もう少し捻りがほしいです！』
『捻りも何も、ダブルミーニングなんだからこんな感じでいいじゃない。』
『そうですかー？　こうもう少し何かをパロるとか…。　アイラさんから何か無いですかね！』『エラー、よく聞き取れませんでした。』』

急に青葉から話題を振られたものの、我関せずという態度で即答した。
対する青葉はあまりに早く、それも望んだ返答ではなかったとういう事で少しだけしょんぼりしてしまっていた。
『まま、そう気分を落とさないで。オペレーションネームなんてあって無いようなもんだし。　って話の発端である自分が言っても締まらないか。』

とは言うも即答というのが結構響いていたようで、一方のアイラは「できれば答えたくない」という気持ちが先走った結果即答となったことにとても気にして、索敵どころの話じゃないぐらいオロオロしていた。

そんなこんなで移動すること数分後、湖畔公園を囲む２～３ｍほどのフェンスに行き当たったが、月光は難無く跳躍で越え公園へ入り込んだ・

『・・・青葉の言っていた二人組をこちらでも捕捉したけど、茂みが多く向こうからは直視できないと思う。』
『オーケーオーケー。　このまま気付かれないようにこの公園を抜けてしまおう。』
『もしバレそうになっても駆動音で誤魔化せるからＩＲＶＩＮＧの特性が羨ましいです！』

いつの間にか完全復活をしていた青葉が、牛の鳴き声ような駆動音を指して『私はブロワーみたいな羽音ですから』と付け加えた。
機械部品と生体部品が混合しているレッグユニットから発せられるこの音は急激な運動をした時に出ることが多い。
ちなみにセミの鳴き声は外部音声機器で意図的に出すことができるが、アイラは『敵を油断させるためでは？』と使用目的を予想していたが結局は分からずじまいだった。

『猫や犬ならまだしも牛の鳴き声で騙される人なんているのか・・・？
まぁとにかく停電約３０分前の夜の公園で、人目に付きづらい茂みの中で何をしてるのかは知らないが、コチラに気が付かなければなんだっていいか。』
『でも気になるんじゃないんです？　こんなシチュエーションですから色々想像が捗りますね！　何がとは言いませんが！』

『はいはい、青葉さんは当初の予定通り次のウェイポイントまで移動しましょうねー。』
『釣れないですね～。　あ、アイラさんは気にしなくてもいいですよ！　ただの下らない世間話みたいなものですから！』
『そう？』
『そうそう。本当にしょうもない話だからね。　てか、下らないっていう自覚あるじゃないか。』

そんな気の抜けた会話を続けている内に3人は麻帆良大橋の袂、吊り橋のメインケーブルと橋桁が接続するアンカーブロックと呼ばれる構造物に設置された中型リフトの前までやって来ていた。
停電開始の5分前に到着したため、予定を繰り上げ電力が供給されている今のうちにリフトを使用することにした。
青葉の偵察とアイラの心音センサー等によるスキャンで周囲と橋桁裏の作業用通路を隈無くチェックし、人がいないことを確認してからリフトを起動させ通路へと進んで行く。
どこか機械的な女声の市の広域放送は伝達・注意事項を繰り返していたが、停電開始1分前になるとカウントダウンが始まる。
合流しいつもの場所に青葉を載せた月光はなるべく音を立てないように通路を進み、カウントダウンの残り秒数と今の時間を見比べていた。
タイマーの表示が0になり小さく短い電子音が鳴るのと同時に時計が20:00．00を表示してから僅かに遅れて、広域放送の「0」という声が反響して聞こえてくる。
直後、補剛桁の間から見えていた学園の明かりが一斉に消えて、通路の手すりに沿って巻き付けられ弱々しく赤く光っていたライトチューブもその明かりを消した。
『よし、オペレーション”クロスオーバー・ザ・ブリッジ”、ステージ2へ移行。これより結界の境目と考えられる麻帆良大橋中央部を突破する！』

『よーそろー！』
『・・・。』

いよいよ麻帆良学園への侵入を目前にテンションが上がってきた月光と、そのノリに便乗した青葉と、どうしていいのか困っているアイラとそれぞれの反応を示しながら一行は作業用通路を進む。
次々と主塔の通用口を通り抜け、最後の主塔を抜けると麻帆良学園側のアンカーブロックと昇降用リフトの乗り場が見えてくる。
当然というべきかリフトは地上に降りており停電中なので、月光の電力を操作盤を経由して供給しウィンチを稼働させてリフトを上げることにした。
橋上にはどういう訳か誰もおらずリフトの滑車の音を気にする必要がなくあっという間に月光達の所まで上がってきたリフトに乗り込む。
幸いリフト自体にも操作盤が付いており下降中でも通電させ続けれることが出来た。

『とりあえずは無事に麻帆良学園への侵入成功だね。　周囲には人影なし。それじゃ魔法バトルの見物にうってつけの場所を探そうか。』
『事前にピックアップできた場所は橋の南北両方合わせて５ヶ所。』
『ほとんどが建物の屋上ですね。　１箇所は高台の公園みたいですけどどうします？』
『予測される決闘時刻までは大分あるはずだから全部見て回ろう。２人共周囲の警戒頼んだよ』
『了解。』『了解です！』

ＡＣＴ．７　科学ときどき魔法のち…

人目に付かぬよう素早く候補地全５ヶ所を見て回ったが、橋の南側にある大型の平倉庫の屋上に陣取った頃にはかなり時間が経過していた。

見晴らしが良く橋の上も見ることが出来、平倉庫の屋根には幾つか月光が身を隠せそうな換気塔が付いていることもこの場所にした決め手の一つである。

アイラの魔力という物をＩＲＶＩＮＧのセンサー類で観測したいという申し出で、青葉のＭＡＶにある機器も使いデータ観測の用意をする。

大体の準備が済んだ所で、先日の山中で感じたような気配し始めたかと思うと、学園都市内の商店街方面からコチラに向かい気配が急速に接近してきた。

続けてアイラがモニターしている各計器に反応が出てそれが強くなり始め、アイラと青葉から報告が上がってくる。

『お、来たかな。』

『幾つかのセンサーで特異な反応を検知。これが魔力というものだと思う。』

『波長が幾つかでてますけどそれらの特徴を分類すると２種類に分かれますね。恐らくネギ君とエヴァンジェリンさん、それぞれの魔力なり魔法なりの波長でしょうか？』

『これらとは別に１つ、魔力と混ざった無人機に近い反応を確認。』

『多分、茶々丸かな。姿を目視できるようになったらしっかりと記録しておいて。今後魔力とかのデータは参考になるはずだから。』

『戦闘中なんでしょうね。高速飛行で建物の間をすり抜けながらこちらに向かってきています。』

一部レーダー類での反応は建物の影などで遮られ時折ロストしていたが、他のセンサー類で常に捕捉できており見失うことはなく彼等

が麻帆良大橋へと向かっていることが確認できていた。
　ふとどちらかに発見されるのではと思ったが、ルートは現在の位置から離れた場所をとおり、身を隠せる場所もあるので発見される可能性は低いと判断し、このまま観測を続ける。

『ところで茶々丸さんってロボットでしたよね。向こうから私達の存在が感知されたりしないでしょうか？』
『・・・あっ。』
『まさか想定してなかったんですか？』
『ま、まぁ軍用機って訳じゃないからそんな大層な能力はないんじゃないかな…たぶん。』

　青葉は月光をジト目で見つめていたが、それから目をそらしてやり過ごす。
　そんな時ネギとエヴァンジェリンの決闘が橋の上で始まったため、青葉に対して魔法戦闘の記録を録るよう催促した。

　橋の上では原作通りに事が進み、ネギが事前に仕掛けていたトラップ型の捕縛魔法を脱したエヴァ・茶々丸が形勢逆転し、杖も捨てられエヴァに吸血される直前という追い詰められた状況だったが明日菜とカモが加勢し難を逃れ、体制を立て直すべく身を潜めていた。

『面白いように吹っ飛んでいきましたね！エヴァンジェリンさんはここで駆けつけた明日菜さんに、まさかあそこまで蹴飛ばされるとは思ってもみなかったでしょう！解説の月光さん、この展開はどう見ますか？』
『カモをフラッシュバン替わりに使い茶々丸を怯ませ、その隙に神楽坂は危機的状況にあるネギを助ける、中々のコンビネーションですね。感情的になって追撃に移るのではなく、ネギを連れて一時退避

し、体制を整えたのは重要な事です。』
『さて！助力を得たネギ先生はどうやってエヴァンジェリンさんから勝利をもぎ取るのでしょうか!?』
『2人共何やってるの・・・。』

魔法を使っての戦闘を目にしてテンションが上がりっぱなしの月光と青葉と淡々と記録を進めるアイラ。
そんな彼らをよそに決闘はネギの勝利という形で決着する。

決闘が終わりネギとエヴァンジェリンのじゃれ合い、もとい言い争いを見守りながら帰途につく双方の保護者の一人、絡繰茶々丸は一つ気になることがあり、考えこんでいたところ、それに気付いた神楽坂明日菜が声をかけた。

「茶々丸さんどしたの？　あ、もしかしてどこか痛い所でも!?」
「…いえ、少し気になることがありまして。　あちらの方角にある大きな倉庫、その屋上に私達を見ている者がいるようです。魔力が感じられないので魔法関係者では無いと思いますが…。」
「何だ茶々丸、歯切れが悪いな。　…ほう、魔法使いでも人間でもなければ何だろうな、あれは。」
「申し訳ありませんマスター。暗視装置といったものが無いのではっきりとは。機械、私のようなロボットかもしれません。」
「そもそもこういうことに私が相手してやる必要がない。それに今日はもう疲れたから早く帰って寝るぞ。　坊や、後は先生でもあるお前の仕事だ。」
「え、あっはい！」

「茶々丸。」と一言自分の従者に言うとそのエヴァンジェリンの意図を汲み、彼女を抱えネギらに挨拶すると茶々丸は自身らの家へと飛び

去っていった。

「僕は茶々丸さんが言っていた所を見てきますが、すぐ戻るので明日菜さんはここで待っててください。あ、カモ君もここで待ってて。」

そう言うとネギは杖に跨がり茶々丸が示した方角、月光らがいる倉庫へ向け飛び立つ。

残った明日菜はカモミールに仮契約した時の感想をしつこく聞かれたのはまた別の話である。

『いやー、中々面白かったね。しかしあんな派手な閃光やら音を出してバレないものなのかね？』

『さぁ？案外気づかれてなかったりするんじゃないですかね。』

『二次小説じゃよく麻帆良学園を覆う結界には認識阻害魔法が含まれてるとか、世界樹がその魔法を乗じ展開しているとか何とか言うけどそんな感じなのだろうか。』

『実際、神木〝蟠桃〟から微弱ながら魔力が放出されて何か影響を持っているのは間違い無さそう。』

口々に感想を述べながら観測したデータを見ていた時、月光は橋や世界樹のとは全く別の方角から突如、何らかの気配を感じた。

しかしそれを詳しく確かめる前にアイラと青葉が声を上げた。

『橋の上の４人がこっち見てる・・・。エヴァンジェリンの目が怖い・・・』

『エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが飛び立ちましたが…どうやら家に帰るようです。あ、待ってください！ネギ先生がこちらに真っ直ぐ向かってきてます!!』

『ワッザ!?こんなもの背負ってるなんてネギに、というか学園側にバ

レるのは流石にマズイ！』
『接触まで約１５秒、どうするの？』

自分達の存在がバレかなり焦り気味の３人。ネギはどんな相手かは分からないが目撃者と話をしようと大声で声を掛けてきた。

「すみませーーーん！そこにいる人ー！ちょっとお話を聞かせてくださーーーい！」
『逃げるに決まってるじゃないか！撤収！撤収ぅ!!』
『青葉、しっかり捕まってて。かなり揺れると思うので。』
『捕まるって言いましても、マニピュレータ１本しか無いんですけどぉ！』

ネギからはその姿は夜のためハッキリと見えなかったが、わずかに見えるそのシルエットと立ち上がった直後の大跳躍から人間でないことだけは分かった。

「な、何あれー!?あわわ、待ってください！」

ネギもまた魔法がバレた事、何よりどう見ても人じゃないモノが牛のような鳴き声出しながら物凄いジャンプをしたことに焦りながらも、全速力で逃げる月光に向け１１連の”魔法の射手・戒めの風矢”を放つ。

『警報！６時やや上方向より魔法！魔法の射手だけど種類は不明。』
『詠唱が日本語じゃないし遠いから分からん！とにかく避けてやんよぉ！』

真後ろから追尾する”戒めの矢”との距離を測り、被弾寸前に高めのバックステップで避ける。
外れた”戒めの矢”は月光を捉えるため上方へ円を描いて再び向

かってきたが、今度はそれを前方へ素早くステップし”戒めの矢”を掻い潜り地面へぶつけて回避する。

『おどりゃあぁぁ！見たかこん畜生め！』

『・・・あ、こんな時に何ですけど新たなサポーターの反応が薄っすらとありますね！』

『ここから少し南の方。倉庫群の一角みたい。』

『今はどう考えても無理でしょ！後だ後！ネギを撒かないと！』

その後もネギは一直線上の場所を選んで2回ほど”戒めの風矢”を放ってきたがなんとか回避し、攻撃パターンを読んだ月光は西洋風の商業施設が建ち並ぶ商店街区へと入り込んだ。

ネギが4発目となる”戒めの矢”が近づいてきた時に周囲の地形の中で、比較的広めな路地へと飛び込み回避を図った。

残りの魔力のカツカツのネギが放った最後の”戒めの風矢”は月光の急な動きに対応できず、その大半が建物の外壁に命中し残ったものも月光を捉えきれずに消失した。

月光らは複雑な路地と街道を幾つも縫って逃走を図り、ネギはその後を追うのは難しいと判断して上空から探すことにする。

もちろんこの動きも月光は掴んでおり、このままでは発見されるのも時間の問題と考えていた。

その時ふと目に入ったシャッターを見ると、身を寄せていた建物が電子錠式の倉庫であることが分かり、ここへ一時的に隠れることにした。

端末にマニピュレータを接続しアイラにハッキングを頼むとシャッターは直ぐに開き、中へ入るとすぐさま閉めるとトレースしていたネギの反応が頭上を過ぎて行った。

しばらく周囲を旋回していたが魔力が無くなりそうで、諦めて麻帆良大橋の方角へ引き返していった。

『なんとかやり過ごしたね。いやぁ危なかった危なかった。もう少し

であの魔法に当たるかと思ったよ。　しかし中々無茶な機動も対応できるもんだね。』
『これぐらいの機動なら余裕なので。』
『でも、これで少なくとも私達が麻帆良学園にいるっていう事がバレた訳ですから、あまりのんびりしてられなくなっちゃいましたね。何か手を考えないと。』
『そうだねぇ…。取り敢えずは拠点に出来そうな所を探そう。有力候補は倉庫群だろうから引き返そうか。それに新たなサポーターとやらとも合流したいし。』

倉庫から出ると学校がある方面から橋に向かう魔力を持った反応4つあったが、月光たちを探している雰囲気ではなかったのでとりあえずはこれをスルー。
目立ちにくい路地を通って先の倉庫群でサポーターの反応があった区画まで戻ることとなった。

ＡＣＴ．８　エネミー

――４月１６日　未明――

ネギの追跡を振りきった月光らは、その逃走中に拾った新たなサポーターの反応があり、今はその目的の反応が全く検出されないためとにかく来た道の近くに沿って、目立たないように引き返していた。

『えーっと、座標データからこっちの地図と照らし合わせて逃走経路を確認。　で、反応を感知したのはこの倉庫群と商業区の境界近くと。』

『ぼやけた感じだったので方角と大体の範囲しか分からない。　ここから南西方向、湖岸から区画の境界線までの広い範囲だと思う。』

月光はその時の情報を見ておらず、微弱な反応だった為に曖昧なデータと２人の証言を元に場所の絞込をしていると、レーダーとセンサーの索敵範囲内の一部に突如魔力とは違う波長と共にノイズが発生した。

観測地点は割りと近かったが厄介事には巻き込まれたくない月光は少し迂回して倉庫群へ向かうことにすると、ノイズは月光たちを捕捉しようとしているかのように、地形を無視して真っ直ぐ彼らの方へ向かってきた。

ノイズ発生源は空でも飛んでいるのかと考えられたが、暗視装置・熱源探知ではその地域上空に何もおらず相手は何者かわからない状況に月光は多少の苛立ちを見せる。

『今度は何でしょうかねぇ…。早いところサポーターと合流したいというのに。』

『生体反応はあるけど人間ではないみたい。それと魔力のような物も検出されてる。　どうするの？』

『取り敢えずは逃げようか。　それでも追ってくるのであれば倉庫地帯に入る前に迎撃してしまおう。』

倉庫群に近い場所で交戦すると最悪、魔法教師らを呼び寄せ新サポーターの捜索の邪魔になる所か、月光自身が発見されてしまうと判断し、相手が追跡を諦めないなら倉庫群から離れた適当な場所で撃退すると決断する。
戦わないで済むに越したことはない為、路地を駆け抜け引き離そうと試みたが、相変わらず地形を無視した動きで徐々に距離を詰められていた。

『ええい、何なんだこいつは。　……仕方ない、ちょっとリスキーだけど大きく跳んでみようか。』
『また跳ぶんですかぁ・・・。　あ、月光さん！私はジャンプしている途中に離脱して、上空から相手の正体の確認と周囲の警戒をしますね！』
『確かに着地の衝撃とか青葉には負担が大きだろうしそっちの方がいいね。』

頭上に障害物がない場所へ出ると地図で確認した、百数十m程離れた所にある開けた路地裏の空間へ向けて大跳躍を行なった。
力を込めて行なった跳躍はあっという間に最高到達点まで上昇すると僅かな滞空時間が出来た。
その間に青葉は接続していたマニピュレータを予定通り切り離すと、緩やかに降下していく月光から離脱する。
それと同時に月光たちを追っていたノイズが消失し、その様子を見ていた3人は戦わなくて済んだと安堵した。
しかし安堵したその直後、目的地へ着地体勢を取った時に異変が起きる。

着地地点一帯へ先程と同じ波長のノイズがレーダーに発生し始めた。
異変はそれだけでなく月明かりと近くの街灯の僅かな明かりで照

らされる開けた路地に、人間大の霧の渦がポツポツと現れる。
霧の渦は鈍く赤黒い光を放ちナイトビジョンモードでなくてもその不気味な色を認識出来、ただの跳躍のため着地地点の変更はできず点在する渦の中に降りるのは免れなかった。
月光はこの渦を何処かで見た覚えがあったが、接地までの一瞬は最悪のケースに備えて各武装・システムの戦闘モードへと移行作業に費やされ、着地した直後に現れた相手を見て思い出すことになる。
月光が着地に成功したと同時に霧の渦にも大きな変化が起きた。
立体的だった霧が地面に吸い込まれるように小さくなると未だに渦巻く平面部の中心、どす黒い部分からソレらは這い出してきた。

ソレらは「宇宙全体の不倶戴天の敵」と評され、何処からとも無く現れる正体も目的も不明な種族。
生物・機械問わず何らかの手段で侵食し最終的には仲間として取り込んでしまうというソレらと、長い間戦い続けているある組織はこの種族を”ダーカー”と呼んでいた。
その種族の中で最も数が多いとされる種である、四脚の蜘蛛のような見た目の”ダガン”が渦の中から続々と現れ月光を包囲していた。。

『何でこいつらがここにいるんだ!?』
『データベースによるとＰＳＯ２に出てきた通常種のダガンで間違いなさそう。』
『上空から見た限りですとその路地に１３体のダガンが出現してます！　どう見ても敵意しかないです！』

青葉の報告が終わるか終わらないかのタイミングで、月光の右後方から1体のダガンが跳び掛かってきたのを皮切りに、取り囲んでいたダガン達が動き始めた。
跳び掛かってきたダガンに対して回し蹴りで対応すると、丁度良い具合に両前足を振りかざしていたダガンの胴に蹴りが直撃。弱点で

ある腹部の赤いコアまで脚がめり込み肢体がバラバラになりながら建物の壁に激突する。

『結構硬いな！　でも原作ゲーム通りダーカーコアにダメージが入れば殺りやすいのか？』

次の攻撃が来る前に先手を取り、足払いの要領で数体まとめて蹴飛すと、周囲にいたダガンも巻き込み７体が壁際に密集していた。

実物のダーカーの異様さとその数、更にダガンの攻撃力への不安もあり、出し惜しみ無しでグレネードを使い殲滅を目指す。

ヘッドユニット下部のカーゴスペースからＭ６７フラググレネードを１つ、ワイヤーアームで取り出し安全ピンを引き抜くと密集したダガンに向け投擲、同時にバックステップでグレネードの加害範囲とダガンの包囲網から脱出する。

密集したダガンの中に投擲されたグレネードは炸裂すると、コアへダメージを受けたダガンらは鳴き声のようなものを挙げて赤黒い砂のような物に変わり果てた。

『あれ？ＰＳＯ２と撃破時の様子が違う。雲散霧消って感じじゃないのか。』

『月光さん！ダーカーがまた、包囲しようとしています！』

『もうグレネードを使ってしまったんだ。こうなったらＭ２とＬＭＧも使って、!?　しまった！』

小さな砂の山になったダガンと戦闘補佐をしてくれているアイラと青葉から上げられる情報に気を取られた一瞬に左前方の１体が月光目掛けて飛び掛ってきていた。

咄嗟に身を引いたが完全に回避しきれず、ダガンの鋭く硬い前足の爪がヘッドユニット上面へ落下の勢いそのままにぶつかる。

幸いにも目立ったダメージにはならなかったようだが、落ちてきたダガンはそのままヘッドにしがみつき、引き続き爪で攻撃をしようと

していた。

『この野郎！邪魔だぁ！』

ワイヤーアームを胴体のコアへ突き刺すとそのまま電撃を喰らわせ、激しく痙攣している間に足を掴んで引き剥がす。電撃が致命傷だったのかそのダガンは空中で砂となった

上部の射界が開け、右ハードポイントのＭ２が自由になるとヘッドに内蔵されているＭ２４０と共にセーフティシステムが解除されていることを再確認する。

爪による近接攻撃をしようと残り５体はぞろぞろと路地の幅一杯に広がり近づいて来る為、２種の火器は効率良く攻撃できるようそれぞれ別の目標へ照準を合わせた。

ヘッドユニットのＭ２４０は左端のダガンへ。Ｍ２は右端のダガンへ。

判断から照準完了まで１秒弱の短時間だったが敵との距離は十分にあり、すぐさま射撃を開始する。

弾を節約しつつの射撃だったが、単横陣の様に展開していた残りのダガン５体は両翼からあっという間に殲滅され、最後の中央の１体はＭ２のコアへの１発で砂となった。

レーダー・センサー共にノイズは完全に消滅し周囲に大きな生命反応が無いこと月光が確認すると、今度こそはと安堵の声を出す。

『いやぁ、まさかこんなのがいるとは。』

『もしかして、あの神様からのメールにあった”ちょっとばかし不安定な世界”ってこの事を指してる？』

『アイラさんたちが私との合流前に貰ったやつですよね？　私も拝見しましたけど”ちょっとばかし”なんて表現だったので些細な事と思ってましたが…。』

『神様の基準が分からないからなぁ……。　何が出てきてもおかしくないと考えておくしか備えようがなさそうだね。　恐ろしいったら

ありゃしない。』

『でもまぁ・・・。』と一言間を置いて赤黒い砂状に成り果てたダガンと脚元に散らばる空薬莢と弾帯リンクを見渡す。

『これは完全に学園側にバレるかもしれないなぁ・・・。』

銃声と爆発音よってこの場へ魔法先生らが駆けつけるのは時間の問題で、実際ノイズの無くなった機器の観測と青葉の報告から、先の麻帆良大橋に向かったとみられる４人が接近してきていた。

それとは真逆の方向からも２つの反応が接近してきていた。こちらからも魔力が観測されており魔法関係者と考えられた。

『青葉、走ってこの周辺から離脱するよ。戻ってきて。』

『りょーかいです!』

見つかるのを避けるため、比較的直線的なルートを使って当初の目的地である倉庫群まで駆け足で移動を始め、青葉は移動する月光のいつものランディングゾーン目掛け急ぎ高度を下げて着地し合流する。

魔法先生らが月光とダガンの戦闘が行われた場所に到着し現場検証と付近の捜索を始めた頃には、目的地までのルートを最短経路に変更しそこを最大速度で駆け抜けて商業区を脱することに成功していた。

倉庫群へようやく侵入すると、アイラから早めにＩＲＶＩＮＧのシステム・ステータスチェックと生体脚のクールダウンを兼ねて休眠をとりたいという事で、臨時の隠れ家として最寄りの電子錠式のシャッターを持つ倉庫群の端っこの倉庫に身を寄せることになった。

倉庫内部はカッターボートが格納された棚が壁の一部を埋め尽くしており、残りのスペースは棚からカッターボートを取り出すためと思われるフォークリフトと２艇の中型ヨットが占めている。

それらの背側面には黒く縁取りされた「麻帆良学園ボート部」の文字が様々な書体で書かれてあり、ある程度整備されていることから今も使われている施設のようだった。

『一晩留まるのでしたら他の倉庫にしたほうがいいんじゃないでしょうか？』

『奥の方は十分隠れられそうな空間になってるみたいだけど、一応他の電子錠式の倉庫も見てみようか。』

一先ず周辺の倉庫も物色したが、複数監視カメラがある（警備室は他所）・隠れられそうなスペースがないと言った理由で最初の倉庫以外隠れられそうな場所が無かった。

同時にアイラが電子錠の作動履歴を見たところ、初めの倉庫は思っていたほど頻繁に使われていないことが判明。

更にその倉庫の奥まったところは人が立ち入った形跡が少なった事もあり、一晩ここで過ごすことにした。

この日の警戒シフトはアイラが担当となっていて、精神的な疲労感を感じる月光は後のことを頼むとすぐに休眠モードへと移り青葉もその後に続く。

残されたアイラは周囲警戒を怠らずにその片手間でＩＲＶＩＮＧとＭＡＶのメンテナンスを行いながら大忙しの１日を終えた。

ＡＣＴ．９　登場！トリプル・・・？

――４月１６日　朝――

麻帆良学園倉庫地区の一角。

学園のボート部が使用している倉庫の片隅に潜み一夜を明かした月光らは、この日の内に新たなサポーターとの合流を済ませ、安定した拠点を見つけ出す事で意見が一致。

しかし、日中の隠密行動に向かないＩＲＶＩＮＧはアイラの制御の元この場に留まり、月光は再びホットスワップで自身の精神を青葉のＭＡＶへと転送し付近を探索することにした。

『昨日の戦闘で消費したのは７．６２ｍｍ弾３６発、１２．７ｍｍ弾１２発、フラググレネード１個。　私が診断した限りだと損傷の程度は無傷の範囲だった。』

『やっぱり戦闘は出来る限り格闘戦をメインにするしか無いか。』

『そもそも戦闘せずに済むに越したことはないですけどね！　それで補給はどうするんですか？』

『神様が投入したコンテナで何かしらのオマケが付いてくるみたいだけど、それをアテにし続けるのはあまり良いとは思えないからねぇ・・・。』

『じゃあ当面は弾薬の補充の目処はないという事？』

『そうなるね。　日本国内じゃ銃弾、特に１２．７ｍｍ弾なんて簡単に手に入るとは思えないから最悪、駐屯地とかの施設からくすねるか自作するかになるかな。』

『弾薬はなんとか出来るかもしれませんが、ダーカーはどうするんですか？』

『どうするって・・・。まぁ、襲ってきたら撃退する他ないんじゃないかなぁ？』

『そこは分からない事だらけなのはしょうがないと思う。本来なら存在しないわけなので。』

今後の兵站やダーカーの存在等、不安要素が尽きないが今悩んでも仕方ないと気持ちを切り替えた月光に、ホットスワップ後のＭＡＶへの最適化が済んだという青葉からの報告が入る。

電子錠の作動履歴に痕跡が残らないようハッキングしてもらい外に出ると、少し朝もやに包まれた学園はまだ静かではっきりと聞き取れるのは雀などの鳴き声と近くの道路からの走行音程度だった。

アイラが倉庫の中より各種システムで昨夜感知した反応の手掛かりを探ったが現在地からでは大した成果は得られず、結局は当初推測した新サポーターがいると思われる地域を、ＭＡＶのセンサーを頼りに見つけ出す他ないということになった。

飛行ルートの設定をすることで月光はただ周囲の監視と観測データのチェックをするだけ、と比較的単純な作業をしつつアイラと青葉と雑談をする。

ＭＡＶのセンサー類はＩＲＶＩＮＧのそれと比べるとお世辞にも高性能とは言えず、探知範囲の狭さと捜索範囲の広さも相まって、アイラの計算ではこの倉庫群一帯を探索するのに夕方まで時間が掛かるとしていた。

その夕方の時間になると、臨時の隠れ家にしている倉庫にボート部員と思われる複数の人が入ってきたがバレること無くやり過ごすことに成功する。

――同日　夕方――

学園都市全体から見れば外縁の外縁、まさに端っこと言える所まで探索範囲を拡げ、ついに目的の反応を拾う頃にはすっかり日が暮れていた。

『反応はあの辺りの倉庫からか。やっと見つけられたよ・・・。』

『麻帆良大橋の南側にある倉庫全て調べて回ったような物でしたからね!さ、新たな仲間とのご対面と行きましょう!』

目当ての物は商業区の隅にある用途不明な廃倉庫群に紛れ、外観はどこにでもあるような鉄骨建てのそこそこ頑丈そうな倉庫でどうも電気が通っていないとみられた。
軒下には横長の突き出し窓があり磨りガラス加工され自然光はあまり入らなそうな造りで、後は通常姿勢のＩＲＶＩＮＧでも問題無く通れるシャッターが１ヶ所。
そのシャッターの側には月光からすると旧式の液晶画面とカードリーダー、それからこれまで通りにジャックが端末が配電盤に偽装されて設置されていた。

『この倉庫自体が神様からの贈り物、と言う事なのかな。』
『青葉の時よりも反応が強いみたい。大型無人機でも入っているの？』
『どうなんでしょう？どうも合流前の未登録無人機の反応というのは全て同じ波長みたいなので、実際目にしてみるまではわからないですね。』

新たなサポーターに胸を膨らませつつ、偽装された端末の側面にあるプラグにＭＡＶのマニピュレータを接続する。
何処かに電源があるのかしばらくしてアンロックされると同時にシャッターが開きＬＥＤ照明で屋内が照らされこの施設の本性を目の当たりにする。
内部の様子は外観からは想像もつかないほど近代的な白色系を基調とした研究所のような内装となっており、小型ながらもしっかりとした天井クレーンが取り付けられコントローラーがぶら下がっている。
壁は一箇所に少し大きめの端末がある他、本来窓がある部分は全て空調機器と思われる物で塞がれ、その幾つかからは床へ真っ直ぐとダクトが伸びていた。
床面積も広く、一見したところバスケットコートほどのスペースが

あり、隅の一角には地下に繋がってるらしき空母の甲板エレベーターのような物が設置され、倉庫中央にサイズこそ違えど前回と様式は全く同じコンテナが置いてあった。
　そのコンテナは青葉の時の物と比べると、高さは変わらないものの横に一回り長い形をしていた。
　こちらも例によって端末も付いており先と同じ手順でコンテナの開放する。
　上面が開き電子音が３つ立て続けにすると、コンテナの中から３つの物体が飛び出し月光達の頭上を越えて後方に着地した。

「リトルチェイサー１番星、ベナトナシュ。」
「同じく２番星、スピカ！」
「更に同じく３番星！アルビレオ！」
「「これより隊長の指揮下に合流するニャ！」」

　男声と女声のした後方を振り返り今回仲間になるサポーターの無人機の姿を確認する。
　全身真っ黒で丸い胴体とそこから生える３本の人間のような腕を持つ３体は、月光の本体であるＩＲＶＩＮＧとも関わりに深い無人機であった。
　正式名称”ＴＲＩＰＯＤ（トライポッド）”、ＩＲＶＩＮＧの兄弟機のような機体で仔月光・フンコロガシ等の通称が使われている小型偵察用無人機である。

　戦隊物の決めポーズを取りつつ「完璧に決まったニャ」「打ち合わせ通りニャね」等と話している３人は”リトルチェイサー”と名乗ったが、月光はネタ元がはっきりと思い出せずに少し悩んでいた。
　そのため無意識に機体の主導権を手放してしまい、リトルチェイサーらの綺麗な決めポーズに感嘆していた青葉へ主導権が戻り、それをいい事に様々なアングルで写真を取りはじめた。が、直ぐに主導権を取り戻した月光よって撮影は中断される。

青葉へちょっとした小言を言おうかと思った月光だったが、先に新たに仲間になる3人に声を掛けることにした。

「リトルチェイサーの諸君！歓迎しよう、盛大にな！　まずは共同戦術ネットワークへの登録を、それが出来たらスキットシステムのインストールをよろしく。」

『3人のネットワークへの追加を承認。　スキットも問題無くインストールされたみたい。』

『あーあ～、たいちょ～これでいいかニャ？』

『大丈夫そうだね。他の2人も問題無さ・・・』

『隊長、どうかしたかニャ？』

『私達の顔になにか付いてるニャ？』

月光が全システムのセットアップを終わらせた3人の顔を見て言葉が途絶え、リトルチェイサー達を含めた全員が不思議がっていたところで、月光はあやふやだったネタ元を思い出して声を上げる。

『あーそうか、リトルチェイサーって夢喰いメリーに出てたあの猫少年・猫少女軍団か。　ようやく思い出せたよ。』

『なんだか人外キャラとしか合流出来てない気がします。　もっとも、今の容姿も人間っぽい人すらいませんけどね！』

青葉の言うように元人間である月光以外、サポーター達の前世ともいえる人格の元になったキャラは皆、人間ではない者達で個性溢れる面子だった。

サポーターの人格がどのような基準で選ばれているのか想像もつかず、今後合流する無人機達がどんなキャラになるのか楽しみにしつつ、月光はアイラに索敵の指示を出すとＴＲＩＰＯＤのスペックについて調べを進める。

ＴＲＩＰＯＤは月光のＩＲＶＩＮＧ同様、ＭＧＲ時のものとなっているが”ｍｏｄ．ＧＯＤ”仕様のため幾つかの変更点があった。

人工筋肉はより強力な物へ換装され、一般人であれば簡単に組み伏せてしまうだけの筋力を持ち、更にハンドガンはもちろんサブマシンガンと場合によってはアサルトライフルも扱える。
各腕の間に小さいながらもカーゴスペースが計3箇所あり、装填済みのＨ＆Ｋ　Ｐ２０００が1挺と予備マガジンが2箇所に分けて収納されもう1箇所は空だった。
機体前面部、胴体中央のカメラとセンサーが複合されたパーツをずらすと一部内部機器を露出させることが出来、それをスタンガンとすることで攻撃も可能。
背面部にはオリジナルのただのケーブルと違い、ＩＲＶＩＮＧなどと同じワイヤーアームが収納されている。
リトルチェイサー達の3機全てこれらの装備となって、彼らの連携能力ならかなりの戦力になると考えられた。

ＴＲＩＰＯＤのデータを読みながらコンテナの中を調べてみると、ＴＲＩＰＯＤ用収容ケースの他には、
・ＩＲＶＩＮＧ用ＲＷＳ　ブローニングＭ２重機関銃（弾薬無し）
同　スモークディスチャージャー計8基（装填済み）　×1
・ＭＧＬ１４０　×1
・４０×４６ｍｍ　グレネード弾
高性能炸薬弾
空中炸裂弾
催涙弾
発煙弾
３２発入り弾薬箱　各種1箱ずつ
・５．５６ｘ４５ｍｍ　ＮＡＴＯ弾　８４０発入り弾薬箱　×３
・鞘入りサバイバルナイフ　×１０
・ＩＲストロボマーカー　×1
・工具箱　×1
以上の装備・弾薬類が詰められており、予想外の収穫に月光は満足していた。

一方、作業中のアイラを除く４人は猫耳がどうとか語尾がどうとかと言う話をしていたが、青葉がふと疑問を口にすると話題はおかしな方向へと向く。

『そう言えば自己紹介の時、名前の前に付いていた”１番星”とかどういう意味なんですか？』

『あぁ、その番付は親分（ジョン・ドウ）が決めたものだが、目的だったのかは俺にも分からないニャ。』

『強さ順とかじゃニャい？　あ、でも私達得物が違うだけで基本能力はおんなじニャね。』

『他に考えられるとしたら・・・親分のお気に入り（趣味）・・・ニャ？』

『オイ、ちょっと待てスピカ。』

話の輪に加わっていないアイラは周辺のスキャンと倉庫の設備の確認を済ますと、丁度ＴＲＩＰＯＤのスペックを調べ終えた月光に結果を報告する。

月光は上がってきた報告と他のデータを元に談笑していた４人へ指示を出す。

『ハイハイ、今から皆に指示出すからよーく聞いておいてね。　まずは青葉はリトルチェイサーの誰か１人を連れて周辺の倉庫を物色。最近の人の出入りとかの形跡を重点に調べてきて。』

『りょーかいです！　それじゃあ・・・ベナトナシュさん！　一緒に行きましょう！』

青葉に指名されたベナトナシュは『何で俺なんだ』とぼやきながらもシャッターを開け、屋外で青葉に掴まると共に飛び立っていった。

探索において混線し双方の会話が混乱しないよう青葉とベナトナ

シュを別のスキットグループとして設定し、話があるときはネットワークを介して無線でＣＡＬＬするよう伝える。

『さて残る2人は自分達と一緒に、あそこのエレベーターで地下へ。電源設備のチェックと地下構造の把握が目的だから、自分が入れない所とか見てきてもらう事になるかな。』

『目立った生体反応は無いけど、狭い通路やダクトとかがあるはずなので。』

スピカとアルビレオをボディユニットに掴まらせてエレベーターへと乗り込む。

倉庫の一角にあるエレベーターは中々丈夫そうな見た目をしており本当に空母のエレベーターのようで、広さはＭＢＴを基準にしてみると1両が難無く収まる程度。

エレベーターの端、壁際に備え付けられた操作台は背面にウィンチがあり、ワイヤーアームぐらいの太さの電線が数巻き残されウィンチの側面から別の電線で台と接続していた。

操作台はタッチパネル仕様の端末が組み込まれ側面には例によって、ワイヤーアームと同直径のプラグがあり接続し、システムを起動させてエレベーターが下降させる。

月光達を乗せたエレベーターはコンクリートのシャフトをどんどん下っていく。

操作端末の後ろにある壁は窪んで倉庫へ電力を供給していると思われる太いケーブルがあり、その壁の左右側の壁は両端には金網で仕切られた窪みにエレベーターを昇降させるワイヤーロープが何本も上下に伸びていた。

四隅にはシャフトの鉄骨に沿ってエレベーターのガイドレールがあり昇降板内部にガイドローラーが仕込まれているようで、レールの継ぎ目を通ると小さく電車のような走行音を立てる。

降下を初めて約1分後、エレベーターは徐々に減速し始めるとやが

て操作台とは反対側の壁が大きな格子状の伸縮ドアへと変わり最下層階で停止する。
ドアが中央から左右に開くと同時に室内灯が点き、地下も地上部と同じような内装だが遥かに広い空間になっていた。
その広さに４人共驚きの声が漏れる。
奥行き１５０ｍ前後、幅３０ｍ前後、高さは１０ｍ前後の空間に数歩進んだ月光の足音が響く。

『まさしく秘密基地って感じだね。　送電ケーブルは壁に埋め込まれてまだ奥に続いているみたいだし行ってみようか。』

ケーブルはわずかに発熱し赤外線カメラとセンサーでそれを感知し、追って施設を進むと上方へスライドして開く大きな貨物扉に辿り着いた。
扉の直ぐ左側にエレベーターにあった物と同じ端末が設置され、これまでと同じ手順で開放して行く。
扉が開き始めると向こう側から滝のような水音が聞こえ、向こう側が見えてくると既に明かりが点いており、３基の大型水力発電用の水車が部屋の左右と中央にそれぞれ鎮座している部屋に出た。
水は左右の壁と足元の通路の下を通り各水車の元へ流れ、水車を通った水は一本の水路に集まり鉄格子の先の穴へと流れ落ちていた。
更にその奥、各水車の基部から伸びる太いケーブルの先に発電機と蓄電設備があり、鈍い音を出して稼働中であることが分かる。
アイラが言うにはかなりの発電能力があり、蓄電設備もあることからまず電気に困ることは無いと言う。
これだけの設備を神様はどのように用意したのか全く想像がつかったが、月光は地上の倉庫とこの地下施設を活動拠点しようと考え、青葉とベナトナシュの報告次第で確定させることにした。

『電気さえあれば大概の事はできるから、是非ともこの施設を活用したいところ。』

『後は上の２人の報告だけニャね。』
『隊長、隊長！　私あそこら辺にあるダクトの中見てきたいんだけどいいかニャ？』
『んー、まぁ発電設備まで確認できたし後は自由行動でいいかな。』
『やった！　アルビ！早く来るニャ！』

アーイという何とも言えない独特な駆動音をさせながらスピカが最寄りのダクトの鉄格子に駆けて行き、同じ音を出し慌ててアルビレオもその後を追って行った。

『いつ聞いても仔月光のあの間の抜けた音はシュールだねぇ・・・。』
『シュールさで言えばこのＩＲＶＩＮＧも同じようなものなので。』
『まぁ確かにこんな兵器がモーモー鳴きながら跳んで来たりするのはそうだけどね。　でも直接対峙する敵からしてみたら、不気味で恐ろしいことこの上ないんじゃないかな！　怯えろ！竦め！武器の性能を生かせぬまま、死んで行け!!って感じで！』
『・・・この世界だとモブ相手にしか通用しないような気がする。』
『そういう立ち位置、大好物です！』

そんな事を話している内にスピカとアルビレオは、ワイヤーアームのマニピュレータを器用に使い、ネジを外し鉄格子を床に下ろしてダクトへと入っていた。

『なんか隊長すごく興奮してるニャ・・・。』
『あれはきっと小物臭プンプンで主人公に蹴散らされる悪役とか噛ませ犬だニャ。』

２人の反応を受け、アルビレオの評価にしっくりとくるものを感じた月光は”魔法先生ネギま!”の世界において、どういう立ち位置に入れば色々と美味しい思いが出来るか考えてみることにした。

（ここまでのネギま本筋との関わりや今現在の自分達の姿とかを考えてみると・・・）

昨晩の出来事から薄々学園側に月光達の存在に感付いているはずで、どう見ても殺戮兵器である自分達に自由を与え物語の舞台であるこの学園に留まらせてくれるだろうか。

勿論ネギを介したりしての交渉とかで何とかなるかもしれないが、その交渉の場で使える手というのは精々原作知識程度。

しかも記憶が不正確なところもあるため、この手を使う局面は慎重に選ばなければならない。

最終手段としては転生者であることをバラした上で本筋へと絡んでいく方法があるが、それはそれでその後に何が起きるか予測がつかなくなる。総合的に見て直接、学園側と接触を図るのはあまり気が進まない。

ネギに拾ってもらい自分達が決して敵ではなく味方である事を信用してもらうという方法もある。まだまだこの時期のネギは歳相応の子供っぽさが残っているはずで取り付く島もあるはず。

但しそこからネギがどう行動するか予測できないので、自分達がどのように本筋に絡むかも推測できない。悪くはない案かもしれないけど不安要素が多い。

（あと本筋に絡んでいけそうな案は・・・）

まだ何か案はないか考えていたところ、地上にいる青葉からＣＡＬＬが入る。

≪どもぉ青葉ですぅ！　この倉庫群周辺地域、６４％の調査が終わったので報告したいと思います！≫

≪了解、この短時間に半分以上というのはかなり順調だね。　あと報告なら地下に降りてきてからでお願い。その後に今後の予定について皆とミーティングでもしようと思っててね。≫

≪了解です！それでは後ほど！≫

無線を切りダクトに潜り込んでいるスピカとアルビレオに声をかけ、今の２人の状況を確認すると同時に集合するよう伝えた。

『全部調べれた訳じゃニャいけど特段変わった所はなかったニャ。』

『まだまだ調べ足りないニャァ。』

『まぁ、またあとで自由に探索できる時間作るから。』

少し不満そうなスピカをなだめていると直通となっているシャフトを降下してきた青葉とベナトナシュも合流し、２人を本隊となるスキットグループに再度加えた。

スキットへ再接続し復帰した映像には、満足気な顔の青葉と顔が青く不機嫌そうなベナトナシュの対照的な２人の表情が映し出され、明らかに青葉が何かをした様子であった。

『隊長、聞いてくれ。　青葉の奴、あのシャフトでフリーフォールかましやがったニャ・・・。』

『絶対楽しんでもらえると思ったのですけどねぇ。　次はもう少しソフトに出来るよう精進します！』

『いや、やらニャくていいから。』

『禁止はしないけど安全な範囲で程々に頼むよ。　それで、この周辺を調べてみてどうだった？』

『はい、商業施設に隣接する倉庫以外は１年ぐらい使用された形跡がありませんでした。　なので南側に広がる森を含めますと半径５００ｍ圏内は現状無人になります。』

青葉が示した地図は色分けされており、現在地の青色の倉庫を中心に半径５００ｍ以内にある建物は全て廃屋と判断され緑色に塗られていた。

商業施設は水色、人の出入りのある施設は青色、未調査の施設はオ

レンジ色で塗り分けられ、現在位置から最も離れた区画の調査が終わっていないようだった。

『ふむ、ここを活動拠点としても問題無さそうだね。』
『上のコンテナはどうするニャ？』
『色々入ってるしあそこにあると邪魔だから、地下に持って来ておこうか。』

エレベーターを使い全員地上に戻ると装備が詰め込まれたコンテナを、天井クレーンで吊るそうとしたがフックとコンテナを繋ぐ物がなかった為、月光とリトルチェイサー達が全身を使いエレベーターまで移動させた。
特にやることのない青葉は声援を送りつつ、こんな廃倉庫群の中で明かりが漏れているのはあまりにも不審と言うことで、倉庫の電灯を消しに壁ある端末を操作しに行く。
地下についても地下にもコンテナを運搬出来るものが無く、仕方なく引きずり何処か邪魔にならない所へ移動させる。
エレベーターからほど近い壁際まで移動させ振り返ってみると、やはりというべきか床には擦った後などの傷が残されていた。

それを気にしても仕方ないということで次の指示を考える。
とは言え特にやることもなく先の約束通り、自由行動の許可を出す。
但し外は既に夜となり魔法教師らが巡回し始めていると予想されている為、行動範囲は地下室のみとした。
リトルチェイサー、特にスピカは大喜びで開けっ放しにしていたダクトの元へ向い、アルビレオも彼女ほどでは無いがこの地下施設の構造に興味があり、その後をついていく。
ベナトナシュと青葉はコンテナの中を漁り装備品類の点検を始め

たが、青葉はマニピュレータで真面目に作業を進めるベナトナシュへ手伝いながらも時々ちょっかいを出す。

『新しい警備ローテーション組もう！　新しい！シフト表の！テンプレート作った！ので!!』

それまで何かを作っていたアイラが唐突に声を上げ、そう言いながら全員に空白のシフト表を転送する。

各自思い思いに行動しながら会話に参加しローテーションを組み始めた。

和気あいあいといった具合に作成していくサポーター達を眺めていた月光だったが、ふと今後の予定について案を練っていたことを思い出す。

早いうちに原作介入の計画を確定させたい月光は編成は皆に任せ、考え事がするから用があったら直接通信でＣＡＬＬを掛けるよう伝えると、スキットの受信音量を下げてある程度集中できる環境を作る。

その頃には既に日付が変わっていたが、誰一人としてそのことに気が付かず時間が過ぎていった。

ＡＣＴ．１０　学園祭に向けて

――４月１７日　朝――

リトルチェイサーらを仲間に加え一気に賑やかになった日から一夜明け、月光は今後自分達にとって最も理想的な原作への絡みを夜通し考え、その計画をサポーター達に見せ意見を募ることにした。

月光が皆に見えるよう公開制限無しで見せたた案は、主な原作の出来事に関わりつつその成り行きを見届けることを取り敢えずは第一として、ネギま！の後の時代を舞台にしたＵＱ　ＨＯＬＤＥＲ！への介入を視野に入れるというものであった。

一晩時間を費やした割にざっくりとした計画に対し不安の声が上がるも、月光はそれを制し新たにデータを表示して話を進める。

『あくまでこれは向こう1年間の計画表という感じで。で、こっちはここ数日で集めた情報を元に作った今年度の麻帆良学園の年間行事予定。』

青葉が単独偵察時に入手していた麻帆良スポーツ新聞電子版の過去号に年間行事予定表が掲載され、それをそのまま転載したが詳しい情報は不足しているため抜けが多かった。

特に原作の大きな山場の一つである修学旅行の日程は４月～５月とされ、麻帆良中等部３―Ａの旅行日程はなどはどこにもなかった。

『今のところ日程がハッキリしているイベントは学園祭や体育祭ぐらいで見ての通りのガバガバスケジュールだけど、情報の仕入先に当てがないわけでもないんだよね。』

『湖岸の倉庫群の一部に部活動スケジュールが保存されてたけどそれの事？』

アイラの言うスケジュールというのは、昨日ハッキングを仕掛けた複数の倉庫に部活データ管理用として接続されていたパソコンに保

存されているものだが、その時は身を隠せる場所を最優先に探していたため気にも留めていなかった。
利用したボート部の倉庫の以外に麻帆良大学航空部やロボット工学研究会の他、水生生物研究会、麻帆良潜水部、ラジコン同好会等のサークルが活用している倉庫があり学園行事の日程、特に修学旅行に関して何か情報が得られるとみていた。

『あの時ちゃんと回収しておけばよかったけど、今更言ったって仕方ないね。これについてはこの後にでも回収班を編成しようと思ってるから後でよろしく。』

さてと、と一区切りつけると本題を切り出す。

『さっきの計画にあったように活動の軸には常にネギま原作にするつもりだけど、原作終了後の続編である”ＵＱ　ＨＯＬＤＥＲ!”の時代まで無事でいられるかという保証はないかな。』
『私達は演算コアさえ生きていれば機体を再製して復活出来るとはいえ、ネギ君達も大怪我したりしてますからね～。』
『装甲が十分ある隊長とアイラはともかく、私らみたいな小型機はライフルどころかピストルでも危険ニャ。』
『出来る限り安全で尚且つ原作に絡んでいけると言う条件でストーリーを考えてみると、ネギ達と行動を一緒にするというのが最も理想的だけど、それは自分達の姿とか色々考えると今直ぐにと言うのは難しい。そこでこんな感じで段階を踏んで仲間になっていくという作戦を考えてみたんだけど・・・』

全員に表示した計画案は初めに見せた計画表より詳しく段階別になっていた。
その計画の概要は”超に協力して麻帆良祭を利用しネギ一行への仲間入りを目指す”という物で、６月に開催される麻帆良祭を中心に次のように計画していた。

・第1段階目　最重要人物である超鈴音に接触し、彼女の計画に協力するかわりにネギ達と行動を共に出来るよう協力をしてもらうよう交渉する
・第2段階目　この拠点の設備や機能を拡大させ、装備の改修や物資の生産を自前で出来るようにし補給体制を整える
・第3段階目　学園祭開幕　最終日において超の計画が成功へと向かうように見せかけつつ、原作通りに進ませる
・第4段階目　後夜祭　超達の仲介でネギパーティーへ合流

原作通りに物事が進行すれば先々で起きる出来事に備える事ができるため、サポーター達もこの計画のコンセプトには賛成だった。
しかし月光自身も計画を練る段階で心配していた最大の不安要素に、ベナトナシュも気付きそれについて質問する。

『超鈴音に与するとしてどうやって彼女から信頼を得る？　それに第4段目あたりは学園側が介入してきそうだニャ。』
『学園側の介入については超に口裏を合わせてもらってとか考えてるけど、そもそもどうやってその超に信用してもらうかって言うのかが一番の問題なんだよね。一応、2つ策を練ってあるんだけど…』

月光がこれについて考えていた案を簡単にまとめると、”超の計画の結果がどうあれ結局は荒廃してしまった未来（捏造）”から超と似た境遇の人物によって彼女の計画を成功させるべく送り込まれた、という設定の捏造案。
そしてもう一案は転生者である事と自分達の計画を明かす、という思い切った事実案であった。
これらの案をメモに書き出す際、月光は意見があるかと聞くも全員特に考えていなかったらしく、それらしい反応は無かったが『まぁ、何とかなるんじゃないかな。』と月光が呟くと同意したり苦笑いしたりといったリアクションが返ってきた。

『前者はもっと具体的な設定をして煮詰める必要がありますが、後者は私達の判断でどこまでの情報を喋っていいのか判断しかねますねぇ。それともう少しいい案名は無かったんですか？』
『素性、明かしてしまっていいの？』
『案名は置いといて、問題はそこなんだよね。取り敢えず駄目元で神様宛にメールを送ってみようと思ってる。』

転生初日の１２日に送られて来たメールから、スマホと同じように発信元へ返信が出来そうであったためメールのあらかじめ下書きを用意していた。
そのメールの下書きを要約すると「超に転生者であり原作知識を持っている事を教えてしまっても良いか」というもので、送信する文章をサポーター全員にチェックしてもらい問題は無さそうなので満を持してメールを送信した。
送信はされたものの神様は返信してくるのだろうか、そもそもメールはちゃんと届いたのだろうかと僅かに心配になったが、他にもやることがあるため一先ずこの件は置いておくことにした。
次にすべき事を思い出すべく表示されていた様々な資料を整理しようとした時、ＰＯＮという着信音とほぼ同時に視界の隅に「ネットワークに着信　ｆｒｏｍ：神様」という吹き出しが現れた。
質問を送ってから１０秒も経たずに共同戦術ネットワークに着信した神様からのメールは月光を含め全員が閲覧できる状態にあった。
月光は今回の質問に対する回答なのかと少し疑問に思いつつも、ネットワークに送られたメールを各自で読むよう指示を出し自身も開く。

件名：さっきの質問の返事だよ！
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【本文】
超鈴音に素性を明かすという事だけど、結論から言うと彼女にだけ教えるのであればＯＫだよ。
本来なら月光君のネット小説での認識のように、幾つもの世界線が在ることを転生者がほのめかしたりする事自体厳禁なんだけど、この世界線の超鈴音にだけはとある事情から例外として認められてて、今回の君達の計画はそのまま実行できるから安心したまえ！
ただ、基本的には意図せずに転生者からボク達神の存在を知ってしまった者への対処は良くて記憶改竄、悪くて存在そのものの抹消。そして転生者にも何らかのペナルティが与えられる事を忘れないで欲しい。
ボクとしても君達を辛い目には合わせたくない・・・だからこの辺りの事は十分に注意してくれ！
それとこのメールアドレスだけど転生者のＱ＆Ａだと思って何か気になることがあったらドンドン聞いてね！
あ、他愛のない話とかでも全然大丈夫だよ！

神様より

『だそうですニャ？』
『この世界線の～・・・の部分がちょっと気になる。　間違いなく神様は何か知ってるよね？』

『まぁダーカーがいた時点で原作とはかけ離れてるだろうから、原作キャラにも何か差があってもおかしくないけど・・・。』
『それで、超さんにはどっちの案で説明するのですか？』

神様からの返答で捏造案・事実案共に実行できる事になったが、どちらの案で行くのかは月光はある程度決めていた。
しかし、それでもまだ悩み続けること数分。サポーター達が駄弁り始めてからようやく決心する。

『本当の事を話す事実案で計画を進めたいと思う。そっちの方が後々面倒事が出てこ無さそうだしね。』
『それじゃ、もし計画通りにいかなくなった時の次の手（プランB）とか何かあるニャ？』
『え？ないよそんなもの。』

『一応計画は決まったけれど、月光はどうやってコンタクトを取るのかは考えてあるの？』
『それはまぁ、取り敢えずは考えてあるけど・・・。』

バックアッププランが無いことを告白してから数十秒の間の後、その事を聞かなかった事にしてアイラが次の話を持ち出し、月光が考えていた４つの接触手段を一般公開されている学園や施設の地図や各種資料を交え説明を始める。
１つ目はリトルチェイサー達が中学校か大学の研究施設に潜入し、

超もしくは関係者等の机や研究室にメッセージを残す。葉加瀬聡美
２つ目は研究施設のセキュリティを考慮し、コートで変装したリトルチェイサー達が施設の受付へ超宛のメッセージを預ける。
３つ目は屋外で青葉が上空より超を見つけ、適当な所でメッセージを空中から投下するか手渡しする。
４つ目は大学研究施設外からのハッキングを行いパソコン等にメッセージを残す。
最も注意すべきは”学園側に察知されない事”であり、こちらの尻尾が掴まれることで超の計画が破綻しないようにしなければならない事。
月光は２つ目の案がこの学園でならむしろ目立たないのではと考えていたが状態の良いロングコートと帽子があればの話で、その点からベナトナシュとアルビレオはオリジナル機と比べ少し大きくなったものの問題無く潜入できるため１つ目を推した。
アイラと青葉はＭＡＶをドローン配送の実証試験機と見せかけるという案を加え３つ目を推し、スピカは研究施設へのハッキングついでに色んな情報が手に入りそうで丁寧に進めれば一番痕跡を残さないだろうと言う理由で４つ目を推していた。
しばらくそれぞれの手段について意見を交わしていたが、部活動スケジュールの回収待ちの間に先の４つの接触計画で利用できそうな物を、付近の倉庫群から探し出し４つの中から実行可能な物を後から協議することにし、今は計画全体の説明を進めることにした。

伝達手段については全機の搭載機器を改めて調べたていたところＩＲＶＩＮＧに幾つかあった予備の外部記憶装置の中から未使用の物を見つけ、ｍｏｄ．ＧＯＤ仕様のため馬鹿げた容量を持ちメッセージの内容と合わせて転生者という証拠としても都合がついていた。
月光が考えておいた３段階のパスワード設定と只のテキストメッセージを記録しておくにはあまりにも膨大な記憶容量ではあったが、これ以外に調度良い物が無くアイラによるとこのＩＲＶＩＮＧに搭載していても使うか怪しかったので伝達手段として採用となった。

パスワードの質問は、
「ネギの母親のファーストネームは？」
「ネギが主席で卒業した学校は？」
「ネギが幼少期に暮らしていた村を襲った集団の黒幕は？」
の３つでネギの子孫であると言う超であれば答えられるようにし、質問から月光達に興味を持ってもらうのが狙いであった。
更に青葉からの超や茶々丸、葉加瀬のいずれでもなら、難無く突破できると予想し３つの質問自体にもセキュリティを掛けようという提案も受け入れられメッセージ作成時にアイラも加わり構築することになった。

『まぁこれが学園祭に向けての計画のあらましってところで、計画は準備ができ次第でも開始することにするからよろしくね。』
『隊長、さっき言ってたスケジュールは私らが回収しに行くのかニャ？』
『そっちは青葉に行ってもらおうと思うから、スピカ達は自分らと一緒に倉庫漁りになるかな。勝手に決めちゃったけど青葉はそれで大丈夫？』
『全然問題ありません！ただ、詳しい位置とかは分からないのでどなたかにナビゲートしてもらえると助かります！』
『だったら私が。　多分倉庫を物色するだけだったら月光をサポートする必要は無さそうなので。』
『それじゃ役割分担も決まった事だし地上に上がるよー。』

そう言いつつ月光が立ち上がりと同時にサポーター全員が便乗しエレベーターへと乗り込む。
『これぐらい自分を利用しなくてもいいんじゃないかな。』と苦笑いで溢しエレベーターを地上へと上昇させた。

ＡＣＴ．１１　取り扱い注意な箱

――４月１７日　夕方――

昼前から始めた今後の活動に使えそうな物の捜索回収作業に、一定の目処が付いた頃にはすでに日は傾いてきていた。

この日で活動拠点周辺の倉庫群一帯の約半分を物色でき、成果はまずまずで昨日コンテナから入手した工具とはまた別種の工具類、各種ボルト類、幾つかの文房具、様々な材質のロープと大小様々な布、多数の少し傷んだダンボール、車輪が一つ擦り減り不安定な台車、古ぼけたトレンチコートといった代物を回収し、今はそれら収穫物を拠点の地上階に並べて用途別に仕分けている最中だった。

今回の活動で調べた建物の一部には何かの作業所や小さな工場もあり、多種多様な工作機械が放置されここ数年は使われた形跡はないものの電気を流せば使えそうな様子で、また後日改めて調べる運びとなる。

他にも６つの金庫を見つけその内の２つは現金が入っていそうな物もあったが、その２つを含めた５つの金庫がダイヤル式のため解錠は一時保留。残る１つはテンキー式の電子錠で回路が生きていたので開けることが出来たが中に入っていたのは帳簿や期限切れの契約証と、要は紙クズばかりで目ぼしい物は無かった。

一方、青葉はアイラの誘導と指示で昼頃には問題無く目標地域へと侵入していた。ターゲット（部活動スケジュール）のある建物は把握しているだけで８ヶ所。保存されているＰＣの具体的な位置も判明していたが、各施設を部員や顧問であろう人達の出入り相次ぎその出入りの合間を縫ってデータを回収していたため、日が暮れ始めた現在になっても後２ヶ所のデータ回収がまだ終わっていなかった。

一通りの仕分けが終わりそれぞれダンボールに入れ、後は青葉の帰還を待ってデブリーフィングだけだった。

因みにアイラと青葉はただの回収作業（スニーキングミッション）では無くなった（開始）時から共同

戦術ネットワークの会話グループを分けて雑談ばかりしている月光達と混線しないようにしていた。

『さて、超に接触するのに役立ちそうな物は回収したけど、まだ色々残されてたから今後の作戦次第ではまた漁りに行くかもしれないね。』

『もうあんな所には行きたくないニャア・・・。』

『ほんとニャよ。さっきの倉庫で隊長がもうちょっと丁寧にやってくれたらこんなに汚れなかったニャ。』

アルビレオが言うのは、この日最後の倉庫にて月光が積まれたダンボールに被る塵や埃が積もったシートを除ける際の事。

リトルチェイサー達ＴＲＩＰＯＤではこのシートを塵などがなるべく舞わないように退けるのは難しく、月光がアイラの姿勢制御サポートがない中で片脚を使い手伝っていたがバランスを崩し一歩分跳ねてしまい、その拍子に大量の塵と埃が舞い上がりその場にいた全員が被害に遭ってしまった、というのが今回の顛末である。

『それは本当に悪かったって。』と2回目になる謝罪をしながら今回の収穫物の一つであるハタキをワイヤーアームで掴むと、アルビレオのＴＲＩＰＯＤのアーム付け根部分に溜まった塵を払う。

スピカも死角になっている同様の場所を払ってもらうべくアルビレオの後ろに並び自分の番を待っていた。

ベナトナシュは隊長に迷惑を掛けるわけにはいかないと言って、別のハタキと未開封の安物タオルギフトで器用に機体全体を拭いていった。

月光の手が届きにくい機体上面のボディユニットとヘッドユニットの接合部分に溜まった塵などを、先に掃除が済んだリトルチェイサー達に頼み掃除してもらっていると、アイラから「青葉は7つ目のデータを入手し現在は最後のターゲットへ移動中」という報告が入る。

それからしばらくして、Ｍ2重機関銃のメンテナンスとＴＯＷランチャーの扱いを相談していた時に再びアイラから報告があった。

『全ターゲットを入手したので青葉には帰還するように指示を出した。後15分ぐらいでこっちに着くと思う。』
『了解。それじゃ、2人のグループをこちらに統合するね。』

別々にしておいた会話グループを結合しようとした時アイラが待ったをかけた。
理由を聞くと、
『無事に帰還するまでがスニーキングミッションなので。』
という事だったので結合は青葉が戻ってきてからにするとした。

ちなみにTOWランチャーについてはトップアタック能力も付与されているが使い所が非常に難しく、加えて何かしらのダメージで誘爆する可能性も0では無いため下ろしてしまった方がいいのでは、という事になった。
しかしTOWを全て下ろすとなると、それはそれで別の問題が出てきた。
それは機体のウェイト(重量)バランス(配分)、重心点の位置である。
機体中心に対して武装等による多少の重心のズレは修正できるが、極端なものになると機体の一部に負荷がかかり続けたり大跳躍の際にはバランスを崩しやすくする等、大きな問題があるためなるべく重心は機体の中心から若干下辺りに近いようにするのがベストだった。
スピカの提案でTOWの代わりに昨日コンテナから回収したIRVING用M2重機関銃を取り付け、元々装備していた方のM2から弾薬の半分を移してバランスを取ろうという方向で話が進んでいたが、月光が「非殺傷弾が使えるMGL140を装備したい」との意見で話が長引き始めていた。

そうこうしている内にシャッターを少し開けて青葉が拠点に帰投したので装備換装の件はまた今度となり、会話グループの結合後まず

は持ち帰られた各種部活動スケジュールを精査する事にした。
部活ごとにスケジュールの描き方に差があるものの、7月22日から学園全体で夏休みに入るのは間違いなかった。各部のスケジュールから行事等の原作に関係する情報をまとめた所、中等部3年生24クラス中14クラスから29人が8つの部活にそれぞれ所属していたがその中に3―Aの生徒はいなかった。
修学旅行については1学年あたりの人数が多い様で4月14日(前)～18日(半)・4月22日(後)～26日(半)と分けられていたが、15日にネギとエヴァンジェリンの決闘があり原作ではその後に修学旅行編だったので3―Aが京都に行くのは4月22日からとほぼ特定することができた。
あと5日とあまり時間が無くベナトナシュが修学旅行に介入するかも含めて、これからどうするのかを月光に尋ねると短い呻き声を上げ数十秒程の沈黙の後、まずは修学旅行編をどうするか伝える。

『修学旅行については結論から言うとスルーしようと思う。理由は色々とあるけど主なのは、長い目で見てもあまりメリットがない事・危険である事・移動手段の事かな。とにかく今は学園祭に向けての下準備に力を入れた方がいいかも。』

サポーター全員はスキットの画面を介して月光に注目し指示を待っていた。
その視線にプレッシャーを感じながらも3―Aが京都に行ってしまう5日後まで出来る作戦を組み立てる。
幸い接触するための手段は複数出ていたのでそれを元に、作戦の成功目標は”修学旅行前に超一味と協力体制を構築する”として、超一味に多くのレスポンスタイムを与え彼女達の予定を作りやすくする為にも今夜か明日の明け方までに”荷物”を一味の誰かに届ける。
そしてメッセージと合わせて入力する返信方法で返信してもらい、修学旅行出発前に面会する機会を作って交渉をしたい、というのが月光の考えるでそれをサポーター達へ伝え、次に即興で考えた役割を各

自に振り当てる。
『まずターゲットの超・葉加瀬・茶々丸ら超一味へ接触する算段を伝えるね。
彼女たちと面会するためのメッセージだけど・・・・・・、自分とアイラと青葉で午前中のミーティングの内容を元にメッセージを作る。内容のチェックが終わり次第パスワードの設定とその暗号化をして完成。
これに掛かる時間が早ければ早いほど作戦の選択肢が増えるから頑張ろう！』
『わかった。』『了解です！』
『それからリトルチェイサー達には超一味を無理のない範囲でマークしてほしい。
えーーと、そうだね・・・。
ベナトナシュは3人の内誰かいる可能性の高い屋台”超包子”の偵察、スピカは3人に関係の深いロボット工学研究会がある麻帆良大学工学部の研究開発棟を監視、アルビレオは麻帆良女子中等部校舎周辺の偵察に行くように。
密に連絡を取り合って超一味の誰かを必ず見つけ、事情許さば尾行で。
嫌な予感な雰囲気を感じたら退避、とにかく自身の安全を第一に。』
『了解だニャ。』『らじゃーニャ！』『りょーかいニャ！』
『銃の使用は厳禁だからもしもの時はこれを使って逃げるように。』
そう言うとカーゴスペースからフラッシュバンを取り出し、今の作戦の準備を中断して月光の所まで来た順に1つずつ配る。
リトルチェイサー達はフラッシュバンを受け取るとそれぞれの空いているカーゴスペースへと仕舞い、作業の続きに戻っていった。
『自分達の方で”荷物”ができ次第、超一味にアプローチするけど誰が何処にいるかはその時でないとわからないから臨機応変に行くけ

ど、”荷物”を渡すターゲットが決まってもリトルチェイサー達は指示あるまで持ち場を維持。
理想的なシチュエーションとしてはターゲットは超本人で周囲に人がいない事だけど状況に合わせて作戦を修正しようと思う。
それからメッセージを書き込んだ記憶装置は緩衝材をたっぷり詰めた箱に入れて、青葉がそれをターゲットの近くに投下して回収されればそれでミッションコンプリート。
回収されなかった時のプランBは研究所か寮のポストにでも入れてしまおうか。』

『作戦の概要はこんなところかな。』と月光が一息ついたところで、質問がないか聞くとアイラの手が上がる。

『メッセージを作り終わって青葉がそれを運んで行ったら私達は後は何をするの？』
『あぁ言い忘れてたね。自分達はC（コマンドポスト）Pとしてここで待機して皆に指示を出して行こうと思う。』
『共同戦術ネットワークに視聴覚共有システムっていう機能が何かの役に立てれない？』
『視聴覚共有・・・・・・へ～、指定した相手に共有申請を出し承諾された後、監視カメラの管理室みたいな感じにスキットの映像をそれぞれの視野に切り変わるんだね。』
『システムを起動したホスト側の視聴覚は基本的にクライアント側には共有されなかったり、他にも切り替え出来る要素がみたい。』
『ふむ・・・、動作確認も兼ねて早速このシステムを使ってみるか。　っと、その前に他に質問は？
・・・・・無いみたいだね。それじゃこれから皆に申請を出すよ。』

試しに起動したシステムが全員問題無く機能した事を確認し、これは無線連絡の練習の為にもターゲットを選択できるまでは使わないことにした。

あれこれ作業を終えて時間を見ると１９時になろうとしていた。

『もうこんな時間か。作戦名とか考えてなかったなぁ。』

『別に要らないんじゃないかニャ？私達に通じればいいＯＫニャんだし。』

『甘い！甘いですよアルビレオさん！こういうのは雰囲気が重要で、その次に他の計画や作戦と判別出来るようにするのも大切なんです！』

『ちょっと順番が違う気がするけど青葉の言う通りニャ！』

『何でもいいが、１９時開始ならもう時間はないニャ。』

『もう”オペレーション・メッセージ”で。決める時間が勿体無いので。』

『定時まで１０秒も無いのでこれは議論の余地無しですね！』

『ぐぬぬ。・・・ちょっと悔しいけど現時刻ヒトキュウマルマルをもって”オペレーション・メッセージ”を発動。とにかく各自行動開始！』

ＡＣＴ．１２　メッセージ

号令の後、月光・アイラ・青葉とコードサイン・リトルチェイサーズとで会話グループを分けると、早速それぞれ所定の位置を目指して拠点から出撃していった。それを見送り拠点に残った月光達はメッセージの作成等に取り掛かる。

メッセージは月光と青葉が本文の作成を担当し、アイラはパスワード設定と秘匿性の高い共同戦術ネットワーク宛の返信用の回線の構築を担当、本文の作成が終わり次第月光と青葉は輸送用ダンボールの工作に取り掛かる予定になった。

メッセージの概要は月光が考えたが、青葉の添削の末に

「我々は超鈴音の正体と計画の目的等を知っている。その計画に是非とも協力したく、そのために直接会い交渉する機会を設けてもらいたい。なお、我々にはいつでも超鈴音の計画を破綻させる用意がある。」

といった内容になったが、脅す形の最後の一文に気が進まないと反対気味の月光だったが、青葉の『相手側へ私達の脅威度をチラつかせた方が交渉の席に付かせやすいと思います！』との主張で取り入れることにした。

この概要を元に文章を肉付けして、２００字程度のそれらしいメッセージに作り上げる。

何度か読み返し問題無いと確認した所で実際にはそれほど時間を掛けずにメッセージは完成し、アイラの進捗状況を確認するとパスワード設定は既に完了し、返信用の回線も一部構築している最中だったが一つ問題が発生していた。

その問題というのは麻帆良学園周辺のネットワークには電子精霊群と呼ばれる監視網が存在し迂闊に回線を構築できない事だった。

これが各種通信網を常時監視していることは分かったが、誰も詳しい情報を持ち合わせておらず下手に分析しようとするのは危険だと判断したアイラは、先にこの監視網の外に海外サーバーを密かに経由

した返信用の回線を構築し始めていた。
電子精霊群の問題についてはメッセージに暗号化したアドレスのみを書き込んでそのアドレスを頼りにどうにか返信をしてもらう事になった。

『思ったより早く次の段階に取り掛かれそうかな。』
『一番面倒な部分をあちらさんに丸投げ状態ですけどね！』
『その辺りは向こうの方が詳しいだろうし、多少はね？』
『アイラさんも電子戦などこの手の事にお詳しいですが、我々全員魔法関係はからっきしですもんね！』
『あんまり胸を張って言える事じゃないでしょ・・・。』
『でも胸については今いるサポーターの誰より大きい自信があります！』
『何でそういう話になるんだ。兎にも角にも次の作業に取り掛かるよ。』

内心アルビレオの方が少し大きいのではという邪念を抱きつつも、青葉に適度な大きさのダンボールを持ってくるように指示を出す。

数分後に青葉が持ってきたのは折り畳んで積んであるダンボールの中で最も小さい物だったが、入れる記憶装置と比べるとずっと大きく緩衝材を多く詰め込めるには十分だった。
人間のような手が無い月光と青葉はお互いのワイヤーアームと月光の片脚を駆使し、ガムテープを貼り合わせダンボールを器用に組み立てると、アイラの暗号化やパスワード設定の作業も全て終わっているので記憶装置を梱包する工程に移る。
緩衝材は余っているダンボールの幾つかを解体し、クシャクシャに丸めた物を用意した。更にどのぐらい効果があるか分からないが、梱包するダンボール箱の中心を交差させるようにロープを張り巡らせ、その交差点に記憶装置を括り付けて宙ぶらり状態にさせた。
その状態の箱の中の空いたスペースいっぱいに紙の緩衝材を詰め

込んでいると、コールが掛かり”１４１．２１”と自動で登録されていた周波数が表示され、リトルチェイサーズ隊長を任せたコールサイン”リトルチェイサー・ワン”の通信に出る。

≪ＣＰ、ＣＰ、こちらＬＣ１（ベナトナシュ）。リトルチェイサーズは配置についたニャ。今の所ターゲットは１人も確認できていニャい。オーバー。≫

≪こちらＣＰ了解。ＬＣ１へ、”荷物”は約・・・５分後には発送可能である。引き続き監視を続けよ。あぁ、ところで３―Ａの生徒はどこかで確認されているか、オーバー。≫

≪今確認するニャ。・・・・・研究所と校舎周辺には見当たらニャいそうだが、屋台にはかなりの客がいるが３―Ａ生徒は四葉五月・椎名桜子・釘宮円・柿崎美砂・明石裕奈・佐々木まき絵の６人が見えるニャ。あと教員らしき大人も４人、魔法使いかどうかは不明ニャ。オーバー。≫

≪了解した。ターゲット、特に超が現れたら教員の反応に注意を配りつつ報告せよ。アウト。≫

『何、このやり取り？』と突っ込みを入れたそうなアイラをスルーしベナトナシュとの通信を終えると、青葉も梱包が完了し運搬するにあたっての問題点を報告してきた。

それは重量は問題ないが、箱上面に開けた穴にワイヤーアームを引っ掛けて運ぶには不安定であり強度も不安が残っているとの事だった。

更に密かに運搬するとなると高高度を飛ばなくてはならず、その高度のままでダンボール箱を投下するの中身的にもターゲットに対しても少し危険かも知れないと指摘された。

そこで急遽大きいビニール袋を広げ、それを何枚かテープで繋げてパラシュートを作ることにした。

これはこれで風に流されるなど別の問題が出てくるが、風を読んだり落下点を正確に割り出したりと対処は出来そうだったので無視し

た。
運搬時の問題はロープでダンボール箱を縛り、上面のロープの交差点にパラシュートを取り付けた上でそこをワイヤーアームで掴んで運搬することで一通り解決できた。
なお、パラシュートはその大きさから”荷物”をほとんど包む状態での運搬となる。
ビニール袋で作られたパラシュートは半透明で、透けて見えた段ボール箱の上面に”ＥＹＥ　ＨＡＶＥ　ＹＯＵ”と書かれてあったが、青葉がロープで箱を縛った後に書いたものだった。
それに気付いた月光は『これはどう解釈されるだろうかね。』と苦笑いしながら”荷物”の最終チェックを済ませる。
先の通信で５分後と伝えたが実際には十数分程掛かり、ベナトナシュには月光から詫びを入れ、これから監視ポイント３箇所全ての中間点に青葉を向かわせる事を伝えて作戦は次のステップへと進む。
ついでにターゲットの有無を確認したがまだどこにも誰も現れておらず、教員達は食事を終えると屋台を離れていったという報告が上がってきた。

『荷物の準備はできたから早速青葉にはこれを持ってさっき決めたポイントまで行ってもらい、会話グループのチャンネルをリトルチェイサーズに切り替えて指示があるまで待機してもらうけど何か質問は？』
『特にありません！』
『よし、それではくれぐれも見つからないよう気をつけて行ってらっしゃい！』
『はい！青葉、出撃しまーす！』

無駄に揺れないようワイヤーアームを巻き上げダンボール箱をＭＡＶの降着脚と接触させて、安定した飛行ができることを確認してから月光が開けたシャッターから外へと飛び立っていった。

アイラはと言うと返信用の回線の最終チェックを行なっている最中で、これも問題無いようでほぼ完成というところであった。

『これで完成。手順を踏めば共同戦術ネットワークのメールボックスに返信が届く。』

『ご苦労様、悪いね任せっきりにして。』

『ううん大丈夫。それに皆の、月光の役に立てれた事が嬉しいので・・・。』

『そっかそっか。まぁその、何かな・・・・・ありがとうアイラ。アイラがいてくれて本当に良かったよ。』

『ど、どういたしまして。』

ちょっとの無言の後、ベナトナシュからコールに２人して驚き月光が慌ててそのコールに出た。

≪ＣＰ、こちらＬＣ１。ＬＣ２（スピカ）より研究所から絡繰茶々丸が出てきたとのことニャ。こっちで進行方向を確認したが、屋台と校舎どちらでもない方角へと向っているようニャ。取り敢えずデータを送りＣＰの指示を仰ぐニャ。オーバー≫

≪あーこちらＣＰ、ＬＣ１データを確認した。恐らく茶々丸はエヴァンジェリンの別荘に向かうものと思われる。その場合、メンテナンスか何かをした帰りとも考える。他のターゲットが出てくる可能性があるため、ＬＣ２には引き続き研究所を監視するよう伝えるように。アウト。≫

その後は青葉から待機位置に着いた事の報告と、アイラと無線に関する雑談や視聴覚共有システムをしている内に時間は２１時前となっていた。定期的に報告を受けていたが内容の内訳は屋台の客の出入りが大半であった。しかしここでようやく待ち望んだ報告が上

がってきた。

≪ＣＰ、こちらＬＣ１！　ＬＣ２より報告！超鈴音が研究所より出てきたとのことニャ！オーバー！≫

≪ＣＬ１、こちらＣＰ了解した！これより各員に指示を出す。通信チャンネルを共通に変更せよ。アウト！≫

無線を一旦切りサポーター全員が聞ける無線チャンネルに切り替えた後、再度通信を掛ける。

≪こちらＣＰ、各員聞こえるか？オーバー。≫

≪こちらＬＣ１、感度良好。≫ ≪ＬＣ２聞こえるニャ！≫ ≪おっけーニャ。あ、こちらはＬＣ３ニャ。≫

≪こちら青葉、感度良好です！オーバー！≫ 『私もよく聞こえる。』

≪それではまず超の進行方向を確認する。ＬＣ２、データを送ってくれ。オーバー。≫

≪はいニャ！ここがこうで、あっちがそっちで、うーーん。・・・できたニャ！≫

スピカが言い終わると同時に月光へ地図を元にした進行方向の情報が送られてきて、方角は大体ではあるが最寄りの駅に向かっている様に見えた。この時間帯には女子寮のある隣駅方面に向けての電車が何本かありそれに乗る可能性が出てきた。

学園の地図を参考に隣駅から女子寮までの予測ルートをすぐさまアイラが作り、その最短ルートの予測範囲内に気になる場所があった。

『この通り・・・。桜通りって確かネギの対エヴァンジェリン編で出てたよね？』

『うん。この時間帯なら人通りが殆ど無い事もあってエヴァンジェリ

ンが吸血鬼騒ぎを起こしていた場所。』
『ふむ、だったら・・・。』
≪あー、ＬＣ２に指示を出す。現在の監視ポイントを放棄して超の尾行に移れ。途中電車に乗る可能性があり。注意して尾行せよ。次にＬＣ３も監視ポイントを放棄し先に桜通りへ向かえ。オーバー。≫
≪ＬＣ２了解ニャ！≫≪ＬＣ３了解ですニャ。≫
≪ＬＣ１は現地点で待機を継続。教員が来た場合その動向に注意せよ。アウト。≫
≪ＣＰ！こちら青葉です！私はどうすればいいでしょうか。オーバー。≫
≪青葉は上空待機が可能であれば隣駅から女子寮までの予測ルート付近上空へ向かわれたし。オーバー。≫
≪青葉、了解しました！≫

一斉に指示を出したが現状は月光が想定したシチュエーションに近づき、月光を初め全員のテンションはどんどん上がっていた。
程なくして”荷物”を渡すターゲットに指定され作戦は次の段階へと進む。
超は予測通り隣駅方面行きの電車に乗り込み、その後を追ってスピカも電車の屋根に乗る。
約１０分後、寮が何棟かある最寄り駅に着いてしばらくするとやはり桜通りを通った先にある寮に歩いており、予測ルート範囲もより狭まって来たため、青葉は桜通り上空で待機させることにした。
アルビレオは超とスピカが乗ったのより一本前の電車に乗り先に桜通りへ到着して道から外れた茂みを確保していた。
この時全員が忘れかけていたところでアイラが会話グループの結合と視聴覚共有システムの起動について思い出し、これらを済ませた月光は各自の視野を見つつ指示出しに専念し始めた。

桜通りでは若干満開の時期が過ぎて、散った花びらが敷き詰められ

ていたが青葉の上空からの視点でも、まだまだ一面桜色の景色だった。
通りの端から寮までは距離があり道幅も十分で風も強くなく”荷物”の投下するにはうってつけであった。
そしてターゲットである超はもうすぐこの通りに入るので、彼女を尾行していたスピカもアルビレオとは道を挟んで反対側の茂みに入り超を左右から挟み追跡をしていた。

『荷物の落下地点は私の方で常に算出して青葉に送るから参考にして。』
『恐縮です！これは捗りますねぇ！』
『ベナト君の方はどうなってるニャ？』
『入れ代わり立ち代わりで客が来ているが、特に気になるような奴は見えないニャ。』
『ターゲットは既に桜通りに進入してるけど、各自の周囲に人がいない事を確認出来たら”荷物”を投下させるよ。』

尾行しているリトルチェイサーの２人はそれぞれ周辺の簡易スキャンを済ませ人がいない事を確認し、青葉も上空から見える範囲でチェックを済ませ、超以外に人間の生体反応等は確認されなかったので作戦は最終ステップに入る。

『こちらはいつでも投下できます！』
『あの緩やかな曲がり道の先に投下しよう。尾行組の２人は超から少し距離を取って様子が見れる場所を確保するように。』
『投下するなら今。しばらく風が吹かないようなので。』
『よし！荷物投下！』
『了解です！うまく回収されてくださいよ～。』

高度５０ｍ程でワイヤーアームに吊るされていた”荷物”は、切り離された数秒後にはパラシュートが開き、緩やかに目標地点に向って

落ちていく。
”荷物”はほぼ通りのど真ん中に落下すると、その上に先程までのパラシュートが覆いかぶさり、傍から見ると明らかに不審物だった。
しかしこれで進行ルート上の道に置かれた”荷物”が超の目に留まるのは間違いなく、青葉は見つからないように直接視線の通らない遮蔽物へと移動する。

超はパラシュートが開いてから少し経って”荷物”に気付いたらしく緩やかな曲道を小走りでやってくると、パラシュートを被った”荷物”を少し離れた所からまじまじと観察し始めた。かと思うと周辺や上空などを見回して警戒を怠らずに荷物の直ぐ側まで近づくとしゃがむ。
覆いかぶさっているパラシュートを折り畳み、ロープに挟んで片付けると青葉も掴んでいた上面のロープの交差部を持ってそのまま寮の方角へ何事もなかったように歩き始めた。

『・・・作戦は成功したの？』
『いや、最後まで気は抜けない。青葉！超が自分の部屋まで荷物を持って帰ったかもう少し追跡を！』
『了解です！でも、あの寮は外からじゃ廊下は見え無さそうですね。』
『そうか・・・。それなら尾行を成し遂げたスピカを連れて行って、何としても帰宅を見届けて。』
『私かニャ！』

もう終わった気でいたスピカは月光に指名され動揺していたが、すぐに青葉と連携を取り始め桜の木の上でピックアップされると超より先に寮に潜入するために急行していった。アルビレオとベナトナシュには屋台監視ポイントで合流し陸路で慎重に拠点まで帰投するように指示する。
超の入った第２中等部女子寮は３―Ａクラスメイトのほぼ全員と

ネギが入居しており、寮の中心には天井は塞がれているが廊下と各部屋のドアが面した吹き抜けとなっていて屋上に仔月光なら入れるダクトがあり、そこから寮の吹き抜け全体を見渡すことができていた。
スピカが配置についた時にエレベーターで上がってきた超はしっかりと”荷物”を持っており、迷わず６２２号室の前まで来るとドアチャイムを鳴らす。スピカはここで何か会話があると考え月光から指示が出る前に、仔月光に搭載されている指向性集音マイクを起動して超に向けさせた。

『指向性マイクをつけたけど聞こえるニャ？』
『いや、何も聞こえないね。』
『ちょっと待ってて。・・・システムを少し弄ったからこれで聞こえるはず。』

アイラがそう言うとドアの鍵を開ける音が聞こえてきた。

『おー、聞こえる聞こえる。スピカ、アイラありがと。お陰で超の自室と同居人がわかるかも。』
「ハカセー、戻たヨ！」
「あー超さんお帰りなさーい。今開けますねー。」
「いやー面白いもの拾たヨ。」
「その箱ですか？”ＥＹＥ　ＨＡＶＥ　ＹＯＵ”？　何でしょうねー？」
「まぁ、詳しくはこれから調べるネ！」

二人の会話はドアが締まると途絶え、最後に聞こえたのは鍵が掛けられる音だった。
６２２号室が超の部屋で、同居人が葉加瀬であることが分かりこの作戦はこれで終了する事になる。

『オペレーション”メッセージ”の作戦目標は十分達成できたね。ベナトナシュとアルビレオはもう少ししたら拠点に着くけど、青葉とス

ピカは空を飛んで一直線に帰ってきて。』
『後は超の返信待ちになるね。』
『の～んびりと待とうか。』
『たいちょ～、やっぱり私あのグレネードランチャー使いたいニャ！』
『今その話をするのか・・・。拠点に帰ってからでいいでしょ。』
『そうですよスピカさん。帰ったら私も装備強化してもらうのでそれまで我慢です！』
『待て！青葉のは聞いてないぞ!?　き、貴様何をする気だ！』
『いえいえ、大した事じゃありませんよ。大した事じゃ・・・。』

賑やかなやり取りをしているとベナトナシュとアルビレオが先に帰還し、事前に渡していたフラッシュバンは返却された。
それから時間をあまりおかずに青葉とスピカも帰還、これで今回の作戦オペレーション”メッセージ”が成功に終わったこと宣言するため全員に注目するよう指示を出す。

『現時間をもってオペレーション”メッセージ”は問題無く成功した。皆ご苦労様！』

二次会だー、と叫んだりする子もいれば装備のメンテナンスを始める子もおり、少し混沌とした雰囲気の中で月光はアイラに後を任せると休眠モードへと移行するのだった。

ＡＣＴ．１３　作戦名は大切なので

――４月１８日　朝――

オペレーション”メッセージ”から一夜あけたこの日。

当面は超からの返信次第で次の作戦行動を決める予定のため、返信待ちの現在は何をするということもなく、朝からこれまでに周辺の建物から集めた幾つもの物資を地下室へと運び込んでいた。

全ての物資の移動が終わるとＭＧＬ１４０グレネードランチャーをコンテナから取り出すスピカとアルビレオの姿があった。２人は腕一本でちゃんとした照準が出来るかを試しているようで、スピカが実際に構えると姿勢だけは問題ないがこれに6発のグレネード弾を装填しそれを発射するとなるとかなり不安定な射撃姿勢だった。

流石にＴＲＩＰＯＤ１機では難があったようで、次はＭＧＲで見せた２機で合体し人型形態なり上半身を担当するアルビレオがＭＧＬ１４０を構えてみる。その射撃姿勢は中々様になり安定もしているようだったが、そもそもＴＲＩＰＯＤは隠密行動や偵察を基本として戦闘全般が不向きで、ローリングの邪魔になるＭＧＬ１４０を持つこと自体ＴＲＩＰＯＤの特徴の一つである機動性を潰す事になっていると月光は感じていた。

『うーん、グレランは諦めた方がいいんじゃないかなぁ。ぎりぎりアサルトライフルはセミオートで使えるだろうけれど、持ち運びはハンドガンとかが無難だと思う。』

『やっぱりたいちょーもそう思うニャ？クリスベクターとかＭＰ７があればニャ～。』

『私は槍みたいな近接武器が欲しいかニャー。ナイフとワイヤーアームでそれっぽくは出来るけど限界があるニャ。』

『俺はこのＰ２０００とナイフがあれば十分ニャ。それに機体にはスタンガンも付いてるしニャ。』

『私のＭＡＶだと積載重量と出力は問題無いですが、本体をちょおっと改造しないと武装化は難しそうですね～。』

ちょっとしたアドバイスを切っ掛けにサポーター各々が武装や機体の改修点が次々と挙がり、戦力増強をするには色々足りない物があることに悩まされながらもアイラにメモをとっておくように指示を出す。

しかしアイラは「こんな事もあろうかと」といった自慢気な顔で各自の要求をまとめたメモを見せつけてきた。

気を利かせてくれたアイラを褒めつつ月光自身の改修点も書き加えるてもらうと、更に具体的な要望をサポーター達から聞き取りそれらもメモに加えていった。

その後もＭＧＲに出てきたラプターやエトランゼだの２０．３ｃｍ砲追加だのガチタン化だの千手仔月光だのフルアーマートライポッドだのメンタルモデル実装だの、全員好き勝手に言っている要望を聞いていると待ちに待ったメールの着信音が鳴る。

アイラによると使い捨てメールアドレスからの送信だったが、ウイルス等の確認を済ませてメールを開き確認した件名と本文の内容から超一味からの返信で間違いなかった。

返信は要約すると交渉に乗るとの事だった。

会合場所は座標で示され、そこは学園都市の地下に張り巡らされた下水道の一角で地上には丁度龍宮神社がある辺りとなっていた。

日時は明日１９日の２３時と指定され、元々超一味にスケジュールを合わせるつもりだったため修学旅行前に交渉が出来るので月光にとっても都合が良かった。

しかし会合場所は指定されたものの、肝心の地下下水道への入り口と龍宮神社付近の区画への道順が分からず彼女達と会う前に下水道のマッピングを自分達で行う必要が出てきた。

『と、言うわけでまずは地下下水道とやらに行ける出入り口を探そうと思う。』

『どこか当てはあるの？』

『どこかに地下に入るための施設があるかもしれないけど、マンホー

ルとかを当たってみた方がいいかな？』
『それよりもここの発電室の排水口から降りていったほうが早いと思いますよ？』
『あぁ、そう言えばあったね。ならそこから下りてみるとしようか。』
『そうと決まれば早速行動開始ニャ！』
『後に続くニャ～！』

スピカとアルビレオの２人はこれからの行動が決まると、すぐさま発電室の方へ転がっていった。
『鉄格子を外すには色々必要ですよね。』と苦笑いしながら工具箱を吊るした青葉も２人の後を追いかけた。
残された月光・アイラとベナトナシュは資材の中から脚立やロープなどを使えそうな物をまとめ、それらの一緒にベナトナシュも背中に乗せ発電室へ向かった。

荷物を載せてやって来た発電室では先に来ていたスピカとアルビレオそして青葉が鉄格子に集まっていた。
鉄格子は周りより一段低くなった床に備え付けられ、４隅４辺をボルトで固定されていたようだったが青葉から工具を受け取ったスピカ達によってそのほとんどが外されていた。
荷物を落とさないよう慎重に水車の脇を通って彼女達の所に着くと、丁度外された鉄格子が青葉によって吊り上げられて排水口から部屋の隅へと運ばれた。
『縦横１ｍの正方形ですが月光さんには小さい穴ですね。』
『まぁそんな気はしてたよ。それに底までの深さがかなりありそうだから、どのみちここから自分は下りれないだろうし。』

青葉の報告に持って来た荷物をリトルチェイサー達に下ろしてもらいながら答えると鉄格子が外されたばかりの排水口を跨いで覗き込む。

発電室が明るいこともあり肉眼では真っ暗で滝のような音のする排水口はかなりの深さがあるようにも感じられたが、センサーや観測機器を使ったところ２０ｍそこらで月光が思うほどの深さでは無かった。

この排水口から地下下水道には一応繋がっているようだったが青葉の言っていた通り、どうやっても月光がこの排水口を下りれそうになかった。そのため今回、会合場所である龍宮神社地下へ続くルートとＩＲＶＩＮＧが下水道へ入れる場所も探しつつ、マッピングする事を作戦目標とした。

地下下水道のマッピングはリトルチェイサー達が手分けして進め、青葉も排水口から降下して下水道に入る予定だったが、本人の提案でＧＰＳ役として龍宮神社の方角やマッピング地点の地上部分の観測をするため学園の上空へと向かい、月光とアイラは地下と上空から送られてくる情報を照らし合わせて、下水道図と地上図の位置関係などの整合性を取るという配役になった。

役割が決まり各自動き出そうとした時、思い出したようにアイラが一つの質問を投げかける。

『ところで、作戦名はどうするの？』

『地下下水道降下作戦だね。』

『オペレーション”Ｕｎｄｅｒ　Ｈａｖｅｎ”なんてどうでしょう！』

『マッピング作戦でいいんじゃニャいか？』

『スピカの大冒険　～図書館島に行ってみたい！編～　ニャ！』

『私は何でもいいかニャ～。』

『…今回はオペレーション”マッピング”に決定。作戦名で時間が掛けるわけには行かないので。』

アイラが有無を言わさない言い様に加え、もっともな理由があるため各々不満はあったようだが異論は出ずオペレーション”マッピン

グ”は実行に移された。

排水口に伸ばした脚立を渡し流れ落ちる水にかからない所からロープを垂らしてリトルチェイサー達は地下下水道へと下りる。リトルチェイサー達から送られてくる映像を見ると原作で見た部分と大きく変わらない構造をしているようで、違いがあるとしたら連絡橋がない程度だった。

水路の水深はそこそこあるらしく排水口はその真上に位置している為、そのまま下りる事はできず水路両脇の点検用通路に飛び移った。通路には照明が一定間隔で設置されているが光量が少ないこともあり非常に暗い。しかしリトルチェイサー達の目となっているFLIR（前方監視赤外線装置）のような機器には問題ではなく、暗視映像を送信してもらいつつ探索が始まった。

――同日　昼――

月光を介しての青葉のナビゲートの下、散開したリトルチェイサー達は目的地の龍宮神社と主要施設に向けてマッピングを進めること半日。

袋小路や滝になっている所に行き当たる等したが日が暮れ始めた頃になり、ようやく龍宮神社の地下にあたる水路に到達した。

原作において高畑とちびせつなが超一味に囲まれ、明日菜ら”高畑先生救援チーム”がロボット軍団と交戦した地点と一致する場所を見つけ、上空の青葉からも指定座標と一致するとの報告が入る。

目的地とルートを割り出し主目標を達成したリトルチェイサー達は拠点に帰ろうとしていた時、通路が狭いと感じていた月光が、新たに通路幅や天井までの高さを測るよう3人に指示を出した。

『隊長、計測が完了したニャ。』

『ん、ありがとう。…どこもかしこも狭いなぁ。これじゃあ会合地点までは水中を進むしかないか。』
『！　皆、ここの水路の水深を測って。』

次に月光の言わんとする事を感じ取ったアイラが、移動を再開しようとしていたリトルチェイサー達に指示を飛ばす。３人がすぐさま計測を始めた様子に月光は、いい子達に恵まれたなぁ等と思いながら早速挙がってきた計測結果を特にアイラを褒めつつ、届いた水深とついでに計測された水流の速さに目を通す。水路の底は平らで、水深も１．５０ｍ程度で水流も足を取られる程では無かった。
更に他の地点でも計測してもらうと、大体同じ結果となっていて当日の移動には水路を歩いて移動することになりそうだった。

ルートが判明しているためリトルチェイサー達が拠点に戻ってくるのにさほど時間は掛からなかったが、会合場所までのマッピングでは地下下水道への出入り口を発見出来ずじまいだった。
そこで作戦第二段階として活動拠点周辺に広がる地下下水道を中心に、リトルチェイサー達が手分けして出入り口の捜索に取り掛かった。
しかしこの一帯の下水道は各方面に向けての分岐点であったようで、思った以上に広く複雑な構造で探索は難航していた。
下水道に降りるには最終手段として考えていた排水口の拡張しかないのでは、と月光とアイラが相談をしていると拠点の北側で探索をしていたアルビレオから、地上へ向かっているらしきトンネルを見つけたという報告が入る。
アルビレオから送られる映像を見ると狭かった通路から一転、それなりの広さのある空間に「休憩室」と書かれた扉と軽トラックぐらいなら難無く通れそうなトンネルがあった。
そのトンネルを調べると３回折返して上って行った先にシャッターがあった。上空に待機している青葉にアルビレオの現在地に向かわせると、商業区と倉庫群の境界付近に「立ち入り禁止」と張り紙

のある車庫のような建物があった。
２人がシャッターを叩いてみるなどしてこの場所から地下下水道へ入れるのを確認し、シャッターには鍵穴があり少し錆び付いていたが青葉のピッキングと内側からのアルビレオの補助で難無く開けることが出来た。

『結構このシャッターも錆び付いているのでしょうか？』
『んー、頻繁に使うとしたら詳しく点検した方が良さそうニャね。』
『青葉ー、アルビー。ベナトも連れてきたけど何か手伝うことはないかニャー？』
『厳密には俺が先導してきたんだがニャ。』
『それじゃあベナト君とスピカちゃんはすぐそこの休憩所って部屋を調べておいてもらえるかニャ？　私もまだ中は見てないから気を付けてニャ。』
『わかったニャ』『了解ニャ！』

４人がかりでこの下水道入口とトンネルに残された資料や痕跡を調査して分かった事は、下水道の保守点検用に作られた施設で今は電気が通っておらず数ヶ月以上は人の出入りがないようだった。
下水道側の広い空間は作業場として機材やゴムボートを用意する場所だったようで、小さな係留柱と作業場の隅にかなり劣化したゴムボートとエンジンが放置されていた。
また、地上の下水道入口の前を通る荒れた細い車道は、商業区と倉庫群の境界で施錠されたゲートで封鎖され簡単に通行できないようになっていた。

『青葉の報告だと周りに人気はないみたい。』
『多分地下へは問題無く下りれるだろうけど一応行ってみようか。ここからの道順も確認してみたいし。』
『では、上から見ても発見されづらいルートをそちらに送りますね！』

青葉から下水道入口までのルートを受け取ると月光は活動拠点を後にした。

ＡＣＴ．１４　クラフティング？

――４月１９日　朝――

『それじゃ今日の予定を伝えるよ。』

昨夜の警備当直であるスピカに起こされた月光が、全員の起床を確認すると色々と書き込まれた部活動スケジュールを示す。

『とは言っても”トンネル（下水道入口）”から会合場所までの最短ルートは決定済みだから、今日やる事っていうのは特にないんだよね。』

昨日のトンネルとその周辺の調査は月光の合流後にも続けられめぼしい物は残されておらず、本来なら会合の指定日時までは地下下水道への出入り口の捜索等に費やすつもりであった。

『だから今日は予定無し、みんな自由行動で！それじゃ解散!!』

『休みか。武器の手入れでもするか。』

『あっベナト君、私も一緒にいいニャ？』

『外行くニャアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

『青葉、空中散歩してきます！』

「自由行動」の一言でサポーター達が思い思いに休日を過ごそうとする中、特に喜んでいる青葉とスピカは我先にとエレベーターへ乗り込もうと飛んで（転がって）いった。

２人の予想以上の喜び具合に呆気に取られる月光だったが、アイラの呼掛けで注意事項があったことを思い出す。

『分かってるとは思うけど人目に付かないように十分気を付けるように。』

『勿論です！』『分かってるニャ！』

返事をするとエレベーターで行くよりも飛んで行った方が早いという話になり、スピカが青葉にぶら下がるとそのままエレベーターシャフトを上昇していった。

『2人は会話グループを別にしておくね、多分うるさいと思うので。』
『ん、ありがとう。丁度そうしようと思ってたんだよね。』

隔離直後、2人から苦情があったが「うるさいから。」という説明で済ませて通信を切り、殺風景な地下室を見渡す。

『さて、時間もたっぷりあるし何しようかな。』
『わざわざ活動して過ごすより、明日の朝まで休眠モードで待っていてもいいと思うのだけど・・・』
『確かにそれでもいいけど、やっぱり何かしてたいんだよね。』
『私にはよく分からない。』
『そっかぁ…。』
（夜間警備の当直表だったかな。　あれを作るのと同じ気分だと思うけれどなぁ。）

月光の考えはいまいち伝わらず、アイラは何か考え込んでいるようで会話が途切れてしまう。
ベナトナシュとアルビレオは何か話しているようで気になったが、2人の声が小さく会話を聞き取れずこちらの声も聞こえていないようで諦めた。
（サポーターも人間じゃないけれど人格だとか個性がある訳だし、気になるけど無理に聞きにいくこともないか。）
後で知るのだがこの時2人は「私達の話し声も邪魔になるのでは」と考え、音量調節や距離による声の聞こえ方の設定と自分達の名が呼ばれた時にその相手の声が聞こえるようにすると言う機能を考えて、それらを試行錯誤している最中であった。

そうとは知らない月光は会話が続かなかった気不味さに、ふと目に入ったｍｏｄ．ＧＯＤのコンテナを覗く。
コンテナの中にはスピカが弄り回していたＭＧＬ１４０と、数発のグレネード弾が弾薬箱の上に放置され、その隣には弾無しのＭ２が装着されたＩＲＶＩＮＧ用ＲＷＳがあった。
それらを見た月光は以前に計画していた装備換装に役立てれないかと思いＲＷＳを観察し始める。
アイラによると横から見て「の形と例えれるＩＲＶＩＮＧのボディパーツと武装を接続する部品はマウントプラットフォームという物と判明。
これを２つ連結させた物を基台とし通常、側面にスモークディスチャージャー・ＴＯＷランチャー・自爆装置その他を取り付け、上面にはＲＷＳやＥＣＭアレイユニット等を取り付け可能で規格さえ合えば様々な物を装備出来るようだった。
ＲＷＳ自体はこちらも規格が合う物であれば少しの改造と調整でＭ２以外の銃火器が使用できる汎用性を備え、架台に1箇所のハードポイントが設けられ、初期装備の今は４連装スモークディスチャージャーが装着されている。
Ｍ２が取り付けられているＲＷＳの銃架真下には照準器とレーザー測距儀があり、照準がＭ２の指向する方向と一致するように付いていた。
Ｍ２とＲＷＳがどのように連動しているかも説明を受け改造計画を具体的に練り、それが可能だとわかると直ぐに行動に移す。

作業はクレーンが設置されている地上部で行うため、工具箱、大小様々な鉄材と鉄屑、ダクトテープや針金といった材料をＭＧＬ１４０等が入っているコンテナへ入れていると、ベナトナシュ・アルビレオが「こっちでも使いたいものがある」ということでナイフやその他幾つかを材料を持って行った。

地上に上がると邪魔になりにくそうな場所に向けてエレベーターから引き摺り出そうとした所で、金属が擦れる時に出る嫌な音が響き咄嗟に手を止める。

『エ、エラー…。これは聞いてはいけない駄目な音なので…。』

『機械の身体になってもこの音は駄目かぁ。』

人間にとってこの手の音は本能的に危機感を持つ音、と聞いたことのあった月光は、自分とサポーターに人間の感性がそのままあるらしい事を嬉しく思っていた。その一方でアイラは涙目になりつつ顔面蒼白といった感じでフリーズしていた。

一応底面がどんな状態になっているのか確認のため、天井クレーンでコンテナの縁の内側にあったフタ固定用の窪みを利用して片側を持ち上げる。

案の定、コンテナの塗装は剥がれ少し表面が削られた状態となっていたが、新しい発見もあった。コンテナ底面の角に小さな蓋のような物があり、それは四隅と長辺の丁度真ん中に付いていた。ワイヤーアームで押してみてもびくともしなかったが、何かギミックがあると月光は踏んでいた。

『このコンテナはかなりハイテクなので、端末にアクセスしたら何か分かるかも。』

『普通の人だったらどうやってテンキーだけの端末でギミックを操作するんだろう?』

『電子錠の金庫なら同時押しの組み合わせ等で色んな機能を使えるようにしてたみたい。　あ、ギミックってこれかも。』

アイラに端末へアクセスを任せていると、それらしきものをシステム内で見つけたようで早速実行させる。

しかし、そのギミックは只のコンテナ開放用のコマンドで、上面の蓋は既に開き切っている為モーターが過負荷で異常な音を立てる。慌てて止めたがモーターは取り敢えず損傷せずに済んだ

『あービックリした。もうちょっと慎重に頼むよ…。』
『ごめんなさい。　で、でも今度は間違いないので！』

次にアイラが見つけたコマンドはどうやら正解のようで、移動用キャスターを展開させる一連のコマンドだった。実行させてみると底面の蓋が開き、ガッチリとした双輪のキャスターが計６ヶ所から出てきたので、クレーンからコンテナを降りしてみる。

キャスターを展開したコンテナはその大きさにも関わらず、人一人で簡単に移動される程度までになった。他のコマンドにはキャスターへのブレーキの掛け具合を０～１０段階で調節出来るという機能があり、今は全くブレーキが掛けられていない「０」にされていた。

移動が格段になったところでＲＷＳの改造に取り掛かれるよう、コンテナを壁に寄せてキャスターを収納させると材料等を取り出し、生体維持パックを座布団のようにして座り両足を使えるようにした。足回りの広い可動範囲のお陰で出来る芸当である。

全ての準備が整い、早速ＲＷＳの改造に取り掛かる。
まずはＭ２をＲＷＳから取り外すことから始めた。。
Ｍ２は第１次世界対戦後にアメリカで制式採用後、世界で広く使用されながら様々な改修を受け、重機関銃の定番として現代でも第一線で運用されている名銃である。
それを遠隔操作、ましてや無人兵器が運用するのでそれなりの改修がなされていた。
しかしそこはさすが名銃。基本構造は大きく変わっていないようで、ＩＲＶＩＮＧに記憶されている知識を管理するアイラの指示を受けながら無事ＲＷＳからＭ２を分離することに成功する。

次にＭＧＬ１４０の取り付け。
これは南アフリカで開発された装弾数６発の回転式弾倉を備えるダネルＭＧＬの改良型となる。
ＲＷＳへの取り付け方法はストックを伸ばし、それをＭ２が装着されていた所に置く。落ちないよう片足でＭＧＬ１４０を支えながら、ストック両脇の架台との隙間を色々な材料で埋めるとＲＷＳとＭＧＬ１４０の可動部に干渉しないようにワイヤーと針金で固定させる。
再装填は回転式弾倉とスイングアウト機構の特性から特に架台との干渉はなく、試しにＲＷＳにワイヤーアームで通電・操作してみると旋回と俯仰共に正常に動作することも確認できた。ＲＷＳとＭＧＬ１４０のトリガーとの連動はＭ２装着時に使われていた機構をそのまま応用することで解決する。

ここまで順調に改造を進めてきたが、１つ重大な問題が残されていた。
それは精度である。
今になって見つかった”ＩＲＶＩＮＧ用ＲＷＳ整備マニュアル”よると本来は曲射を想定しておらず、当然山なりの弾道となるグレネードランチャーの照準は付けようがなかった。しかしそこはアイラによってＭＧＬ１４０と４０ｍｍグレネード弾の諸元を元に新たな照準データを作り出すことで照準の問題はクリアする。
だが根本的な問題として照準と銃口のズレがある可能性が高かった。
多少の知識があるだけの素人が、有り合わせの材料と大体の感覚で改造をした装備なので多少の誤差は出る事は承知の上だったが、ここまで出来上がった物を見るとＲＷＳとＭＧＬ１４０の中心線がパッと見でズレていた。
目で見て分かる程のズレは流石に見逃せなかった月光は修正に取り掛かる。
取り付け部の固定を少し緩ませて物を挟んだりズラす等して上下

左右の微調整を繰り返した末、丁度同軸となった所で発砲時に動かないようしっかりと固定し直す。
作業が終わり照準器と銃口が同軸であるのを確かめる。銃口を掴んで動かしてみても動かず取り付け部の固定は緩まず、もう一度中心線を確かめてみるとズレは発生していなかった。
最後に外見の悪さを誤魔化す為、一帆布<<キャンバス>>で取り付け部を覆いダクトテープで固定すると一息つく。

『よし、これで取り敢えずは完成かな。』
『プラットフォームは特に触ることはないので、このままで大丈夫。お疲れ様。』
『早速換装したいと思うんだけど、自分達じゃ無理だよね？』
『無理。　クレーンを使ったとしても着脱にはどうしても補助が必要なので。』
『できればスピカも含めて３人に来てもらった方が良さそうだけど、仕方ないか。』

スピカは諦めて地下にいるベナトナシュ・アルビレオに声を掛けるが反応はなく、視界の隅に縮小されていたスキットの映像はいつの間にか〝Ｓｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙ〟と表示されていた。
無線機能は外出している青葉とスピカ、そして月光達だけがオンにしているので地下の状況がわからず不安になるが、アイラは
『スキット関係の個人設定で弄っていたようなので、それが原因となり不具合が発生しているのでは。』
と推測し、取り敢えず２人の様子を見る為にエレベーターへ乗り込み地下へと向かう。

ＡＣＴ．１５　それぞれの得物

スキッドシステムと無線に反応のないベナトナシュ・アルビレオの様子を確認するべく、エレベーターで地下へ向かう月光とアイラ。

共同戦術ネットワークを始め各システム上には２人共オンラインで、それらの情報で分かる事は何か活動中という事ぐらいである。

今ある共同戦術ネットワーク以外の通信手段は各自で回線を切断する事ができ、今回のような事態に備えて強制的に回線を開く手段を用意しようと相談している内にエレベーターは地下に到着した。

件の２人はというと、貯め込んである資材を使い何かを作っているようだったが、月光らが降りてきたことに気付いたようで手を止める。

こちらに話しかけてきていたようだが先のアイラの推察通りらしく、スキッドシステムに不具合があるようで音声を正常に出力できていないようだった。

『今２人の声が聞こえないから、もし自分の声が聞こえたら頷いてくれる？』

『――――――――。』

スキッドシステムの状態確認を兼ねて質問するも、月光達にまだ何か話しているアルビレオから反応も無いことから自分達の声も届いていないと判断すると、音声の出力先を外部スピーカーへ切り替える。

「スキッドの方は全然声が聞こえないから、こっち（外部スピーカー）にしてもらえる？」

「あれぇ？成功したと思ったんだけどニャ～。」

「だから一言伝えておいたほうがいいと言ったろ。　隊長、心配を掛けてすまないニャ。」

ベナトナシュが謝罪するとアルビレオもそれに続く。ＴＲＩＰＯＤで頭を下げるとなると3本全ての腕を地につけ、機体をうつ伏せにする形となる。

「確かに一言欲しかったかな。　まぁ、あまり気にしなくてもいいけど何かあったの？」

「それニャんだけど…。」

現在のスキッドシステムは共同戦術ネットワーク大きく依存しており、各種交信はフルオープンであり、状況が違う者同士の会話が混線してしまう可能性が高い。一応その対策としてグループをスキッドシステム上に作り、声の届く範囲を制限しつつグループ間は無線通信のように交信するという手段をとっていた。

いつも淡々とそれらを設定するアイラはともかく、この方法は慣れてない者からすると設定項目等々が多く若干面倒であった。そこでアルビレオは従来の機能に独自の混線防止用プログラムを組み込み簡略化を図ろうとしていたのだった。

その仕様は距離や遮蔽物によって音量が自動調節され、特定の相手に向けた声は音量調節無しにこれまで通り届くという物。人間に置き換えると、要は肉声の会話とトランシーバーの交信を合わせた機能になる。

『確かにこの機能は良いかもね。　アイラ、これをスキットシステムのオプションとして実装出来そう？』

『大丈夫。致命的なエラーの修正だけで時間も掛からないと思うので。』

『よし、じゃあそっちは頼んだよ。　その間にこっちの用事に取り掛かってしまおうか。』

『他にも何かあるのかニャ？』

２人のスキッドをデフォルト設定に戻し、本来の用事であった装備

換装の補助をして欲しい事を伝える。
しかし、２人は装備を作っていた最中らしく、それが完成するまで待って欲しいと頼まれた。
しばらくして出来上がった２人の装備は、アルビレオのはナイフと鉄パイプとその他で作った１ｍ程の槍で、ベナトナシュはキャンバスや針金等で作ったとみられるマガジンポーチと、それぞれの戦い方に合わせての装備であった。

『アルビレオのはかなり持ち運びに困りそうだけど大丈夫？』
『それは……。　あ！隊長の邪魔にならない所に積むなんてどうニャ？　ほら、ここなら！』

そう言って月光に登り槍を置いたのはよく青葉が乗っていたスペースよりも後方、ボディユニットの後端部にある手すりのような部分。
実際、鉄パイプ槍を積むには丁度いい場所で搭載にはやぶさかではなかったが、固定にはガムテープを使うと言うアイデアだった。これには見た目の問題から月光は不満を漏らすが、ＭＧＬ１４０搭載ＲＷＳにダクトテープを使っていることをアイラに指摘され、反論できなくなり最終的にアルビレオの提案を受け入れる。

『ここに積むと使う場面は大分限られてしまうのでは？』
『んー、そうニャねぇ。』
『かと言ってアルビレオが持っておく訳にはいかないし。』
『それなら隊長の直掩として近接支援に就いたらいいんじゃニャいか？』

ベナトナシュの提案は月光とアイラの死角を埋めるためになるべく側に付いて行動し、もしもの時は搭載された槍を使って支援するというもの。
実際少々の死角があるもののそれは十分カバーできる程度で、自機

の性能的に近接戦闘も難無くこなせると判断している月光は、原作においても槍の扱いに長けたアルビレオはこれまで通りに、リトルチェイサーの他２人と連携して活動してもらいたい考えていた。
　それにこういった装備が必要になるのは大体が戦闘になっているか、戦闘になりそうな状況であり、その中で集団戦法が得意なリトルチェイサーは、なるべく分散しないことが重要だった。

『ただでさえ少ないリトルチェイサー達にはまとまって行動して欲しいから、必要になったら青葉に運んでもらうっていうのは？』
『俺はそれでいいと思うニャ。』
『この間の作戦もだけど、なんだかいつも青葉ちゃんはいいように使われてる気がするニャ。』
『そりゃあ飛行能力は今のところ、青葉しか持ってないから〟頼りにする〟のは仕方ない。』
『モノは言いようニャね・・・』

　本人のいないところで計画は進み、やがて話は月光にサポーター達の武器弾薬を積んで武器庫とする計画も持ち上がる。しかし、スキットシステムの新機能の修正が済んだアイラに装備換装の件を促され、新しい計画は後日練ることで、ようやく地上へと向かった。

　一方、運搬係としての仕事も任せられることになった青葉と言うと、そんな事とはつゆ知らず、スピカをぶら下げて商店街の上空１００ｍ程と地上からは余程注意しないと発見されることのない高度を維持し、特に宛もなくぶらついていた。
　学園都市の土曜日ということで商店街の大通りは学生で賑わっていたが、よく見ると修学旅行の準備なのか真新しいキャリーバッグを引く者も目立つ。

『そう言えば修学旅行って明後日ニャ？』
『一部の学生はそうみたいですが３―Ａ組は明々後日ですね。』
『いいニャ～、私も京都行ってみたいニャア。』
『問題山積みできっと満足に観光できないですよ。』

青葉の言う問題というのは見た目は勿論、交通手段や麻帆良学園からの脱出と再潜入などである。彼女も京都まで行くことがあったらその足で舞鶴市を観光したかったが、今はその時期ではないと理解しているため落ち着いた頃に行けないか考えていた。
頭の片隅でそんな事を考えていたが、いつの間にか大通りを外れてしまっていた。現在地を確認すると、今、青葉とスピカがいる位置は３日前にダーカーと交戦した路地に近い所で、その場所が今どうなっているのか気になった２人は早速行ってみることにした。
目的の上空に着くと、例の路地とその周辺に人気がないことを確認して降下し、その場の様子を調べ始める。

『あらー、見事に後始末されてますねぇ～。』
『弾痕ってかなり深く残ってなかったかニャ？』
『その筈なんですけど。魔法のお陰でしょうか？』
『まほうのちからってすごいニャ。』

スピカは他のリトルチェイサーと一緒に暇な時間を使い、参考用にとアイラが用意した対ダガン戦の記録映像を観ていたのでこの路地の被害を知ってはいた。しかし今の路地は赤黒い砂や空薬莢、貫通した１２．７ｍｍ弾が作った弾痕の他、戦闘の影響で崩れたり壊れたりしたはずの荷物なども元通りで、まさしく魔法にかけられたようだった。
ものの見事に修復された路地は戦闘前の情景と全く同じというわけではなく、改めて見ると幾つかの商店が共有しているバックヤードのような場所になっているようで、廃棄物や入荷したての商品などが

積まれていた。
　実際に魔法が使われたのか確認しようと手分けして調べていると、青葉が弓具店らしい店のスペースに設けられていた大きなゴミ箱にある物を見つける。
『ん～、これは使えそうですね。』
『クロスボウ？なんだかボロボロニャ。』
「廃棄」と書かれたゴミ箱から釣り上げられたクロスボウは一見、ライフルのような形で狩猟用にも見えるが、塗装は明るい青や赤が使われ競技向けの印象だった。
　ただスピカの言うように弦が切れフレームも歪むなど目に見えてダメージが入り、使い物にならなくなったから廃棄されてたようだった。
　『見ます？』と差し出されたクロスボウを受け取り、スピカは細部をより詳しく調べる。
　弦は無くなっていたので遠目には分からなかったが、どうやらコンパウンドクロスボウのようで弓の両先端に滑車があり、その辺りには大きな損傷は見られない。
『捨てるなら分解とか包んだりしないとダメなんじゃニャい？』
『そうですよ。仕方ないですねぇ、これは私達で責任もって処分しましょう！』
『持って帰るニャ！』
　散歩の手土産にと調査もそこそこに、クロスボウを抱えたスピカを吊るし一路拠点へ向け路地を飛び立つ。
　それを見送る者が２人いるとも知らず。
「見つかってませんよね？」
「大丈夫だヨ、私達を探してた様子ではないネ。それでカメラの方は

？」
「はーい、バッチリですよー。」
　青葉とスピカがいなくなった路地の一角の物陰から、空間が２つの人型に揺らぎそれぞれ”工学部　秘密の調査用”と書かれた中型ジュラルミンケースと”工学部試作　多機能デジカメ”のラベルが貼られたデジタルカメラを持ち、これまた”工学部試作　２００３光学迷彩”か背中に書かれたフード付きコートを着込んだ少女が２人、姿を現す。
　目深に被ったフードを脱いだ２人の正体は月光達にとって当面の間の最重要人物である、超鈴音と葉加瀬聡美だった。
「映像と写真、両方共撮影できてますー。」
　葉加瀬はデータを見直し終えコートの下に装備していたポーチへカメラを入れると、青葉達が飛び去った方角を見つめる。
「偵察機でも持って来てたら追跡できたんですけどねー。」
「仕方ないネ。ここに来た理由は３日前に何があたかを調べる事だたからネ。」
　そう言うと提げているケースと軽く叩く。
　月光達とダガンとの戦闘は表向きには、暗視装置を手に入れてはしゃいでいたサバゲーマー数人が調子に乗り騒いでいた、と言う事で処理され、グレネードの爆発痕はその騒ぎで起きたボヤによるもとされていた。
　説明は麻帆良学園の一般人にはこの内容で問題なかったが、騒動の後日に月光達からの接触があった超一味は彼らが関係していると判断し何が起きたかを詳しく調べに来ていたのだった。
「さて予想外の収穫もあたけど、お陰で彼らの正体についてまた一歩

近づいたネ。」
「そうなんですかー?・さっきの飛行型ロボットは米軍の２１世紀型戦闘構想のイメージに近い物がありましたけど、三本腕の丸いロボットは見たことも聞いたこともないですよー?・それに素材も技術も全くの別系統同士に見えますー。あ、でもあの二足歩行ロボットとは関係性がありそうですねー。」
「その辺りも含めて集めたデータと一緒に解析するネ。」

着ていたコートを収納袋に仕舞った彼女達の服装は学生服で、先の袋を隠し持っていた学生鞄に入れて路地を出る。

「そう言えば、”肉まん君Z”の調子はどうカナ?」
「良好ですよー。後は修学旅行の間どうやって持ち運ぶかが問題ですが・・・」
「それなら簡単ネ!”肉まん君Z”を魔法で小さく、フィギュアの様にするといいヨ!」

２人は数日後の修学旅行ついての話をしながら、何事もなかったように葉加瀬の研究室がある麻帆良大学の工学部棟へ向かっていった。

ＡＣＴ．１６　地下水路の会合

地上に戻った月光はリトルチェイサー２人の協力してもらい、ＴＯＷ発射機と自作したＭＧＬ１４０搭載ＲＷＳを積み替えはスムーズに進行し、ＦＣＳと照準の同期も問題無く完了する。

しかし会合時に目立った装備は威嚇するようで不味いのではとベナトナシュの指摘に武装にカバーを被せるか、武装そのものを取り外すか、そのままにするかで意見が割れる。結局武装はＭＧＬ１４０とＭ２は取り外してＭ２４０とカーゴスペースの装備はそのままにする方向で落ち着く。

２基のＲＷＳの取り外し作業中に青葉達が帰還し、クロスボウの修理をする前に作業を手伝ったお陰で予定より早く武装解除ができる。その後に持ち帰られたクロスボウは、材料と設備の問題から直ぐに修理できないと分かると、当面のメインアームにしようと考えてたスピカは残念がっていた。

この日の夜、警備当直である青葉が拠点周辺上空に所属不明のドローンを発見するも、休眠中の月光らを起こして対処しようとした所で見失ってしまう。

――４月２０日　夜――

昨晩に飛来したドローンは形状から超一味の物と推測し、再びドローンが来ても手出ししない事として警戒しつつも前日に続き自由行動の許可が出る。

各自、注意しつつ外出するなど思い思いに過ごしていたが、そのまま何事も無く会合予定の３０分前である２２：３０になると全員集合の後、トンネルを通って目的地に向け出発した。

『いよいよですね！』
『心なしかここまで辿り着くのに凄く長かった様な気がするなぁ。』
『そんな事はないと思う。超とコンタクトを取ると決めてから８０時間ぐらいしか経ってないので。』

なんとなく数日・数週間どころでない時間が掛かっていたような錯覚を覚えた月光。そんな彼はサポーター達をＲＷＳが取り外され広々とした機体上面に乗せ、安定した足取りで水路を進んでいた。
やがて会合予定の場所へ十数分前に上陸したが人気はなく、代わりに以前来た時には無かった電子機器の反応が微かに感じ取れた。

『何か設置されてる。多分カメラか何かだと思うけど・・・』
『どうするんだ隊長？破壊するかニャ？』
『うーん、取り敢えずは放置しておこう。昨晩のドローンの件とあわせて確認はするけどね。』

リトルチェイサー達が降りたところで、特定できたカメラを注視するとその側から小さな看板が出てきた。そこには「Ｅｙｅ　Ｈａｖｅ　Ｙｏｕ」とあり、加えて「今からそっちに行くネ！」とまで書かれてた。

『なんとまぁ・・・。カメラが見つかるのも想定内って事の様で。』
『あ、カメラのランプが消えましたね。確かまほら武闘会時の監視室ってこの近くじゃありませんでした？』
『となると、もうすぐ来るってことニャね。』
『ニャ？足音聞こえない？』
『言ってるそばから、ってところかな。ちょっと緊張してきたかもしれない・・・。』

月光達が来た方角とは逆の方から複数の足音が重なり聞こえてく

ると、やがて分岐路からそれぞれローブやコートを着込んだ４つの人影が現れる。超鈴音、葉加瀬聡美、絡繰茶々丸、龍宮真名であった。龍宮はこの時期にはまだ超一味と契約していないと考えており、この場にいる事が気に掛かったが後で探りを入れてみようと気持ちを切り替えた所で、超が一番に口を開く。

「你好～。君がリーダーで間違いないカナ？」
『ほらほら、今回の事を持ち掛けたのは私達なんですから、しっかりと挨拶しないと、ですよ！』
『あ、ああ。そうだった。』

軽く咳払いする月光。不安そうに見るサポーターの面々。興味深そうに眺める超一味。微妙な間の後に外部音声出力へと切り替える。

「ええ、そうです。自分の事は月光、と呼んでください。それともう一人・・・。」
「二足歩行無人兵器ＩＲＶＩＮＧのサポートＡＩ、アイラ。」
「月光とアイラ・・・カ。私は超鈴音、一応こっち側の代表にということになるヨ！よろしくネ！」
「本当に交渉相手がロボットだったとはな。なるほど面白い。」
「私が麻帆良大橋で感知したのは・・・。」
「やっぱりこの二足歩行機さんだったんだねー。」

茶々丸と葉加瀬の会話に気になる点があったが、超の協力者の紹介があり、月光側も配下のサポーターの紹介をする。それらが一通り終わると超から本題について、月光（とアイラ）と別の場所で話がしたいと言われる。
勿論、月光からしても願ってもない事であるため同意し、案内するという超の後に付いて行く。留まるサポーター達へ待機を指示してその場を離れると、葉加瀬の質問攻めにあっている彼女達のＳＯＳがスキットシステムを介して聞こえて来る。

だがアルビレオとアイラが完成させた立体音響機能を実地試験として起動しており、仕様通りきちんと動作しているようで、やがて残されたサポーター達の声は聞こえなくなっていった。取り敢えず救援要請の返答に『神様の2通目のメールにあった注意点に気を付けて答えてあげてね』とチャットを送った。

道中、前より気にしていた脅迫めいたメッセージについて詫びたが、「大して気にしていないネ!」と言われ安堵しその後も計画をバラす気は更々無かった事などを話している内に、分岐路や曲がり角をいくつか曲がりしばらく進んだ先で突然、超が立ち止まる。その場所の壁に月光は何か違和感を感じたが、アイラは気付かないでいた。

『何もないのにどうしたの?』
『さぁ?でも壁に細工があるっぽい。まあ、聞いてみるよ。』
「どうされたのですか?」
「月光サン、アイラさん、ここの壁を見て気づいた事は無いカ?」
「これは・・・。うーん、何かあるとしか分からないですね。」
「私には何も。」
「まぁ、無理はないネ。高位の魔法使いも欺けるよう設計したカモフラージュだからネ。」

そう言って壁に右手を付き小声で何かを呟くと、手を付けている壁の一面がノイズが掛かって消えてしまい、代わりに現れたのは両開き戸だった。

超の誘導でギリギリ通れる扉を潜ると、そこはさっきまでいた下水道とは全く雰囲気の違う清潔な、病院や研究所のような廊下になっていた。勝手に扉が閉まると壁にある装置に手を置いた超が再び呟くと、先の扉から鍵が閉まるような音がする。

「これでここは完全な密室になたネ。外に声が漏れることは一切ない

から安心するといい。」
「それは助かります。しかしこんな廊下でいいのですか？」
「そこの部屋も使える事は使えるヨ。その体を小さくできたらネ。」

連れられて廊下中程の両側にある扉は一方がここに入ってきた時と同じ両開き戸、反対は片引きの自動ドアで月光が通れるものではなかった。ちなみにその部屋の中は暗いがそれなりの空間になっているようで、床には幾何学模様が刻まれており、後に高畑とちびせつなが捕らえられる場所だった。

「あー・・・、これは無理ですね。間違いない。」
「そういう訳だからここで本題に、と言いたいところだガ。」

そこで言葉を切ると、ジッと品定めするかのような鋭い目つきで月光を見つめる。
当然、その視線に気付き不審に思いつつも次の言葉を待つ。しかし待っていた言葉は予想外の衝撃を持つものだった。

「君達は、いや。月光サン、君はどの世界からやったきたのかナ？」
「!?　それはどういう・・・。」
「そのままの意味ネ。あぁ、そんなに警戒しなくても、答え次第でどうこうするつもりは無いヨ！」
『月光！どどどどどうしよう!?彼女の方からこんな事聞かれるのは想定外！』
『おち、落ち着くんだ。まずは超の真意を確かめ・・・れるのかなぁ？』
「ナハハハハ、ちょっと混乱させてしまったようだネ。腹を割って話したいから口調や呼び方に気を使わなくてもいいヨ。」
「それじゃあお言葉に甘えて。しかしまぁ、この際だから全部話しちゃいますか。」

元々この件は話すつもりだったがそれが少し早くなっただけと考

え、いわゆる前世は麻帆良学園が無い世界から神様転生をしてきた事、その前世での漫画等のメディアからキャラクターや実在する物も含めた無人兵器をサポーターとして連れている事を告げる。
その話を超は特に驚くような反応を見せず、静かに聞いていた。
話が一段落し冷静な超の様子を見たアイラに、ある一つの可能性が思い浮かぶ。

「もしかして、超は転生者？私達の話を聞いても全くリアクションが無いので。」
「あー。憑依転生者とかなら即身バレしてもおかしくは無いかも。そこの所どうなので？」
「フム、面白い考えだけどハズレ、正解はパラレルワールド出身ネ。君達に分かりやすく言えば〝原作〟から飛ばされてきたネ！」
「ん？ちょっと待って。〝原作〟とか飛ばされてきたって言うのは・・・？」
「簡単に説明するが、少し長くなるヨ。」

今、月光の前にいる超は原作通りの未来の火星から歴史を改変するべく来た筈だった。しかし実際にカシオペアを起動して到着したのは、目的の時代ではなく平行世界だった。何の因果か異世界への次元跳躍してしまい、その後も勝手にカシオペアが起動して次元跳躍を繰り返す。
跳躍後の滞在期間はバラバラで跳躍の前兆に気付いてからは跳躍する先々で身に付けた技術で、この原因を解明しようとしたが叶わなかったらしい。
結果として超の記録では数十回もの跳躍の末、最初の跳躍から丁度1年後にこの世界線に到着しカシオペア初号機が機能停止してしまう。跳躍している内にひょんな事から〝魔法先生ネギま！〟を、自身が居た世界線を物語として描かれている事を知る。しかし彼女の計画は、
「私はあの世界を、この世界の悲惨な未来を変えるためにここへ来た。

エゴだと言う者もいるだろう。絶対的な悪だとする者もいるだろう。それでも私は歴史を変える。元の世界の平行世界であるここで計画を決行すると決めたからには、別の在り得たかも知れない世界線や計画の成否とその未来を知る必要は無いネ。」
と語り確固たる信念と覚悟で実行されているこの計画には不要な情報だった。

跳躍先の世界は実に様々で月光の知っている世界線もあれば、そうでない所もあった。特にＭＧＳシリーズはこの世界線に存在せず、他の世界線で知ったと付け加える。また、平行世界については葉加瀬達には話しておらず、今後もバラすつもりは無いという。自分についての話はここまでと言わんばかりに一息つく。

「もしかすると私達の活動も、何処かの世界では作品として存在する？」
「さぁ？どうだろうね。そもそも毛色の違い過ぎる異様な組み合わせだし・・・。」
「無数の平行世界のどこかに一つぐらいあると思うガネ。」

また超は麻帆良大橋近くでエヴァｖｓネギの戦闘を観察している時、同じ目的の月光達を発見し麻帆良学園侵入時に既に彼らに気付いていた事を明かす。別世界線の架空兵器の存在に興味を持ち探していたが、結局月光達からコンタクトがありこれ幸いだったという。
そして話題は、互いにデメリットが無い事を前提にようやく交渉へと移る。
月光の要望はネギパーティーへの合流の手助けと、後世に備えての学園外とのコネクションの確立。本命は前者についてネギの力になる事を伝え、超は他に幾つか質問し月光の考えを確かめると快諾する。その一方で、後者は出来なくは無いが確約は出来ないというだった。
対する超の条件はネギとその仲間たちの実力を計測し、もしもの異

常が発生した時は密かにネギパーティーを支援するという一点のみ。その目的は月光のようなイレギュラーが発生している、この世界線でのネギパーティーがどの様な成長を果たすのか、を記録するものだった。

これを拒否する理由はなく、むしろ原作のストーリーを比較的間近で見届ける事もあり二つ返事で引き受ける。

『ねえ、月光。さっき言ってたイレギュラーってもしかして・・・・。』
『イレギュラー？・・・・あぁ！ダーカーか！すっかり忘れてた。』
『・・・・・・重要な事だったんじゃ。』
「あー、所でイレギュラーについてなんだけど。」『・・・・。』
「フム、後で話そうと思ていたガ。二人はダーカーを知てるカ？」
「まぁ前世にゲームで戦ったことがある程度の知識だけどね。宇宙の敵だとか生物や機械問わず侵食するとか。」
「そこまで知てるなら話が早いネ。元いた世界、原作にはいないはずの勢力。幾つか世界線でゲームで触れたり実際に遭遇するなどで奴等を私なりに調べていたネ。そして3年前にこの世界に辿り着き、ここにもダーカーがいることを知てからは入学までの1年間をダーカーや現実・魔法世界の歴史の差異を調べたヨ。」

詳しい情報は後日提供される事になるが、調査結果を簡単に説明してもらう。それによると１９９６年初頭に魔法世界で出現が確認されその後、何処からとも無く〝ダーカー〟の種族名とそれに属する名前も与えれていった。歴史自体はダーカーの存在以外は原作通りと言える。

その後、必要であれば互いの技術供与と近い内に双方の拠点を案内すると約束し、超一味が使っている秘匿性の高い専用通信網へのアクセス方法も教えてもらう。ふと視界の端に見えた時計を見ると既に日付が変わっていて０：２０になろうとしていた。

「今日は月曜日だしあまり夜更かしする訳にもいかないだろうから、今回の会合はこんなところかな？」
「気遣いありがとネ。いやはや、とても有意義な時間だたヨ。」

そう言いながら満足気な笑みを浮かべ右手を差し出してくる。握手に応じるべくワイヤーアーム伸ばすと、超が直径２～３ｃｍのそれを握る。

「ム？このアーム、意外とガチリしてるネ。」
「ここも主に人工筋肉で出来ているので。」
「マニピュレーターもこんな風に動かせるんだよね。」

握手を交わし終えたアームの先端からマニピュレーターをいっぱいまで伸ばし、素早く三つ編みにしてみせる。
が、先端同士が引っかってしまい自分でそれ解くことができず、超が小さく笑いながら絡まったマニピュレーターを解いた。
最初に会った会合予定地点に戻る途中、倉庫群に飛来したドローンについて尋ねるとやはり超が飛ばした物で、クロスボウを回収した無人機２機（青葉とスピカ）が飛び去っていった方角へ真っ直ぐ飛ばしてみたが月光達の拠点は見つけれなかったという。また、既に龍宮が超一味にいる理由も訪ねてみると、学園祭での計画発動時には先約を入れておく為に２年前から長期契約を結んでいるそうだった。

戻ってみるとＴＲＩＰＯＤ（アルビレオ）の１機をペタペタ触ったり軽く叩いてみたりしている葉加瀬と、その様子を見守りながら他のサポーターと話をしている茶々丸・龍宮の構図ができていた。
双方の代表者が戻ってきたことでその構図も崩れ、この場に到着した時のような状態に戻り両グループがお互いに向き直る。

「次の会談はまた私の方から連絡するネ。それでもよろしいカ？」
「こちらは多分、暇を持て余してるだろうからいつでも大丈夫だよ。」

「分かたネ。明日から修学旅行だから早めに連絡するヨ。それでは再見〜。」

超と共にわざわざ場所を変えてまで、彼女と何を話してたか主に青葉に問われ、超の素性やこの世界におけるダーカー等をアイラと説明しながら拠点への帰途につく。

ＡＣＴ．１７　程々のご都合主義

――４月２１日――

朝早くに届いた超のメールにはダーカーの資料と”Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍ”の表題で纏められた学園祭の強制認識魔法発動計画の詳細が添付され、彼女達の秘密施設への招待、そして昼からこの拠点を訪ねたいとあり、正確な拠点の場所が分からないらしいので拠点までの案内をつける手筈になった。

また、この世界線におけるダーカーについても多くの情報のほか、別世界線で超自身が直接ダーカーと交戦し捕獲するなどして得た情報がまとめられていた。その中には本物のアークス産のデータまでもが含まれており、月光達を驚かせる。

これらの情報の中にフォトン≒魔力という研究結果の他に、それらの力を利用しなければダーカー因子の浄化が出来ない、フォトン（魔力）への適性が全く無いと侵食の危険性が高まる等、ＰＳＯ２の設定で見たような事もあった。その時、先日の対ダガン戦で感じた違和感を思い出す。あの戦闘ではダガンは赤黒い砂となっていたが、この現象について魔力（フォトン）が付加されていない攻撃が原因と予想し、各資料を調べると的中していた。

ダーカーは生物も機械も侵食し取り込んでしまうため、直接戦闘を行なったＩＲＶＩＮＧの月光とアイラ、Ｔ―ホーク（ＭＡＶ）の青葉の３名は急に不安を感じ始める。

そこでダーカー因子の検査と場合によっては浄化をしようと神様に助けを求めたが「データは揃ってるはずだから頑張ってくれ」と助力を得れなかった。言われた通り何とか今ある情報だけでダーカー因子の検査と、同時進行で超の訪問に備えリトルチェイサー達に拠点内の清掃を指示する。

情報整理と拠点内の清掃、そして陰性という最良の結果が出たダー

カー因子検査が終わる頃には約束の時間近くになる。
自ら案内役を引き受けた青葉が昨晩の会合地点まで迎えに行くと、程なくして自身の身長の半分以上もある荷物を背負った超が、青葉に案内されて拠点にやって来た。
手土産というその荷物を月光の上面スペースに載せ、まず地上部を簡単に見せるが特筆すべき点は余り無く、エレベーターで次に案内する地下部へ下りようとする。
しかし超が「気になるものがある」と、倉庫の一角に向かう。そこに置かれていたのは、以前に地下から持って上がったコンテナだったが、彼女にはこれに見覚えがあった。話を聞くと4月12日正午に工学部の裏庭に、サイズが違うものの非常によく似た型式の物体が現れて、騒ぎになる前に回収したという。
そのコンテナは超一味の技術を持ってしても開けることが出来ず取り敢えず保管されているらしい。そこでこの後に予定している超の秘密施設への訪問時に月光達で開けることになった。
地下に下りた一行は格納庫と発電室をざっと見て回った。紹介するものが殆ど無くこの拠点への超の印象は、だだっ広い空間も相まってとても寂しい印象を受けたらしい。

「そこでこれネ!」と通販番組のようなノリで、月光に載せられていた荷物から出てきたのは、幾つかの突起物が付いて上面に升目が描かれ作業台のような装置。
近くにあった手頃な高さの空木箱に載せて太めの電源ケーブルを接続してセッティング済ませる。起動したその装置は上面の四隅から小さな投光機みたいな物と先端にペンのような物がそれぞれ付いた2本のロボットアームも起き上がり、操作画面が空中投影された。
”物質分解・生成装置(ナノマテリアルクラフター)”と言う2つの機能を備えた装置で、物質を分解しナノマテリアルへと変換して素材化、入力された必要情報を元に性質を変化させて物質を生成できる代物とのこと。
ナノマテリアルは普段、銀色の砂の様な状態で不活性化され、保管には特別な設備は必要なく普通のタンクなどで事足りるという。

これらは超の元いた世界で開発中の技術で、彼女はこれを計画の一助としてきたが、新型の導入もあって倉庫の隅に片付けれていた。
ただ、これを活性化して素材として使う為には量に関係なく膨大な電力が必要になり、超の見立てではこの拠点の発電機で作れる電力の８割程度を消費する事する。また装置上面の作業スペースの関係上、分解と生成が同時に出来ないと、問題がいくつかあった。
そういうこともあり、今の超はとある場所に更に大型で効率の良い装置を用意しているため、使わなくなったこのセットを何かと物資が不足しているであろう月光達に譲るつもりで手土産として持って来たのだった。
小火器程度の大きさまで製作可能で、1発の銃弾なら一瞬で完成するらしく、超が操作画面と設定方法を説明しつつ練習がてら１２．７ｍｍ弾の弾薬箱入り１００発を作ることになった。彼女の説明に沿って弾薬のデータをアップロードし、同時に適当に用意した鉄屑の分解作業も終わらせるとクラフター内にある小さな一時貯蔵庫に溜まったナノマテリアルを使い生成作業に移る。
生成作業はあっという間で、データのアップロード・物質の分解・対象の生成を全て合わせても今回は3分と掛からなかった。一定のデータ量までなら多数保存でき、ナノマテリアルに十分な残量があるならデータを選択すると即時、生成に取り掛かるので短期間に大量生産ができる。
しかし、良い事ばかりではなくナノマテリアルと装置の特性上の理由で、作り出された物体には３６時間というとても短い耐用寿命が存在していた。
この寿命を超えるとナノマテリアルはその物体の形状を維持できなくなり、その場で不活性化し銀色の砂状へと戻ってしまう。不純物を取り除けばナノクラで再び使用できるため、専用の濾過装置が別途必要になってくる。

「これで弾薬とか部品不足になることは無いニャね！」
「その場凌ぎだけどアルビレオの言う通りだね。しかし何でも作り出

せるっていうのは、なんだかヌルゲー化してない？」
「そういうの気にしてはいけないヨ。それにこのナノマテリアルクラフター以上のサイズ、作れないし制限時間あるから縛りは生きてるネ。」

「もとも、今使てる大型の方も貸そうと思てるけどネ」とあまりに都合の良い話に疑念を持つも今後の補給をはじめ、装備品の開発・改修などの懸念が取り敢えずは払拭され一安心する月光達。クラフターに貯蔵用ドラム缶を接続しナノマテリアルを備蓄するために次々と集めていた鉄屑などを分解し始める。

次に月光達が超の秘密施設を訪ねるのだが、月光の憑依するＩＲＶＩＮＧでは地下を通っても大学工学部内へ入ることが出来ないそうで、急遽ＴＲＩＰＯＤの誰かにホットスワップする。割り当てはジャンケンでベナトナシュが勝ったことで決まった。

分解作業はアイラと青葉に任せると、早速ナノマテリアルクラフターで仕立て直したコートと帽子をＴＲＩＰＯＤ３機が合体して着込む、いわゆる”擬態化ＴＲＩＰＯＤ変装仔月光”となって超に続く。ちなみにこの変装、超の評価だと極普通の一般人までなら簡単に騙すことは出来るとのこと。

超に連れられて部棟を彼女の研究室へ進むが夕方ともなると帰宅、休憩、徹夜に向けての買い出し等々で廊下を行き交う学生や教員が多い。研究仲間や超を知る人からはすれ違う度に幾度も彼女へ声が掛かる。

もっぱら研究についてや簡単な世間話だったりしていたが、なかには月光達が気になった者もいたようで「お客さんですか？」と尋ねられるが適当な返事ではぐらかして会釈する。その様子は容姿も相まってあからさまに不審者のソレであるが、特に疑われる事もなく超の研究室に辿り着く。

研究室では資料やパソコンとにらめっこしている葉加瀬がいたが、戸を開ける音でこちらに気付くと手を止める。

「お帰りなさ～い。むむ?･そちらの方はもしやー?･」
「どーも月光です。元の機体では厳しいのでＴＲＩＰＯＤに乗り換えて来ました。」

着て来たコートと帽子をコートスタンドへ白衣に並んで掛けると、姿を見せたリトルチェイサーの面々も挨拶を交わす。葉加瀬はどのＴＲＩＰＯＤが誰なのか特徴を掴んでいるらしく、それぞれに挨拶を返していた。言われて初めて気付き見分け方は彼女曰く、メインカメラ＆センサーの色や、機体の微妙な色の違いで区別が付くという。

「イヤー中々驚いたヨ。電子上のちゃんと自我のある意識体を自由に転送できる科学技術は、私のいた所でもまだ完全ではなかたからネ。ましてや元人間であた彼が、ソレを自由自在に扱ているのも興味深いネ。」
「ほ～!･それでは月光さんや関係している機器を調べたら、ＢＣＩテクノロジーやインターネットへの直接神経接続などのヒントが有るかもしれないのですね!･」

興奮気味の葉加瀬は何処からともなく様々なアームが伸びるバックパックと怪しげなゴーグルを装着し、ジリジリと月光達ににじり寄る。

「それは・・・また時間があるときにでも。」
「大丈夫ダヨ!･これから紹介しようと思てる秘密施設で沢山時間取れるネ!･」
「そうですね早く行きましょう!･あ、そうそうあのデータも持って行かないと。」
「えぇ・・・。」
「施設の入口はこっちネ!･」
『月光、諦めるしか無いと思う。二人共生粋の科学者なので。』
『アイラちゃんの言う通りニャね。それに技術提供も約束しちゃった

ニャ。』
『科学の進歩、発展に犠牲はつきものですから！』
『そうそう。それに神様特製のハードディスクを解析して、量産出来る様になるかも知れないニャ！』
『わかってるけどねぇ・・・。くそうっくそうっ、マッドサイエンティストなんて何するか分かったもんじゃ無いぞ・・・。それにベナトナシュ、実際に弄られるのは君だからね？何か言って欲しいんだけど。』
『まぁ隊長。悪いようにはされないと思うニャ。』

技術力の向上の為とは言え何をされるか分からない不安から、どうにかして逃れられないか拠点に残っているサポーターも含めて助け舟を求めようとするも他人事のような説得を受け、このＴＲＩＰＯＤ本来の宿主であるベナトナシュに至っては完全に諦め切っていた。
やがて大きな棚の裏から通じた隠し部屋に案内され部屋の中心、カーテンがのけられるとここまで予想もしていなかった物が置かれていた。それは台座の上に９０。横に寝かされ、火山を抱えた絶海の孤島のジオラマらしきものが収められた巨大フラスコだった。

「これはまさか・・・。」
「やはり知ているようネ。このダイオラマ魔法球は茶々丸をエヴァンジェリンさんに渡して、とても気に入てくれたようで追加報酬として貰た物ネ。」

当初の見返りというのは魔法に関する情報や技術の提供だったそうだが、加えてこの魔法具まで貰ったという。
更に話を聞くとエヴァンジェリンが手掛けたダイオラマ魔法球は思いの外多いらしく、今目の前にあるのは彼女が最後に作っていた物だったが途中で飽きた為に”未完成品”だという。”完成品”と違う点は現実の１時間が１２時間になり球内の魔力濃度が平均より僅かに低い事の２点。
しかし、秘密の箱庭に加えて時空の拡張が出来るだけでもとてつも

ない優れものであり、魔力の濃度の差というのは全くと言っていい程問題になるようなことではなかった。

「この魔法球の中に私達の秘密施設があるんですよー。ちなみに入るには呪文を唱えるだけです。」

「時空拡張で数日分の時間は確保できてるネ。これだけあればＰｒｏｊｅｃｔ　Ｍの事も話せるし、勿論その機体の解析（分解）も出来るヨ！」

「いや、自分はそんなに乗り気じゃないから！」

「隊長、諦めるしかないニャ。」

「ダイジョーブ！この”メッセージ”の記憶装置も一度完全に分解して元に戻したネ！」

そう言って見せてきたのは”オペレーション・メッセージ”で送り付けたハードディスク。月光を始め全員、存在をすっかり忘れていた物だった。返されたハードディスクは一見すると何かされた様子は無いが、超と葉加瀬、そしてアイラが言うには確かに分解されてまた元の状態に戻されているらしい。実際にマニピュレータでアクセスすると送り付けた時のままのデータが残されていた。

解析されるとしても、ちゃんと元通りになる実績を見せられ少しは不安が和らぎ、ようやく魔法球へ入ろうとしたところだったが、ある事が気になりだし待ったをかける。

それはスキットシステムの通信状態であった。スキットシステムの概要を聞いた超達を含めた各人の予想はダイオラマ魔法球内と外の世界との通信は出来ないのでは、という予想が殆どを占めた。

そのため、月光は留守番組に通信が途絶した場合の指示（と言ってもこれまでの指示と変わらず待機）をして今度こそと、超が魔法球に手をかざす。

「Ｏｐｅｎ（開）　Ｓｅｓａｍｅ（ゴマ）」

「えっ」

月光がツッコもうとした時には隠し部屋から２人と３機の姿は消えていた。

ＡＣＴ．１８　やはり魔法球は便利

『やっぱり切断されちゃいましたね～。』

月光達の信号やスキットシステムは大方の予想通り途絶したが、活動拠点に残るアイラと青葉は事前に「魔法使いやダーカーに対しての警備を維持しつつ待機、あとは自由」という指示を受けていた。その指示の下、拠点周辺のパトロールしている青葉は対人・対魔力センサーを気にしつつのんびりと飛ぶ。

『現実時間で帰ってくるのは６時間後、魔法球内では７２時間ですかぁ。どんなお土産があるんでしょうか？』

『分からない。その辺りは特に言ってなかったので。でも強化用の装備品とかは作りそう。』

拠点地下にいるアイラはナノクラでスクラップを分解し、不活性化ナノマテリアルを溜めていた。スクラップの山から鉄屑やプラスチック製品を引っ張りだしては分解する簡単な作業である。

しかしアイラ自身はこの動作を機体に記憶させ自動化し別の事をしていた。

『これ、見て欲しい。ダーカーの件も含めて警備体制とか見直したので。』

『むぅ～。改めて見ると結構範囲広いですねぇ。やはり警備要員を増やさないとダメそうですか。』

『人員を増やすのは難しい。だから加えてこういうのはどう思う？』

アイラが見せたのは爆発反応装甲の１ブロック分の様な機材の設計図。それは個人携帯が可能な対人レーダーで、これに対魔力センサーなどの高性能センサー類を追加して哨戒センサーを作って哨戒網を築こうと考えたのだった。これらの電源は活動拠点からケーブ

ルを伸ばし念の為に擬装を施して供給するつもりだが、ナノクラと同時に稼働させるとセンサーの数次第では使用可能電力量がかつかつになってしまうのがネックであった。

『なるほどなるほど。これはいいですね！でもこれだけじゃ足りないような・・・。そうだ！これも追加で作ってみませんか！』

『これは・・・サイファー？』

『警備ということならこれが丁度いいと思います！ＭＧＳ製なので高い安定性と静音性を持ってるのでオススメですよ！ちょっとサイズが大きいですけどね・・・。』

青葉の言うようにＭＧＳ２に登場したサイファーは夜間・悪天候の中、安定した飛行でソリッド・スネークの撮影に成功しているなど非常に高い性能を発揮していた。

陸空のこれら新たな装備を揃って運用すれば高い効果が得られると２人で判断し、青葉はパトロールを続けつつ設計の見直しを手伝い、アイラはそれを元に制作に取り掛かる。

一方の月光達。強い日差しの下、彼らは今いる場所は岬の小高い丘の頂上、幾つかの魔法陣が描かれた広場だった。

「ようこそ！ここが私達の秘密の箱庭ネ！」

「ここは人が入植する前の鹿児島県硫黄島を模しているそーですが、必要に応じて私達で手を加えてるんですよー。例えば発電設備や実験場と演習場とかー。」

「工場の類が見えないニャ？」

「あそこの風車とソーラーパネルの全部のケーブルが地中に向かって

るみたいだニャ。」
「地下には何が？」
「フフフ、それはこれから案内してからのお楽しみ、ネ！」

魔法球の出入りするための一番大きい魔法陣から周囲を囲む５つの魔法陣の内の１つに乗った途端、どこかの部屋へ転移する。主要施設に設けられているという転移室は先日の会合時、月光（＋アイラ）と超だけで行った隠し通路等の雰囲気ととても良く似ていた。
転移後、スピカが似たシチュエーションだったためか、ダイオラマ魔法球に入る前の事を思い出した様に聞いてくる。

「そう言えば隊長ー。ここに入る時、何か言いかけたニャ？」
「いやね、スイッチとかじゃなくて呪文、それも”開けゴマ”とは思ってもなくて。」
「正しくは声紋認証で転移する仕組みなんですよー。ちゃんとしたものはこういう仕組みは不要みたいですけどねー。」
「”Ｏｐｅｎ　Ｓｅｓａｍｅ”も元を辿れば、れっきとした呪文ネ。」
「それはそうなんだけど何かこう、”開けゴマ”だと違和感があるというか。」
「隊長、悶々としている所悪いが、着いたみたいだニャ」

転移室からここまで到着する。最初に案内されたのは何台かのディスプレイやキーボードによって占拠された壁二面とそれに囲まれるように座席のあるコントロールルーム。残りの一面はドアと大きなガラスによって隔てたサーバールーム。ここだけで島の全てを制御し、研究開発を行なっているという。
ちなみに通路を挟んで反対の部屋はマンションの一室のように衣食住が完備された生活空間があり、休憩部屋と呼ばれている。
葉加瀬が席に座ると慣れた手つきでコンソールを叩き巨大モニターに島の全景とその地上・地下の施設が３Ｄモデルで映し出される。

「はぇ～、すっごい大きい・・・。まるで要塞みたいだぁ・・・。」
「ならば火山にも地下通路と塹壕、それに隠し砲台も作らないといけないカナ？」
「決戦前の訓示は”敵十人を斃さざれば死すとも死せず”、で決まりだニャ。」
「アメリカ海兵隊とでも戦う気なんですかねぇ？」
「その硫黄島じゃニャいし太平洋と繋がって無いし、そもそもどこから敵が来るニャ・・・。」
「何のお話ですかー？」

地上の開けた土地や沿岸に目を向けると実在のものよりも大規模な飛行場と港、島中心部は山も含めて市街地のセットも作られた演習場と地下格納庫を繋ぐミサイルサイロの様な構造の大型エレベーター、火山周辺の地上採掘施設、風車やソーラーパネルなどの発電関連施設。

最大深度５００ｍに達する地下にはコントロールルームとサーバールームを始め、各種発電・蓄電設備を備える発電所、大型エレベーターを中心に幾つもの階層・区画に分かれる格納庫、ナノマテリアルクラフターが数基設置されている生産工場、魔法球外からの物資を搬入出を行う大魔法陣を備える転送室と隣接する貯蔵庫、火山周辺の地下採掘場、島の北側は岸壁をくり貫き地下施設と海を直接行き来できる地下港など。そしてこれら施設の殆どには電動トロッコの線路が張り巡らされていた。

特に格納庫内では各階層・区画だけでなく中心の大型エレベーターと南北の壁にある補助エレベーターや、壁面に沿って螺旋状に各階を繋ぐスロープにまで線路が牽かれ、トロッコが地下施設内における重要な輸送手段となっている。

３Ｄモデルで島の設備について簡単な説明を受け、そのモデルデータをダウンロードし地下施設の見学に出発するが、広大な地下を移動するには徒歩は流石に大変である。そこで普段から使用していると

いう”シグウェイ”と名付けられた電動立ち乗り二輪車を使わせてもらう事になった。

「これどう見てもセグ○ェイだよね？」

「確かに外見はセ○ウェイですけど、中身は私が独自開発したジャイロシステムと自動操縦機能、そして非接触電力伝送方式をシグウェイとこの施設全体に採用しているので充電する必要なんて無く、最高速度は３０ｋｍ／ｈ。はっきり言って別物ですよ。」

技術自体には興味があるものの理論についてはさっぱりで、葉加瀬の解説が理論関係にまで発展すると半分ぐらい話を聞き流す。

シグウェイにはＴＲＩＰＯＤ３機で再び合体して乗ると主要施設を巡るため出発する。第１階層の格納庫はターミナルの様になって島内の各施設に通路が通じており、これより下の階層にはＴ―ＡＮＫ―α３、通称田中さんや多脚戦車型ロボットＢＵＣＨＩＡＮＡとその改良型ＳＵＰＥＲ―ＢＵＣＨＩＡＮＡ、他数種のロボットの試作機が保管されているらしい。

発電所、空港、港、地下港と様々な施設を見終わり最後に向かうのは生産工場と貯蔵庫と転送室。これまでの施設と違い通路は短く、直ぐに重厚なゲートへ辿り着いた。この先が生産工場と関連施設だという。葉加瀬がゲート近くの端末を素早く操作するとその見た目とは裏腹に滑らかに動き出す。

「ここが私達の計画の根幹を成す施設ネ！」

開かれたゲートの先には、いずれも身の丈を超える水槽のような物を含んだ機材が、一番奥に天井まで届くぐらいの物が１つ、それに比べて中小サイズの物が奥に続く線路と通路の左右に並んでいた。

「極小物質分解（ナノマテリアル）・再構成装置（クラフター）は小型と中型が４つずつで、大型のが１

つです～。後は色々な道具がありますよ～。」
「君達にあげたのは持ち運び可能なタイプだが、ここにあるのはより大きな物を生産するのに効率が良いタイプだヨ。３Ｄプリンターで言えば光造形方式や粉末方式に近いカナ？」
「うーん、全くイメージが沸かないなぁ。」
「両方似てますし大雑把に言うと、素材を薄く敷いては作る物の形状に合わせてくっつけたり硬化させたりを繰り返す方法なんですー。この装置の場合ですとこの生成槽いっぱいにナノマテリアルを充填して、そこへデータと一緒にエネルギーを注入すると作りたい物が出来るんですよー。それで最後に余剰のナノマテリアルを回収して完成ですー。」
「あ～なるほど、なんとなく分かった。今日もらったのとは全く違うのか。」

月光達に譲られたナノマテリアルクラフターは正しくは”携行式小型極小物質分解・再構成装置”と言うらしいが、元々あの拠点に据え置く予定なので、持ち運びしやすかったとしても重要でなかったりする。
ここにある小型（とは言っても軽く２ｍ強はある）で田中さんや武器・装備を、中型はＢＵＣＨＩＡＮＡなど。大型ではＢＵＣＨＩＡＮＡの派生機ＳＵＰＥＲ―ＢＵＣＨＩＡＮＡを作るとしても余りあるサイズだった。

続いて隣接する転送室と貯蔵庫、そしてそこに保管されているｍｏｄ．ＧＯＤ仕様のコンテナ”プライムコンテナ”を見に行く。ちなみに、プライムコンテナという名称はダイオラマ魔法球に入る直前の交信で、呼びやすくするために決められたものである。
大型ナノクラ前で行き止まりに見えた通路と線路は実は丁字路になっていて、向かって左に工場入口と同サイズの出入口があり奥で薄っすらと魔法陣が光っていることから、こちらが転送室であること

が窺えた。となると反対側が貯蔵庫になるがその出入口は他に比べると半分程で、月光達の拠点のそれに近い大きさだった。
貯蔵庫の構造は入ってすぐ右側の中小型ナノクラ４基の裏に当たる場所には、不活性化ナノマテリアルが溜められている巨大な貯蔵槽とナノマテリアル濾過装置。
その反対の左側は資材の入った貨物船や貨物列車の他、偶に大型トレーラーなどに積まれるような２０ｆｔコンテナと廃材等が積み重ねられて、それらの直ぐ側に線路の終点と貨物の積卸場、解体用機材や無人運搬車が何台か置かれた広い空間にないる。

そんな貯蔵庫の一角、件のプライムコンテナは過去の物の中で最も大きく、資材コンテナより若干小さい。サイズ的にはサポーターが入っていそうで、外見もこれまでと同様で長辺側の中心、程良い高さに端末が付いていた。

「すごーく強力なプロテクトが掛けられたりしてて、私達では開けられなかったんですよー。」
「バラしてでもこじ開けようとしたが駄目だたヨ。これでも高性能な物ばかりネ。」

超は横目で大小様々な解体機材を見ながら、プライムコンテナのハード・ソフト両方の強固さに呆れたように言う。近づいて見るとコンテナの大きさは周りのコンテナより一回り小さい。ハッチの隙間にこじ開けようとした時に付いたと思われる傷があったが、意外と目立たないぐらいの浅いものが大半だった。
端末も目立った傷はなく、これまで通りにジャックにＴＲＩＰＯＤのマニピュレーターを差し込み、アイラ達との交信が途絶した場合に備え事前に受け取っていたアイラ製の開放プログラムを起動させる。しかしこのプログラム、一部が未完成であり開放には少し時間が掛かる見込みだった。

「ところでーこのコンテナは誰が作って、なぜ工学部棟の裏庭に、どうやって人目に付かずに置いたのでしょうかー？」
「えっとそれは・・・。」
『しまった、コンテナの誤魔化し方全然考えてなかった・・・。』
『事故で世界中に飛び散ってしまった、とかでいいんじゃニャいか？』
『でもベナト君のだと超ちゃんなりに説明してて、それと食い違ってたら面倒ニャ。』
「ハカセ、そのコンテナについても昨日話した通りだヨ。詮索不要ネ。」
「少し興味がありましたが、そういう事ならー。」

月光の言葉が詰まったのを見て、察した超が口を挟む。後に知るが月光達についての説明は「超と似た境遇だが、詳しい素性は話せない。」という事になっているらしい。
転生後の制約から恐らく叶わないが、いつか包み隠さず話せる日が来て欲しいと思っていると、解錠が完了しハッチが開き始める。
プライムコンテナの中身に期待が膨らませるが、異様なモノがその中心にあるのだった。

ＡＣＴ．１９　痴女科学者と計画の行方

プライムコンテナのハッチが開き切る。
が、サポーターがいるものと思っていたそれからは、青葉やリトルチェイサー達のように誰かが出てくる様子はなかった。
いつもならＩＲＶＩＮＧに憑依している月光が目線の高さにより容易に中身を覗いたが、今はコンテナの方が誰よりも高く中がどうなっているか知る事は出来ない。大型の武器・装備が入っているのかと当初の予想を覆し、仕方なく月光達はコンテナの縁によじ登る。一方で超達は自走式シザーリフトを持って来たりして中の様子を窺う。

「わ～、武器とかがいっぱいありますねー。」
「弾薬の他に旧式の物から数年後に登場する物まで。武器だけを見れば当たりと言える品揃えだけど・・・。」
「問題は真ん中のモノ、カナ？」

ＭＧ４２、ＰＰ―１９Ｂｉｚｏｎ、ＳＡＩＧＡ―１２、Ｍａｇｐｕｌ　ＰＤＲと弾薬箱が収められている中、６人の視線の先にあるのは武器弾薬に混じってコンテナ中央にある物体。
ＭＧＳ４に登場する各章のボス、Ｂ（ビューティ&ビースト）　Ｂ部隊の一員であるラフィング・オクトパスが綺麗に丸くなっていた。見下ろす位置にあり、月光達からはパワードスーツに覆われているモノが何であるかは分からないでいる。

『おかしいな、プライムコンテナに入っているのは無人兵器のはず。・・・もしかしてＭＧＲのサイボーグみたいなのが一緒なのか？』
『となると初の人型ニャね！』
『サポーターもどんな子か楽しみニャ！』

新たなサポーターに期待が膨らむアルビレオとスピカ。月光とベナトナシュもサポーターは気になっているが機体の方も注目してお

り、特にベナトナシュはどんな戦い方が出来るのかに興味があるようだった。
機体を詳しく見ると触手基部（仮）はグレーがメインだが、ホワイト寄りのグレーも斑に入り、その他センサー類のライトカラーは水色、触手は少し赤みがかったグレーといった具合で、元になった機体とは色合いが違っている。覆っている触手の隙間から、奥の方が見えたが触手の密度が高く詳細は分からなかった。
ラフィング・オクトパス（？）に近寄って、声を掛け揺らしたりノックしてみたりしたが、相変わらず反応はなくパワードスーツの類かと予想し、ワイヤーアームの差込口を探すがそれらしい物は見当たらない。
月光は差込口を探すのに集中して気付かなかったが、微かに聞こえる声をベナトナシュは感じ取っていた。

「ちょっと待つニャ。こいつから何か聞こえる。隊長もう少し近寄れるニャ？」
「ここら辺か？・・・・ん？」
「よおじょが、ツインテールの幼女がいっぱいぃ・・・。えへ、えへへへへへ・・・。」
「・・・。」

小さく聞こえてくる女性の寝言。サポーターが宿っていることは分かったが、聞こえてくる内容は明らかにおかしかった。

「叩き起こすか。」
「わぁい、総二様がショタっ子に・・・。ぐへへへへへへ幼女とショタ総二様ぁ、まさにパラdッッッグヘァ!!」

手近にあったＭＧ４２を某カールスラント軍人よろしく、銃身が曲がらないよう気を付けながら、ラフィング・オクトパス（？）の触手基部を殴り付ける。女性らしくない悲鳴と共に体勢を崩すと、すぐさ

ま触手が展開し倒れ込むのを防ぐ。それによってようやく機体の全容が見えた。
　触手基部と思われるパーツは、同じ物をもう1つ裏返し合体させてその触手を元からある物に対し後ろにずらした様なレイアウトになり、計8本の触手が生える基部はオリジナルより厚い。
　そして本来ならラフィング・オクトパス本体の背中が接続される位置だが、腕が無く綺麗な丸になったＴＲＩＰＯＤがあるだけで、これが機体の本体部あたるようだった。

「いたたたた・・・。もう、せっかくいい夢を見てたのに・・・。」
「その夢とやらはとても如何わしい雰囲気がしたけれどね。取り敢えずは自己紹介をお願いするよ。」
「あら？月光さんはＩＲＶＩＮＧに転せ「詳しいことは共戦ネット（共同戦術ネットワーク）で説明するから！」わ、分かりました。んんっ、では少々お待ち下さいね。」

　そう言うと彼女は下側の触手４本を器用に絡ませ、人の形に見立てるとオクトカムが起動。オクトカムにより、僅かな時間で触手の質感と形状が変わっていく。
　何がどうやってそうなったのか、実に豊満な胸を強調する服に白衣を羽織り白い長髪をなびかせる女性へと変貌し、アルビレオの人型機という予想はある意味では当たっていた。

「私はトゥアールと申します。●●●●●●●●ツインテールと幼女が大好物の科学者、とでも言いましょうか。」
「その嗜好、わざわざ自己紹介で強調しなくていいからね？・・・・・・しかし俺ツイのトゥアールかぁ。これは、荒れるかなぁ。」

　無駄だと思いつつも一応は注意を入れ、超一味とリトルチェイサーの面々と挨拶を交わすトゥアールを見る。
　彼女の持つ高い技術力は非常にありがたいものだが、原作での変態

の一言で片付けられる言動を知っていて、それを率いる立場である月光としては少し不安だった。
「変な厄介事だけは勘弁願いたいなぁ」等と思っているうちにトゥアールの共同戦術ネットワークへ同期が完了し、機体の情報がネットワーク上に追加され始める。
外部スピーカーでそれぞれへの挨拶を済ませたトゥアールには、手の空いているスピカとアルビレオに現状説明を任せ、月光自身は超達と重要な話がしたいと申し出る。例によって会話グループを分けようとした時、猫耳ツインテールのアルビレオがトゥアールの餌食になったらしい悲鳴が聞こえたが、ある程度予測できていたことだったので無慈悲に隔離する。

コンテナから出て彼女達に案内されたのは、すぐ近くにあった設計図などが広げられている如何にも研究室に必ずあるような様子のディスプレイ付のテーブル。二人は備え付けの椅子に腰掛け、月光（とベナトナシュ）はテーブルに上がると断りを入れてディスプレイにマニピュレーターを接続し、今朝届いた”Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍ”について話を切り出す。
画面に映し出したのは計画全体の概略図。しかし、バツで上書きされたり但し書きが書き足されたり等幾つかの項目が目立つ。最早、書き直した方がいいのではないかと思う程だった。

「話、というのはこれなんだけど・・・。」
「やはりその部分の事でしたかー。お二人？で話されたいこともあるでしょうから、私はのんびり資料とデータを用意しましょうかー。」
「気を使わせてしまってスマナイネ。」
「お気になさらずー、飲み物も持って来ますねー」と言い残すとコントロールルームと休憩部屋へと出かけていった。

「ハカセの事だから２０分は掛かるカナ？特に内密にしておきたい事も無いが、まずはダーカー関係から話すとしようカ。」

これらの問題はかなり深刻らしく表情は今までと比べ真剣味が増し、気を引き締め直した月光は原作との大きな差異を改めて感じることになる。

「ダーカーについては資料と前に話した通り、魔法世界でしかその存在は確認されていなかたヨ。それが先日突如この麻帆良に現れた。何故奴等が今になてここに現れたカ。その理由は分からないが、密かに手に入れた学園の調査結果と私なりの調査から、それとは別に大きな問題が出てきたネ。それも今回の計画の根幹に関わる重大な問題。」

「・・・もしかしてこの鬼神の使用について関係している事？」

概略図の中、月光が目をつけた”鬼神使用について”の項は他の項目より目立つように赤線で囲まれ、すぐ隣に「要変更」とある。

「その通り。鬼神が使えないのだヨ。これでは迅速かつ強力な巨大魔法陣の生成がとても難しいものになるネ。」

「でもそれがダーカーとどう関係しているのやら。」

「・・・ニャるほど。学園の結界だニャ。あれは確か高位の魔物とかを封じ込める力があったはず。もしかするとダーカーにも影響しているかも知れないニャ。」

「あー、つまり鬼神を開放するために結界を落とすとダーカーが湧いてきてしまうって言う事か！」

「ウム。正確には”結界が復旧すると”だがネ。」

学園の報告書によるとダーカーは結界外から常に学園内に侵入する機会を伺っており行動パターンから狙いは世界樹の魔力と見ているそうで、結界が消失した時に密かにダーカーが潜伏し結界復旧後に

活動を始めるという。
　しかしなぜ世界樹の魔力を狙い、わざわざ結界復旧後に活動し出すのか、もし予定通りＰｒｏｊｅｃｔ　Ｍを開始し結界の消失状態が長引いた時にはどう行動するか等の他、月光達を執拗に追跡してきた挙句、攻撃を仕掛けてくるといった事もあり、分からない事がいくつも残る。
　とにかく今まで魔法教師・生徒の対応で奇跡的にも被害が出ていない所で、沢山の人が訪れる学園祭にダーカーの出現は必ず避けなくてはならず、危険性を減らすためにこのまま学園結界を維持しそれに頼って計画を進めるしか無かった。
　学園側もダーカーについて全く対策をしていないという訳でもなく、学園内に潜伏している可能性を配慮し警戒を強化しているらしい。

「なんだか不思議な状態だね。最大の障害を最悪の事態を防ぐため敵にも知られずに利用するなんて。」
「ダーカーによる被害を０にする為と言うのは分かったが、鬼神の代わりはどうするニャ？」
「実はこの推測は昨日立てたものでネ。再検証や君達の事でまだ手付かずだヨ。」
「それはまた・・・。そんな忙しい時にお邪魔してしまって申し訳ない。」
「謝る事はないヨ！サンプルを手に入れる機会があたから、むしろ感謝しているぐらいネ！」

　サンプル、というの物に覚えがなく余計に悩む月光。その感謝される理由は月光達がダーカーと実弾兵器等で交戦した結果、路地のあちこちに砂状のダーカー因子を散らしていたからだった。その後の魔法関係者による浄化作業を逃れたそれらを回収し、麻帆良での貴重なサンプルとして研究に役立っていた。そうして辿り着いたのが前述の推測である。

またこのサンプルから思わぬ副産物が得られていた。それはこの麻帆良で採取した残留ダーカー因子は侵食性が著しく低下しており、日頃から世界樹の魔力の影響下にいる一般人等にはほぼ無害といえるほど弱体化状態にあった。簡易的な実験の結果からこの弱体化は恐らくダーカーの戦闘力自体にも影響を与え、その原因は世界樹の魔力であるという仮説を立て、これから本格的な研究に取り組むという。

葉加瀬がいるとは言えこうしたイレギュラーの研究の他に鬼神の代替案等、やるべき事がとても多い状況で、学園生活に左右されることのない協力者が得れるというのは超にとってもありがたい事だった。

「これも推測になるがダーカーが世界樹を狙う理由は恐らく弱体化の効果を排除する為。だがそれから先の目的は分からないネ。」
「何にせよダーカーが出てこないに越した事はない、か。」
(確か世界樹の下にはネギの父親と創造主が封印されているはず。そんでダーカーの最終目的は”深遠なる闇”の復活・・・。まさかねぇ・・・。)
「それで計画の変更についてだが・・・。」

超が何かに気付き視線を逸らす。その先にはポットやコンビニ弁当、資料やＵＳＢメモリ以外にコンビニにあるような肉まん蒸し機までカートに載せて戻ってきた葉加瀬の姿があり、時間を見ると彼女が席を立ってから３０分近く経っていた。

「この話は大勢でした方がヨロシイネ。お帰りハカセ!」
「遅くなりましたー。お話の方はもうよろしいですかー?」
「大丈夫だヨ。丁度これから計画の見直そうとしてたところだたが、折角だから休憩ネ!」

カートに載せられていた物を次々とテーブルへ移していると、コン

テナの中から説明を終えたスピカ・アルビレオ・トゥアールも出てきて合流する。
　トゥアールはオクトカムを解除し本来の姿に戻っていたが、アルビレオは何やら疲れた様子でぐったりしていた。スピカによると、あるはずの無い人型の肉体を直接弄(まさぐ)られた様な接触を受けたと言い、アルビレオが集中的にその被害を被ったらしい。
　超達は外の時間では夕食になる食事を摂りつつ、立ち直ったアルビレオも含めたサポーター達と会話を楽しんでおり、月光とベナトナシュはそれを環境音にして受け取った資料とデータに目を通していく。
　受け取ったのは”修学旅行中にしてもらいたい事”、”代替案の必須事項”と二つに纏められたファイルだった。それらファイルはそれなりの枚数であったが捲ってすぐの一枚目、それぞれファイルに書き記された概要は、いくつか項目があるものの前者は「学園祭に向けて戦力を強化せよ」という事。後者は「鬼神の代わりとなる大型機を作れ」とのこと。
　他に重要案件となるものとして”修学旅行中に～”の方にはネギパーティーの実力測定の為、要員を派遣するようにという要請も盛り込まれている。

「鬼神の代わりかぁ。当てはあるけど武装をどうするか。」
「これだけの科学技術者が揃ってるんだ。どうとでもなるニャ。」
「でもビームはなー・・・。いや、しかし・・・。」

　ベナトナシュはファイルを読み、月光は接続を保てていたデータベースである数種の設計図を見つけ、一人ドツボに嵌まる。やがて夕食を食べ終わり片付けをしていた葉加瀬が彼にとって都合の悪いことを思い出してしまう。

「そうそうー。月光さんの意識体がどのように存在しているか解析するの件ですがー、Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍの見直しが済んでからでどうで

しょうかー？」
「忘れ去ってくれてたら良かったのに・・・。」
「月光さん逃げては駄目ですよ？これは私達なりのＡＩが作れるチャンスなのですから！さぁ全てを曝け出しましょう！」
「ああ逃れられない！」

隅の蒸し機と資料などこれから必要な物以外をテーブルから片付けたが、時間をもう少し貰いトゥアールも手伝わせて急ぎ代替機を設計する
そうして出来上がり、ディスプレイに映し出されたのは６機のメタルギア。
ＰＥＡＣＥ（ピース）　ＷＡＬＫＥＲ（ウォーカー）。
ＺＥＫＥ（ジーク）。
ＳＡＨＥＬＡＮＴＨＲＯＰＵＳ（サヘラントロプス）。
ＲＥＸ（レックス）。
ＲＡＹ（レイ）。
ＥＸＣＥＬＳＵＳ（エクセルサス）。

トゥアールによって作られた即席の設計図と仕様書では、求められる機体性能や装置を積む為のキャパシティともに十分備え、戦闘能力も無名の鬼神達に迫るものだった。実機を作ってみなければ分からないが、トゥアールは「すっごい生産設備もあるのですから大丈夫です！」と自信満々である。
続く他の兵器を含めたプレゼンテーションでは、元々超は非殺傷武器がありに死者・重傷者を出さないのであれば大抵の物は許可するつもりで、メタルギアともどもゴーサインが出る。
外の時間で明日になると超と葉加瀬は修学旅行に出て連絡が困難になってしまう。そうなる前に残された時間でできるだけ形になるよう早速作業に取り掛かるのだった。

ＡＣＴ．２０　Ｇｅａｒｓ

無人機軍団の生産準備、麻帆良学園祭中の具体的な打ち合わせ、そして月光の解析を終わらせた一行。この解析によって月光自身は、月光達は魔力を直接操れない、サポーターのコアは手の平サイズの丁度どら焼きのような形であり特殊な端子１つで接続され取り外し可能なこと、コアの構造は人間の脳に近いという幾つかの結果が得られた。

ダイオラマ魔法球から出ると日付は２２日なっており超と葉加瀬は帰宅するのだが、修学旅行中のネギパーティーを観察するべく、くじ引きによって選ばれたベナトナシュが彼女達に連れられていく。月光は既にスピカのＴＲＩＰＯＤへホットスワップしており来た時と同じようにして拠点へと帰還する。

ちなみに、３―Ａに対しては超達特製の万能お手伝いロボットと紹介した上で正体を隠して同行するとの事。

麻帆良に残るベナトナシュ以外の面子はこの日から超達が帰ってくるまで定期報告を除いて魔法球内に籠もる事になっていて、その間にメタルギアと無人機の開発や運用テストを予定していた。

それらに必要な物を、２２日の夜が明け切らないうちに大学工学部の搬入口に設けられた秘密大型魔法陣を使い球内の転送室へと持ち込む。

ベナトナシュを除く全員が揃った所でまず取り掛かったのは、リトルチェイサー達との合流直後に示した方針に基づく学園祭時の具体的な計画の立案。

方針には”最終日において超の計画が成功へと向かうように見せかけつつ、原作通りに進ませる”としていた。しかし現状はそういう訳にもいかず、一旦”原作通り進ませる”点は忘れて月光達も計画成功へ全力を挙げて協力する事に。

作戦は”Ｍ作戦”と名付けられ、何度か修正や１からの練り直し等

の紆余曲折を経て超一味の計画（Project M）に付随する内容になる。
「ドンパチ賑やかに戦闘ができ、ネギパに近づく絶好の機会」として、魔法球に入った後、早い段階から作戦計画書の作成が始まっていたが、これに月光はあまり関わらず兵器開発を優先した影響もあり完成したのは5月に入ってからだった。

開発はロマンと情熱を持つ月光と、それに加えて技術力も持ち合わせるトゥアールの2人が率先して行い、MGSとMGRに登場する無人機や実在する機体は勿論の事、データベースから情報を引っ張り出し多種多様な機体と装備の開発に取り組む。
彼ら以外のサポーターはこの手伝いだったり、武器を製作・改造・修理してみたり、射撃と近接戦闘の訓練をしたり、”M作戦”の内容を細々と詰めていったりと、月光から指示がない内は自由にしていた。
なんらかのコンセプトに基づいて試作を作っては問題点を洗い出し分解され再び設計を見直して試作を作る、そんな調子だったが、ナノマテリアルとトゥアール、そして超一味の技術提供で研究開発は順調に進む。そのうちに新たな発想が生まれ新装備や機種が増えそれらを纏めて”36h型”と区分された。
これは現在のナノマテリアルの耐用寿命が36時間で、いずれナノマテリアルの進化に伴って設計・運用思想の変化する可能性に備えた区分なのだが、必要性は命名した月光本人ですら「これ意味あるのかな」と自嘲気味。
メタルギアの開発もほぼ同時進行で進められ、巨大すぎるエクセルサスの小型化を始め、自己修復能力の付加そして魔力増幅装置を積む為の再設計の他に、後回しに出来る小さな事から優先的にしなければいけない大きな事まで課題が山積していた。
特に非殺傷装備と対魔法用障壁の開発は急務で、超一味からの技術提供もあって前者はトゥアール考案の魔力を使わず特定の場所へ強

制的に転移させれる”強制転送システム”を僅か４８時間前後（魔法球内時間）で完成させる。
名前の通りＢＣＴＬ（強制時空跳躍弾）のように一発の弾丸だけで対象に作用するのでは無く、転送対象を認識するＦＣＳ・強制転送を発生させる射出体・転送される対象を半径１０ｍ以内に誘導するロッカーに似た外見のガイドビーコン、そして安全かつ正確に転送を行う為の演算装置が揃ってようやく機能するというものであった。
ＢＣＴＬと比較すると、
・大気中の魔力濃度に左右されることがない。
・発射体はミサイルから拳銃弾までと汎用性がある。
・大口径砲などは範囲攻撃も出来る。
という利点があるが反面、
・必要な装備が多い。
・迎撃されたり対象以外に当たった時は作用しない。
・口径に依るが、程々の力で投げ付けられた野球ボールからバレーボール程度の衝撃が発生する。
・発射体は安全性重視で結構柔らかく跳弾が出来ない。
・転送中の対象がいる時にガイドビーコンが破壊されるとどうなるか分からない。
この学園祭であれば許容の範囲内で、ＢＣＴＬが使用可能になったらそちらに切り替えるので最後の問題点以外、大丈夫だと判断された。
後に問題点の５項目目は実験により、対象は被弾した場所へ何事もなく戻されることが判明する。

一方で、どういう訳か超一味の技術をそのまま使ってもメタルギアに対魔法用障壁を展開させる事ができず、壁にぶち当たっていた。自己修復能力はナノクラの応用で何とか形になり、主要装甲も後述の特殊な装甲を使ったり厚くするなどしてオリジナルより重装甲化し、物理防御については第３世代ＭＢＴを圧倒できる性能を発揮していた。
だがその物理防御だけで魔法、特に一部魔法教師からの強力な魔法

その他諸々の攻撃に耐え、その後も支障無く魔力増幅装置を使用できるか不明であった。自己修復装置は停止か破壊しない限り欠損した部分をナノマテリアルによって修復するが、それに充てられるのは修復用ナノマテリアルや装甲の内側などで限度がある。

なので本体にダメージが入らない事が一番であり、何かしら障壁を展開し対策をとる必要があった。

しばらく障壁の開発は難航し、一旦自己修復能力と新装甲の開発に切り替えられたがそちらの見通しが立つ頃に転機が訪れる。

ナノマテリアルとそれで機体を修復するという点から”蒼き鋼のアルペジオ”を連想し、そこから「強制波動装甲とクラインフィールドが対魔法障壁としても使えるのではないか」と思い付いた月光により障壁・装甲開発は一気に進行し始めた。

強制波動装甲とクラインフィールドは同作品において人類に敵対する未知の勢力”霧の艦隊”が持つ防御システムである。クラインフィールドに外部からのエネルギーを受けると強制波動装甲に一定値まで分散・吸収し戦闘後などに溜め込んだエネルギーを放出する仕組みらしい。

ちなみにこれらの電源は新しく開発する新型人工筋肉の生体発電と小型ジェネレーターのハイブリッドにより賄われる予定となる。

これらを採用できると判断したトゥアール曰く、「攻撃魔法も物理攻撃も最後には物体にダメージを与えるのですから、実は大した違いはないでしょう。」ということらしい。

ただ、強制波動装甲もクラインフィールドも原作に近い形での再現には膨大な時間が必要で、学園祭に間に合うのは試作品であり一部の機体にしか搭載できない上、エネルギーの長時間の蓄積はできないので常時排出し続ける必要があった。更に排出されるエネルギーはクラインフィールドと干渉し臨界到達（クラインフィールド消失）を早めてしまうという欠点が残る。

特にエネルギー排出関連の欠点は、運用時に強力な攻撃に対してのみ発動するように設定し排出されるエネルギーとの干渉を最小限にするなどの対策でやり過ごす事になった。

これらの開発以外に、学園祭以降の事も視野に入れた計画も幾つか進行していた。

そのうちの一つが”人工人体開発計画”と命名された計画。これは茶々丸に影響されたこともあり、今後活動する上で月光とサポーター達が社会に溶け込む為の人工の身体、”義体”が必要と考えられてスタートした。

まず第一段階としてナノクラにて量産型茶々丸・量産型田中さん・ＭＧＲのサイボーグ兵を生産してデータ取りとノウハウ蓄積を行う。それと同時に生産設備だけはナノマテリ、そこからの生産物は人工筋肉など培養してＭＧＲサイボーグ兵を作り、ナノマテリアルの耐用寿命に左右されない生産方法を研究する。

なお、生産性とコストに優れたＭＧＲサイボーグ兵は無人機軍団の主力で、言わば田中さんと同じ立ち位置。同計画では開発された義体では”第一世代”となる。性能は運動性が低いといった点から田中さんの劣化版。

第二段階では前段階で得られたデータを元にサポーターたちの専用義体を生産。この義体へはクリーンルームといったホコリ等がない空間でサポーターコアを交換することで疑似ホットスワップを可能にした。

”第二世代”に分類されるこの義体は、身体能力が遥かに向上しリミッターを解除すると普通乗用車を投げ飛ばす事ができ、運動性に至ってはオリジナルの茶々丸に匹敵し一定の防御力も持つ。項にはワイヤーアームが隠されており、これまで通りジャックに接続したり物を掴んだり出来る。

皮膚の感触や体温等、人間になるべく近づけられてちょっとやそっとじゃ正体がバレることはない、と言うのはトゥアールと葉加瀬の談である。

余談だが月光の義体だけはまだ作られていない。理由は「納得のいく義体の元ネタが思い付かない」から。

第三段階ではサポーター達が実際に第二世代義体で上がった意見

を反映して仕上がったより人間に近い義体が”第二世代後期型”となる。身体が重く感じる、所々関節の動きが悪い、声がイメージと違う、といった点を改修されていた。これにより更なる高性能化がなされたがワンオフ状態となり大量生産に向かない義体となってしまう。

そこで一部機能を排除し骨格を共通化、デッサンドールのような”素体”を生産し後から外見を構成する方式を選び、生産面での効率化を図ったものを次期主力義体の”第三世代”とされる。

非ナノマテリアル製生産設備の用意が出来次第、第一世代から更新する予定だが学園祭までに十分な数は揃えれそうになかった。

一方の修学旅行は同行しているベナトナシュの定期連絡では原作通り進行し、得られた観察データも超の手に渡り、５日目の２６日に無事終了する。途中、リョウメンスクナノカミとの対決があった湖の側でプライムコンテナを発見、中身は主に西側銃火器が収められていたが、持ち帰りが困難なためハッチを閉じてそのままにしていた。

２６日の夕方には超、葉加瀬、ベナトナシュそしてメンテナンスついでで茶々丸も魔法球内で合流。

”Ｍ作戦”に投入する２０００機もの無人機の戦力配置や侵攻経路等も決まり、後はこの軍団をどう運用するかであった。

生産された無人機には月光（とベナトナシュのコア）を解析した事で得られたデータを元に作られたＡＩユニットが機種問わず搭載されているものの、その性能は機体と装備の制御や周辺状況と敵味方の識別等が可能な程度。

これに対し超一味が投入する通称、火星ロボ軍団は動力に用いている魔力がＡＩの自己判断能力に強く影響を及ぼしているようで、活性化した世界樹の魔力が供給されると更なる性能向上が見込まれていた。このロボ軍団も当初は月光らと同じ問題を抱えていたが、茶々丸の完成とそのフィードバックから十分な性能が確保されて現在に至っている。

この火星ロボ軍団の性能を目指していたが出来たのはお世辞にも同等と言える物ではなかった。特に主力となるＭＧＲサイボーグ兵のＡＩユニットは深刻で、スタートから各チェックポイントを経由しゴールまでの定められたルートを真っ直ぐ進むだけの只の餌。戦闘も進路上や攻撃を加えてきた者のみに対して行うと、このままでは学園祭最終日イベントの一般生徒達や魔法関係者に対して圧倒的不利だった。

そこで、対策として一定の行動プログラムを記憶させた無人機の統率に専念する”オペレーター”をサポーターの中から選抜し、リアルタイムストラテジーゲームよろしく、軍団を運用して戦力の強化を図る事になる。

２０００機全てを高度に運用するにはオペレーターは３人必要とされ、月光とリトルチェイサーの３人が「前線でドンパチしたい」という意向があり、アイラ・青葉・トゥアールがオペレーターを担当することで落ち着く。

ちなみに、アイラはＩＲＶＩＮＧから専用義体へホットスワップし活動拠点に本部（ＨＱ）を設け、実質的な総司令官の様な役割となる。また月光は自らの遊撃部隊を率いつつ、時には本隊と合流して前線指揮官として立ち回る予定だった。

軍団運用の件は目処が立ち準備も進んで一段落し、超一味が揃っていることもあり双方の作戦を纏めてみると次のようになった。

・最終日正午

超と葉加瀬は魔法陣とその他改造を施した飛行船に乗り込み密かに高高度へ上昇させる。茶々丸は大学工学部棟の研究室から電子戦の準備、龍宮は行動開始時間まで備える。

月光達は活動拠点の軍団本部を稼働させ、作戦開始。両軍団の部隊を水中に転送を始めて準備をする。強制転送システムのガイドビーコンを十分な適切な位置と広さがあり、ＢＣＴＬの跳躍先となる麻帆良ヶ丘公園に設置。

・１９：００
要となるメタルギア６機をそれぞれ中心にした火星ロボ軍団の６個中隊２７００機（＋予備６００機）は、学園警備システムへの最低限の干渉を平行して行う茶々丸の指揮の下、図書館島へ掛かる橋の両サイドに３中隊ずつに分かれて上陸、各魔力溜まりへ進軍を開始する。
無人機軍団も同数の中隊に編成されそれぞれの火星ロボ中隊の予備戦力となり、湖岸にて待機。作戦進行に大きな障害が発生した場合は独立小隊と対処。
龍宮、ＢＣＴＬ使用可能になるまで強制転送システムにて強敵を足止め。
・１９：３０頃
世界樹の魔力が高まると予想され、ＢＣＴＬ使用可能に。一気に攻勢を強める。
・～２０：００
各魔力溜まりを制圧。魔法の発動まで各拠点の維持。
そして世界樹を用いた強制認識魔法を発動されれば作戦となる。
月光とリトルチェイサーは”Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍ”開始時からそれぞれの遊撃部隊と共に各戦線を転戦。サポーターは軍団本部に配備されオペレーター担当など後方支援として無人機に指示を出したり各戦線の火星ロボ部隊の支援をしたりといった具合に、Ｍ作戦自体、損害や妨害に対してのバックアップ的な性質が強かった。
また超は万全を期すため原作同様”罠”を仕掛けるのだが、作戦開始前にネギパーティーが”罠”に嵌まり姿を予定通り進行出来る場合をパターンＡ、そうでない方をパターンＢ、として想定していた。
もし作戦が失敗させられたとしてもそれはネギとその仲間たちに相応の力が備わっていて、その場合超は彼らが未来を間違いなく変えるだろうと見ており、パターンＢであっても望む所のようだった。
作戦の成功または失敗後の打ち合わせ、ナノマテリアルを活用した生産計画、学園祭中の行動の確認を済ませ、装備類の改良や作戦計画書の修正を続けている内に５月になっていた。

ネギの弟子入りテストや南国リゾートへの一泊二日の旅行といったイベントを経た5月中旬。
超との約束であるネギパーティーの実力測定、そして彼らが巻き込まれる（もしくは巻き起こす）イベントの前兆を見逃さないため、夜間警備ローテーションとは別に修学旅行編後から新しく設定されたネギパーティー観察ローテーション、通称ネギローテ。これまでのイベントでも主にネギを対象に観察が行われていたが、一々指名するのが大変だから、と言う理由でアイラが組んだ。
そして今日に割り振られたアルビレオは、このネギローテが組まれて数日後に開発された”対魔法使い光学迷彩”を装備し、3―A教室を屋外から観察を行っていた。この日の教務が終わるとネギはエヴァンジェリンと一緒に学校を出ていく。
今日の天気は夕方から雨が降り始め、未明にかけて雷を伴う大雨が予想されており、今にでも雨が降り出しそうであった。

『ネギパメンバーがぞろぞろと尾行し始めたニャ。このままログハウスみたいニャね。私も追跡するニャ。』
『今の天気とこの様子。月光さん！あのイベントが来たのではないのでしょうか!?』

校舎から出てきた後のシチュエーションが原作の状況と合致している事に、数日前にある作戦を立案した青葉は興奮していた。
中継される映像には神楽坂明日菜・朝倉和美・宮崎のどか・綾瀬夕映・近衛木乃香・桜咲刹那・古菲らがかなり雑な尾行をしており、親

子連れにその様子を見られる場面が映る。この後、起きるであろうネギパーティーが直面する大きな事件の前兆が揃っていた。

『間違いないだろうね。よし、”嵐の中で輝いて”作戦を発動する！Ｇｅａｒｓ発足後の初の作戦、確実にこなしていこう！それじゃあ行動開始！』

号令を切っ掛けにサポーター達が行動を始める。

”Ｇｅａｒｓ”、月光達の組織名である。今後、組織立って行動するにあたり名前を決めておいた方が都合がいいと言う事で、数日前に命名会議が開かれてた。その際に一悶着あったが、それはまた別の話。

そして数分後、準備が整い雨脚が徐々に強まる中、月光達は拠点を発つ。

時を同じくして、帰宅途中の那波千鶴と村上夏美が傷つき行き倒れていた黒い子犬を保護し、ネギパーティーはエヴァ宅の”別荘”に到着するのだった。

『今度から命名規則作って、こういう名前は無し。・・・かっこ悪いので。せめて英語の方が良かったと思う。』

『同意、だけど今回ばかりは仕方ないよ。組織名の時みたいにならないよう、トゥアール提案のくじ引きをやり直しも含め６回もした結果がベナトナシュのだったんから・・・。』

『すごい確率ですよねぇ、まるでソルティス神のお導きみたいです！絵師繋がりとかが影響あるのでしょうか？』

『いやぁ～提案した私が言うのも何ですが、こんな爪楊枝のくじ引きにそんな事はないでしょう～。』
『何故駄目ニャ。シチュエーションを踏まえたいい作戦名だと思うニャ』
『でもまぁ、オペレーション”マッピング”のスピカちゃんのよりはマシ、かニャ？』
『フニャ!?あれは只のネタ枠ニャ！』

ＡＣＴ．２１　嵐の中で・・・

激しい雷雨が襲う夜の麻帆良学園。
その一区画に広がる緑地を地上と上空の二方を進む影があった。
森の中を進む一方は、触手を枝に絡ませて器用に木々の合間をすり抜けていくトゥアール、今回の作戦で使う装備の他、リトルチェイサー達とサポーターが宿った機体を有人と定めて、新たに開発した完全無人機型ＴＲＩＰＯＤ　３機をそれぞれボディユニット後部の手摺りに、青葉を機体上面の定位置に、と小型機組を載せて走る月光。
もう一方の杖に跨り森の上空を行くネギ・小太郎・カモは若干の距離を取ってほぼ並走しているＧ（月光）ｅａｒｓ（達）組に全く気付いておらず強風雨の中を飛ぶ。
速度を落とさず真っ暗な森を進む彼らの先には、雷光で浮かび上がる世界樹の大きなシルエットがたたずんでいた。

『いやぁ、何とか戦闘開始前に追い付けて良かった良かった。』
『女子寮から出てきた所を追っていたら多分間に合わなかったと思う。』
『水も滴るいい男の子が二人！いいですねぇ、いいですよぉ！』
『ネギコタ最初の共闘ですから記念に何枚か撮っておきますね！』
『隊長ー、この二人どうすればニャ？』
『ここは私に任せて。』

ツッコミ疲れたアルビレオが助けを求め、それを代わりにアイラが引き受けて注意をしようとするも、スキンシップとその様子を撮影されるという反撃を受け無力化されてしまう。開放されたアイラは完全に涙目になっていた。「もうすぐ世界樹下のステージに着くから準備して」と伝え、特に例の二人には「後で反省会ね」と付け加えた。

『最初の自信は何処にいったのやら・・・。』
『エラー。よく聞き取れませんでした。』

悪天候下にも関わらずネギ達の飛行速度は思いの外速く、徐々に差をつけられ始める。
しかし、その差もすぐに意味が無くなった。森林の密度が薄くなってきた頃、頭上のネギから十数条の光の筋が進行方向に向けて撃ち出される。

『むぅ～？あれは”戒めの風矢”ですか。』
『牽制攻撃だと思う。目的地はもうすぐなので。』
『あー、見えてきた。あそこが大学部のライブ会場だね。』
『ここから手筈通りニャね。スピカちゃんは右、ベナト君は左ニャ！』

手摺りに捕まるリトルチェイサー３人はそれぞれ無人型ＴＲＩＰＯＤを１機ずつ従え、月光に積み込まれている装備の中からコートを持つと飛び降り、会場と森林の間の広場を突っ切り各自の持ち場へと向かって行った。残る月光達は目立たないよう広場を迂回して世界樹の異様に太い根に隠れてデータ収集の準備を進める。
会場内の客席ではネギ・小太郎と白・赤・緑の少女達との戦闘が始まっており、ステージ上に３―Ａの人質８人と黒ずくめに変わった髪型の壮年男性がいた。原作で言うところのヘルマン卿襲来イベントである。
当初、ネギローテを基本に多少増員する程度で、特に干渉することもなく観察に徹する予定だった。しかし、青葉の発案で”嵐の中で輝いて”作戦が準備され戦力も大幅に増やしていた。
そして作戦の目的はヘルマンと共にやって来たスライム３人娘、ぷりん・すらむぃ・あめ子を仲間に引き入れる事。彼女達を引き入れようとする理由は単純にスライムに興味があったから、という単純なもの。
未来を知る転生者という立場であるため、超一味には秘密裏に進行し、作戦後はスライム達を「偶然仲間にした」、ということで紹介する予定だった。

回収はリトルチェイサーの担当となったが一つ問題があった。それは、修学旅行にてＴＲＩＰＯＤは３―Ａ生徒には葉加瀬が作ったと説明されていた為、この場でＴＲＩＰＯＤを目撃されると彼女達の関与が疑われかねない事だった。他のサポーターや無人機で代役を考えるも幾つか欠点があり、今回はＴＲＩＰＯＤを二体合体させた人型仔月光と、それにサイズを合わせたコートを着ることで臨むことになっている。

全員の配置が完了した頃、ステージではネギが”封魔の瓶”を使ったところだった。しかし、ヘルマンによる明日菜の魔法無効化能力を利用した細工によって防がれてしまう。

≪よーし、それじゃ作戦の最終確認。戦闘の終盤、スライム達が封印された瓶が会場のどこかに落ちるはず。隙を見計らい一番近いリトルチェイサーがこれを確保し速やかに離脱する。もし誰かが持っていた場合、強行か中断かはその都度指示を出す。了解か？≫

≪ＬＣ１、了解だニャ。≫≪ＬＣ２、了解したニャ！≫≪ＬＣ３、了解ニャ。≫

≪よし。それじゃ瓶から目を離さないように。アウト。≫

根の影から戦闘データを収集しつつ、作戦のおさらいをする月光。彼の上空と少し離れた場所にはそれぞれ青葉とトゥアールがおり、こちらも同じく作業を行っていた。

『はぇ～。よく組織されてますねぇ～。』

『と言ってもノリと勢いだけなので。もっと言えば共戦ネットの方が、無駄な情報処理をしなくて済むと思う。』

『まぁまぁそう言わずに。こういうのは雰囲気が大切ですから。』

『青葉の言う通り。何事もモチベーションは重要だからね。』

アイラの指摘を受け流した月光は、ネギ・小太郎に猛攻を加えるへ

ルマンからスライム娘達が作った3つの水牢の内、中央の最も大きいものに視線を移す。
そこにはネギパメンバーの和美・のどか・夕映・木乃香・菲そして先程捕まったカモが閉じ込められていた。だが、ただジッとしているような彼女達ではなく、ヘルマン側の警戒が緩んでいる事を利用して水牢から自力での脱出を試みようとしてる様で円陣を組んでいた。
そんな彼女達を見て水牢中での呼吸ついて考察をしていると、客席の方から大きく鈍い衝撃音が響く。正体を明かしたヘルマンへの、我を忘れ魔力の暴走状態にあるネギの一撃によるものだった。蓄積されていくデータ量が跳ね上がるが想定通りで、打ち上げられたヘルマンに対する激しい追撃もしっかりと観察する。一時的な、それも制御しきれていない膨大な魔力ではあるが、ネギが持つ潜在能力が垣間見える貴重なデータだった。

その後、隙を突いたネギパメンバーの脱出と、正気を取り戻したネギと小太郎の連携により、ヘルマン達は遂に撃退される。ネギと魔界へと帰りつつあるヘルマンだったが、彼らを尻目にＧｅａｒｓの面々が行動を起こす。月光らにとってここからが肝心な場面であった。

『”封魔の瓶”の位置、確認。スピカが最も近い。』
≪各員に目標の位置を伝達する。ＬＣ２、貴隊が最寄りである。回収に向かわれたし。他の隊はプランＢに備えよ。≫

場の注意が逸れているうちに未だステージの隅に放置された”封魔の瓶”に対し作戦は山場を迎える。
待機位置から目標まで思いの外、距離があったようで、”封魔の瓶”をスピカが手にした時にはヘルマンは魔界へと去り彼の残した高笑いも聞こえなくなっていた。
ネギ達の注意が逸れる前に急いでその場を離れようとするスピカだったが、

「あっ、ネギせんせー！瓶がー！」

客席を何列か超えたぐらいでのどかに見つかってしまう。

≪ニャニャ!!?発見されたニャ！≫

≪全員プランＢにシフト！退散するぞー！≫

「何あれ？」「なんやけったいやな～」「彼らの仲間でしょうか？」等、ネギパメンバーの多くが話していたが、すぐに行動を起こす者もいる。

「小太郎君、まだ動ける？」

「捕まえるんやろ？あんなんやったらヨユーや！」

「夕凪の代わりになる物があれば、手足のような物を切り落とせるのですが・・・。」

ネギ達の行動は意外にも遅かった。不慣れな人型仔月光形態で更にコートを着ているスピカの逃げ足はあまり速くない事に加え、戦闘の疲労等もあってか急がなくてもいいと判断したらしい。とは言って、逃げ切れる雰囲気ではなく月光らは対応策であるプランＢへ移行する。

このプランＢは発見された際の撹乱・逃走用の作戦で、全員の装備もこれに合わせられていた。特に月光はカーゴスペースの各種グレネード、左側のグレネードランチャー型自作ＲＷＳには発煙弾６発を装填、右側のＭ２　ＲＷＳはＰ（プラットフォーム）Ｆごと新開発の”増設ワイヤーアームＰＦ”に換装し、これらのＰＦ両端には念のために持って来た発煙弾の予備弾がポーチに詰められて取り付けられていた。

『無線通信終了！ＲＷＳセーフティ解除！』

『やっぱり無線は不要だと思う。あ、増設のワイヤーアームは私が操

作するので。』

呆れ気味のアイラは増設ワイヤーアームでカーゴスペースからスモークグレネードを取り出して投擲する。

手筈では”封魔の瓶”を確保したサポーター以外は撤退の支援をする事になっており、搭載能力の低い青葉とトゥアールはそれぞれ索敵と目標回収機の収容を担当する予定であった。天候も回復してしまい荒天に乗じての逃走はできなくなってしまったが、それでも装備と地形を活用すれば十分に撤けると踏んでいた。

『グレランは3発ずつ使っていこうかな。狙いはどうしよう。』

『ベナト君はステージに残ってる子達の近くにスモークを投げるニャ。私はスピカちゃんとネギ君達の間ニャね。』

『なんでもいいから早くするニャ!うううう、慣れてニャいから動きづらいニャ!』

『うーん、じゃあスピカの手前辺りでいいかなぁ。』

ネギ・小太郎と手頃な長さの鉄パイプを持った刹那が少し遅れてスピカに迫った時、双方の間にアルビレオとその随伴機のスモークグレネードが転がってくる。初めは何かと思っていたネギ達だったが噴出する白い煙で煙幕だと理解した。その直後に彼らとステージにいるメンバーの間にもベナトナシュやアイラのスモークグレネードが転がり込み、ネギ達は勢い良く出る煙に包まれると軽い混乱状態に陥る。

「ゲホッ何やこれ!?煙幕か?」

「くっ、他に仲間が?闇討ちがあるかもしれないので、気を付けて下さい。」

「ネギー!大丈夫ー?」

「はい、大丈夫です!今、魔法で煙を・・・。は・・・はっくしゅん!!」

魔法を使おうとしたネギだったが煙幕で鼻を刺激されたのか、魔法より先に出た魔力を伴うくしゃみで彼らを覆っていた煙はほとんどが吹き飛ばされる。なお、隣りにいた小太郎と刹那は至近距離からこれをモロに喰らい下着姿になってしまっていた。

『ムムム、スモークを使えばネギ君のくしゃみを誘発させれそうですね。しかし小太郎君、いい体してますよ～。うぇへへへ～。』

『はいはい、くしゃみについての考察はありがたいけど、さっさと回収地点に向かって。ほら行った行った。それとリトルチェイサーの皆は引き続き現在地で待機。後で回収しに行くから。』

『グレネードは全て投げても良いかニャ？』

『大丈夫。渡したのは全部ナノマテリアル製なので。』

指示を出し終えた月光は撃ちそびれていたグレネードランチャーを発射するも、客席外縁まで逃げたスピカより手前を狙った2発はそれぞれバラけてしまい、スピカの直ぐ側とそれよりも奥に煙幕が展開されてしまう。どうもこれまでの機動でグレネードランチャーの固定が緩み、ＦＣＳと実際の照準にズレが発生してしまっているようだった。

『やっぱり即席武器っていうのは駄目だねぇ。』

『でも見晴らしの良い広場をカバーできたので。結果オーライ。』

『そんじゃまぁ、第2射はちょい右かな。発射！』

『月光さん！ネギ先生は空から捜索するようですよ！』

服が脱げた小太郎と刹那にペコペコ謝りながら杖に跨るネギ。しかし数ｍスピカの後を追うように上昇した所で、またしても大きくバラけてしまったグレネードランチャー第2射の内の1発が運悪く直撃してしまう。

大した怪我は無いようだったが上空で煙幕に再び包まれてしまい慌てて着陸した事で、図らずもスピカが林に到着するまでの時間稼ぎ

に成功するのだった。
　増設ワイヤーアームでスモークグレネードを投げるアイラだったが飛距離が足らず、ネギパーティーより手前に落ちて無意味な所で煙幕が展開される。どうやっても届かないと判断したアイラは残るスモークグレネードを青葉に渡し、空中から投下してもらう作戦に切り替えた。
　そんなこんなでネギパーティーを足止めしていると、トゥアールはスピカと”封魔の瓶”を回収し、空を行く青葉と共に予め指定していた撤収地点へと一足先に向かい始める。これに続いて月光とアイラも分散しているベナトナシュ・アルビレオ、そして各自の随伴機の収容を済ませると撤収地点へと引き上げるのだった。

「ネギ、あんたホントに大丈夫？」
「少し痛かったです。けどマスターや茶々丸さんとの手合わせに比べたらなんて事ありません。」
「しかしネギ先生、良かったのですか？あの瓶を取り返さなくて。」
「はい、今の状態では深追いはとても危険ですし、このまま皆さんを置いては行けませんから。」
「おっさんの雇い主の手下とか、そんなんやったらまだどっかにおるかもしれん。とにかく千鶴姉ちゃんを部屋に連れて行かんとな。」
「そうそう、小太郎君。その後で一緒に来て欲しい所があるんだけど・・・。」
「あー。報告せなアカンのやろ？俺の脱走の件もあるししゃーないなー。」
　何故か銀色の砂の様な物が所々に積もった会場の後片付けを済ませたネギ達は、全裸にタオルケットだけのネギパメンバーを含む生徒を連れて一旦寮に帰ることになった。会場から歩き出した所でネギ

の肩に戻ってきたカモはある物を持って来て、小太郎に気遣われている一般人の千鶴に聞こえないよう小声で話す。

「兄貴、ちょっとこいつを見てくれい。」

「さっきの煙の発生源？あれ、何か書いてある。”Ｇｅａｒｓ—Ｍ１８　ＳＭＯＫＥ　ＷＨＩＴＥ”？」

カモがネギに渡した物は会場の後片付けの際に銀砂（不活性化ナノマテリアル）の中で唯一残っていたスモークグレネードだった。リトルチェイサー達が投げた物は全てナノマテリアル製で間違いなかったが、アイラが投げたのだけは、実は非ナノマテリアル製だったのだ。軍事関連は明るくないものの、ネギの持つスモークグレネードを観察していた夕映が意見を述べる。

「軍隊で使われている発煙手榴弾、スモークグレネードだと思います。これは手で投げる物なのでネギ先生に直撃したのは恐らく別の物かと。」

「煙幕に応用できる魔法はいくらかあるし、魔法薬を使えば誰でも使えるはず。」

「兄貴の言う通り、煙幕を張るってえのは簡単な部類のはずだぜ。それすら使ってないとなると、こりゃ相手は魔法が扱えねんじゃねーか？」

「呪いを掛けられてる今のエヴァンジェリンとは違うかもしれんが。」と身近な人物を挙げるカモ。以前エヴァンジェリンが起こした事件の際にも学園結界によって魔法が封じられながらも、一時は魔法薬を使ってネギに対抗していた。この魔法薬を入れる物は薬が必要に応じて作用するなら何でも良くて、試験管やフラスコの他に綺麗に洗った空き缶なんかも使え、作りやすい・扱いやすいという事以外に一般人に気付かれにくいという利点もあったりする。

裏、魔法に関わる者であれば一般人からでも分かるような痕跡を残

してしまう科学の産物を使うのは、何か余程の理由があってのことだとカモは踏んでいた。

「ま、今日の事はその辺りに詳しい奴等に任せちまえばいいだろよ。この銀色の砂にしてもな。」

「これ、綺麗だけどホントに何かしらね？砂金ならぬ砂銀？」

「お金になるアルか？」

「砂金で億万長者って聞いたことがないし、そもそも本物の銀かすら怪しいからどうだろうね～。」

ネギパメンバーがそれぞれ不活性化ナノマテリアルを入れた瓶を回し見しながらその正体を推察する。超は学園側に足が付く心配は無いとしてナノマテリアル製の物品を使うことを勧めており、弾薬・消耗品のほぼ全てがこれに置き換わっていた。実際、学園側とネギパーティーが銀の砂の正体を知るのはもうしばらく先の事であった。

その頃、会場から２００ｍ程に位置するＧｅａｒｓ撤収地点。

『よし全員揃ったね。追手も無いみたいだし後は帰るだけ、と。』

『トゥアール、瓶をこっちの箱へ。』

殿を務めた月光がこの場に到着しＧｅａｒｓ全員の合流を確認する。トゥアールのカーゴスペースに収容されていた”封魔の瓶”は、青葉の着陸スペースを除き荷台と化したＩＲＶＩＮＧ後部上面の一部、スポンジが詰めて固定された小箱へ丁重に収められた。ネギパーティーの追跡が無い事を改めて確認すると、ようやくといった具合に面々は一息つく。

瓶を奪取する大役をこなしたスピカも、コートを片付けると行きと同じ様に手摺りで待機姿勢を取り、安心した様子だったが一つ気掛か

りな事があり、アルビレオに話しかける。

『封魔の瓶、ネギ君達にとって実はそんなに重要じゃニャかったり？』
『うーん、黒幕を聞き出す貴重な情報源のはずニャ。もしかしたらさっきの戦闘が響いているかも知れないニャ』
『何はともあれ追ってこないなら好都合だよ。迎撃手段は無いし、スモークも通用するとは限らないし。』
『いつでも手軽に無力化できる方法を用意しておく必要がありますかぁ。トゥアールー、何か案はありませんかー？』
『ん～そうですね～。手っ取り早いのは強制転送システムですが、それ以外ですと気絶させるか眠らせるか、でしょうか？』
『M作戦向けの非殺傷装備の候補から幾つか使えるのがありそうかな。』

作戦は成功。無事に瓶を確保し残るは拠点への帰還という時、全員気が抜け半分ほどがデータベースを漁る等でリラックスムードだった為に、センサーとレーダーが拾うある反応に誰も気付かずにいた。